



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	司法面接が出来事の報告に及ぼす影響
Author(s)	井上, 愛弓
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11179号
Issue Date	2014-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k11179
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55569
Type	doctoral thesis
File Information	Ayumi_Inoue.pdf



平成 25 年度 博士論文

司法面接が出来事の報告に及ぼす影響

北海道大学大学院文学研究科
人間システム科学専攻

井上愛弓

目次

序章　はじめに	4
第 1 章　序論	7
1-1. 司法に関する面接法	7
1-2. NICHD ガイドライン	11
1-3. 面接の繰り返しの功罪	13
1-4. 本稿の目的	17
第 2 章　司法面接と想起の繰り返し	21
2-1. 実験 1：司法面接を繰り返した場合に報告内容に及ぼす影響	21
2-1-1. 目的	21
2-1-2. 方法	23
2-1-3. コーディング	27
2-1-4. 結果	30
2-1-5. 考察	43
2-2. 実験 2：面接を繰り返した場合に 1 度目に司法面接を行うことが 報告内容に及ぼす影響	49
2-2-1. 目的	49
2-2-2. 方法	50
2-2-3. コーディング	53
2-2-4. 結果	53
2-2-5. 考察	60

2-3. 実験 3：面接を繰り返した場合に 1 度目に統制面接を行うことが 報告に及ぼす影響	63
2-3-1. 目的	63
2-3-2. 方法	64
2-3-3. コーディング	65
2-3-4. 結果	65
2-3-5. 考察	72
2-4. 同一面接者による面接の繰り返しと異なる面接者による面接の 繰り返しの比較（実験 1 から 3 の再分析）	74
2-4-1. 目的	74
2-4-2. 方法	75
2-4-3. 結果	75
2-4-4. 考察	79
 第 3 章 実験 4：司法面接の繰り返しの発達の検討 ..	83
3-1. 目的	83
3-2. 方法	83
3-3. コーディング	86
3-4. 結果	91
3-5. 考察	102
 第 4 章 総合考察	107
4-1. 研究結果のまとめ	107
4-2. 司法面接の効果	109
4-3. 司法面接と想起の繰り返し	112

4-4. 課題と今後の展望	114
終章 さいごに	115
謝辞	117
引用文献	118
付録	124

序章 はじめに

本稿は、司法面接が出来事の報告に及ぼす影響について検討したものである。

司法面接（Forensic interview）とは、主に司法や福祉の場で用いられ、証拠価値のある情報を得ることを目的とした面接である（仲，2012）。面接には、臨床心理士など専門家によるカウンセリングを目的としたものや、刑務所・少年鑑別所などで心理技官によって行われるようなアセスメントを目的としたものがある。これらの面接で扱われるのは、主にクライアントや対象者の気持ちや考え（主観的事実）であり、共感的・受容的に傾聴し、時には面接の中で変化させるように導くことが必要となる。これに対し、司法面接は、情報を収集することを目的とし、実際に目撃ないし体験した情報（客観的事実）を扱うものであり、正確に被面接者から情報を引き出すことが重要となる。

司法面接の特徴として、大きく以下の2点が挙げられる。1点目に、面接方法がガイドライン等によって明確に示されており、また、高度なテクニックを要するものではなく、利用しやすいということである。本稿では、司法面接のガイドラインとして日本でも普及されつつあるNICHD（NICHD: National Institute of Child Health and Human Development）ガイドラインを使用する（NICHDガイドラインの詳細については、第1章で説明することとする）。NICHDガイドラインは、諸外国における多くの先行研究によって、その効果が実証されているものである。2点目に、1回の面接で全てを聴き取ることを目標としているということである。司法面接では、面接を全て録音・録画し、また、情報が必要な関係者がバックスタッフとして面接をモニタリン

グすることで、1回の面接だけで情報を聴き取ることを原則としている。また、そこで得られる被面接者の証言を正確に保存するためにも、録画・録音は必須とされている。

本稿の目的

司法面接は、日本においても近年、児童相談所等を中心として、子どもに対する被害確認面接の場面などで普及しつつある。しかし、司法面接のガイドラインは、諸外国における研究でその効果が実証されているとはいえ、日本において司法面接の効果について検討した研究はまだ数少ない。さらに、司法面接では面接は1回のみ実施することが推奨されているが、面接を繰り返すことの功罪についてはまだ議論の余地があるとする先行研究もあり（e.g., La Rooy, Katz, Malloy, & Lamb, 2010）、司法面接の効果と、面接の繰り返しとの交互作用については検討が必要であると考ええる。

本稿ではまず、これまでの面接法研究について概観し、本稿で扱う司法面接とその他の面接を比較することで、司法面接が被面接者の報告内容に及ぼす影響について検討する。また、面接を繰り返すことの功罪について先行研究を概観し、面接を繰り返した場合に司法面接が報告内容に及ぼす影響について検討する。

本稿は、4章から構成される。第1章では、まず、これまでの面接法研究及び面接の繰り返しに関する先行研究について概観する。また、本稿で使用する司法面接の手法である NICHD ガイドラインについて説明する。第2章では、面接を繰り返した場合に、NICHD ガイドラインを用いた面接が出来事の報告に及ぼす影響について検討し、その他の面接と比較することで、NICHD ガイドラインの効果について調査す

る。第 3 章では，被面接者の記憶方略の違いによって，NICHD ガイドラインを用いた面接を繰り返すことが報告に及ぼす影響について検討するとともに，司法面接の効果を発達的に検討する。第 4 章では，最後に，前 2 章での実験結果を踏まえて，司法面接が出来事の報告に及ぼす影響について総合的に考察する。

第 1 章 序論

1-1. 司法に関する面接法

情報収集を目的とする面接場面では，面接者の持つバイアスや，目的（引き出したい情報等）により，被面接者の報告が歪められてしまうことが度々ある。そのため，報告を不正確にする要因をなるべく排除し，記憶の想起を促進するような，情報収集に焦点を当てた面接方法が必要とされた。そこで，これまで正確に情報を聴き取るための手法として，さまざまな面接方法が開発されてきた。以下では，代表的なものをいくつか紹介する。

（1）主に目撃者からの情報収集を目的とするもの：認知面接法

主に目撃者を対象として，正確な情報を聴取するために開発された面接法で代表的なものに，Geiselman らが開発した認知面接法（cognitive interview）がある（Geiselman, Fisher, Mackinnon, & Holland, 1985）。認知面接法は，多くの情報を引き出すために，様々な記憶想起方略を利用した面接法である。①悉皆報告（些細なことでもすべて報告してもらう）や，②文脈復元（視覚・聴覚・嗅覚・触覚的な情報を含む，出来事の文脈を再現してもらう），③逆向検索（出来事を逆順で思い出してもらう），④複数視点からの想起（犯人からは何が見えたか等を思い出してもらう）などがある。認知面接法についての諸研究をレビューした越智（2002）によると，認知面接法は，正確に多くの情報を聴き取るための方法として，7 歳児から高齢者までに対して有効であることが示されている。

（2）主に加害者からの情報収集を目的とするもの：PEACEモデル

虚偽自白の問題を受け、面接技術の向上を図るために、一定の証拠を得ている捜査機関が被疑者から正確に事件の情報を聴き取る面接法として開発されたものに、PEACEモデルがある（仲，2012）。これは、被疑者取調べという場面で、行き過ぎた尋問や虚偽自白の問題が生じたことから、それらの問題に対処すべく情報収集に焦点を当てた面接法である。この面接法では、①計画と準備（**Plan and Preparation**）、②説明と引き込み（**Explanation and Engagement**）、③アカウント（供述あるいは説明）（**Account**）、④終結（**Closure**）、⑤評価（**Evaluation**）という5つの様相を含んでいる。①計画と準備の段階では、面接者は供述以外のあらゆる証拠を収集し、面接のどの時点でどの証拠を被疑者に提示するか、計画を立てる。②「説明と引き込み」の段階では、面接者は被疑者と信頼できる関係性を築き、面接の目的を提示するとともに、面接に関する説明や警告を行う。③アカウントの段階では、面接者はオープン質問（被面接者に自由報告を求める質問）を中心に面接を進め、誘導することなく供述を聴取する。④終結の段階では、面接者の持っている情報を被疑者に提示して矛盾を突くなどし、さらなる供述を求める。⑤評価の段階では、得られた情報について吟味、評価を行う。

面接で使用される質問は、原則としてオープン質問を主体として進められていくが、このモデルには、まだ被面接者から自発的に報告されていない情報であっても、面接者が持っている情報を提示して矛盾を突くことができるという段階が含まれている。捜査機関が持っている情報を、どの段階で、どの程度まで示すかが重要となっており、被疑者の有罪性を強く示唆する証拠を用いてさらなる情報を引き出す

場合もある。

(3) 主に被害者（特に子ども）からの情報収集を目的とするもの：

MOGP, NICHD ガイドライン

被害者からの情報が重要となってくるケースとして、性犯罪が挙げられる。なぜなら、性犯罪の場合、犯罪被害に遭った直後でない限り、物的証拠が残っていないケースが多く、被害者からの証言が唯一の証拠となる場合が多々あるからである。しかし、被害者の証言が重要となるばかりに、被害者からの誤った証言による冤罪が生じる可能性もある。実際に、1983年にカリフォルニア州で起きたマクマーティン事件では、幼稚園で多くの幼児が性被害の訴えをし、複数名が逮捕されたが、裁判の過程で子どもの証言は面接したカウンセラーの誘導的な質問によって導き出されたものだということがわかり、逮捕者全員が無罪とされている。こうした問題を受け、特に子どもから正確に情報を聴き取るためには、その被暗示性の高さから特別な配慮が必要であると考えられ、各国で子どもに対する面接法のガイドラインが開発されるようになった。

よき実践のためのメモ（Memorandum of Good Practice）

英国内務省・英国保健省（1992/2007）では、子どもに対する面接法として、「よき実践のためのメモ」（MOGP: Memorandum of Good Practice）を導入した（ただし、現在では、ABE: Achieving Best Evidence in Criminal Proceedingsに改定されているが、詳細については後述する）。このガイドラインでは、①ラポールの形成、②自由報告、③オープン質問を中心とした質問、④クロージングと、段階を経て聴き取

りを行うことが提唱されている。①ラポールの形成の段階では、面接者と子どもとの間にリラックスした関係を築き、面接の目的を告げる。またグラウンドルール（面接における約束事）を理解してもらう。グラウンドルールとは、事実だけを話す・嘘をつかない・わからないことは「わからない」と言う、という3点である。②自由報告の段階では、「何があったのか話してください」のような教示により、子どもに、自由に、自発的に出来事を語ってもらう報告形態を取る。③オープン質問を中心とした質問の段階では、答えの範囲が限定されないオープン質問（いつ・どこで・どのようになどのWH質問）を行い、その後、答えが「はい・いいえ」や「AかB」に限られるようなクローズ質問へと段階的に進める。④クロージングの段階では、子どもが語った内容を子どもの言葉で確認する。また、面接への協力に対する感謝を伝え、中立的な話題で終了するよう配慮するなど子どもへの事後的なケアへつながる対応をする。MOGPでは（a）子どもに質問するのではなく、子どもの話を聞くこと、（b）子どもが出来事について自由報告している時に決して妨げてはいけないという2つの原則を掲げ、自由報告の重要性を強調している。

NICHD ガイドライン

さまざまな面接法が開発されてきた中で、近年日本で児童相談所などを中心として普及されてきている面接法で、主に司法場面や福祉場面で利用されているものとして、Lambらにより開発されたNICHD（NICHD: National Institute of Child Health and Human Development）ガイドラインがある（Lamb, Orbach, Hershkowitz, Esplin, & Horowitz, 2007）。このガイドラインでは、オープン質問を中心として、正確に

情報収集することに焦点が当てられている。具体的な発話例が明示されることで利用されやすく、多くの国々で一定の訓練を受けた場合の効果が実証されている。本稿における実験では NICHD ガイドラインを使用しているため、具体的な実施方法については次節で述べる。

1-2. NICHD ガイドライン

子どもから正確な情報を聴き取るための面接手法として、欧米を中心に、さまざまな司法面接の手法が開発されてきた（e.g., Aldridge & Wood, 1998 仲他訳, 2004）。NICHD ガイドラインは、司法面接の 1 つとして位置付けられる。このガイドラインの使用によって、正確な事実が引き出せることは、多くの研究によって支持されている（Lamb, Orbach, Hershkowitz, Horokowitz, & Abbott, 2007; Lamb et al., 2009; Orbach et al., 2000; Sternberg, Lamb, Orbach, Esplin, & Mitchell, 2001）。

NICHD ガイドラインは、4 つの段階から構成されている。

導入段階

第 1 に、導入段階（Introductory phase）では、面接者が自分自身について紹介し、子どもがすべきこと（出来事について詳しく説明し、真実を話さなければならないこと）を明らかにする。また、グラウンドルール（わからないことは「覚えていない／知らない／わからない」と言うことができ、面接者が間違ったことを言ったときは、訂正してよいこと）を説明する。

ラポール形成段階

第 2 に、ラポール形成段階（Rapport-building phase）は、2 つのセ

クションで構成されている。1 つ目のセクションは、子どもにとってリラックスした環境を作り出し、子どもと面接者の間にラポールを構築することを意図したセクションである。2 つ目のセクションは、子どもたちが最近経験した、日常的な出来事を詳しく報告するよう求めるものである。

移行段階

第 3 に、移行段階（Transitional phase）は、調査対象となる出来事を特定するように話の流れを移行させていくためのものである。最初の手がかりとして、子どもに、「どうしてあなたが今日私に会いに来たか知っていますか」あるいは「今日私とお話しに来た理由を教えてください」などと尋ね、自発的に調査対象となる出来事を報告させるように求める。子どもが調査対象となる出来事について話し始めた場合は、面接者はその出来事についての聴き取りに移行することができる。しかし、子どもが調査対象となる出来事について話さなかった場合は、さらに対象となる出来事に関連するような手がかりを与え、対象となる出来事へと話の流れを移行させる。

自由再生段階

第 4 に、自由再生段階（Free recall phase）では、オープン質問を用いて調査対象についての聴き取りを行う。ここではまず、「あなたが思い出せる限りで最初から最後まで起こったことを全て話してください」や、「それから何が起こったの。」「それについてもっとお話ししてください」「前に言っていた人（物、行動）について、お話ししてください」というような手がかり質問を使用する。このような自由

再生によって出来事についての自発的な報告を引き出すことを目的としている。オープン質問ではそれ以上の情報は出ないと確認された後にだけ、面接者は以前子どもが述べた情報を扱った、より直接的な質問をしてもよい（e.g., 子どもが、被疑者が「棒を使った」と主張した後に、「どのようにその人はその棒を使ったの。」と尋ねる）。

もし重大な情報が面接の終わりにまだわからないままであれば、面接者はクローズ形式の質問を使用してもよい。これには、「その人はあなたに話しかけたときに身体のどこかの部分を触っていましたか。」といったような、子どもが以前扱わなかった新しい情報について「はい」か「いいえ」で判断される質問などが含まれる。

子どもに対してどんな反応が期待されているかを伝えるような暗示的な質問（「そのとき彼はあなたの頭に殴りかかっていたよね。」）は面接における全ての段階において使用を避けなければならない。

本稿で NICHD ガイドラインを使用する理由は以下のとおりである。

(1) NICHD ガイドラインが、多くの研究に基づいて開発されている面接法であり、(2) さらにその効果が、複数国で実証されていること（e.g., Lamb, Orbach, Hershkowitz, Horokowitz, & Abbott, 2007）、(3) 複雑なテクニックを必要とせず、教示が簡便であること。

1-3. 面接の繰り返しの功罪

司法面接では面接は 1 回だけ行うことが推奨されている。しかし、実際に司法面接を行うケースが生じたときに、そもそも 1 度だけ面接をするということは可能だろうか。例えば、子どもに対する虐待被害が疑われる場合を考えてみたい。被害について開示した子どもに対し、

まず担任の教員が尋ね、校長が尋ね、ある時にはスクールカウンセラーや養護教諭が尋ね、さらに警察官や児童相談所職員が尋ねるといったことが一般的に考えられる。事件化されれば、警察官や検察官が複数回にわたって面接を行うこともあり得るし、その後法廷では裁判官も質問を行うだろう。実務の現状に照らし合わせてみると、面接を1回だけで終わらせるということは、難しいように思える。司法面接では面接は1回のみ行うということが推奨されているが、それは面接を繰り返すこと、すなわち被面接者に想起を繰り返し求めることによって誤った報告が増加するという先行研究に基づくものである（e.g., Ackil & Zaragoza, 1998）。しかし、先行研究の中には、想起を繰り返すことで、出来事の報告量が増加するといったようなメリットについて指摘しているものもある（e.g., Erdelyi & Becker, 1974）。面接を繰り返し実施すること、つまり被面接者が繰り返し想起をすることには、どのようなメリットとデメリットがあるのだろうか。まずは、繰り返し想起することについての先行研究を概観する。

想起の繰り返しのメリット

まず、想起を繰り返し行うことのメリットとして、レミニセンス（*reminiscence*）とハイパームネジア（*hypermnnesia*）という現象が挙げられる。繰り返し出来事を報告させた場合に、前に報告されなかった情報が後に出て来たり、報告する情報の全体数が増加したりすることがある。前者をレミニセンス、後者をハイパームネジアという（e.g., Erdelyi & Becker, 1974; Otani & Hodge, 1991）。先行研究では、オープン形式の質問を使用して繰り返し面接を行った場合に、長期間にわたって正確に出来事を報告する量が増加することが示されている（La

Rooy, Pipe, & Murray, 2005; Pipe, Sutherland, Webster, Jones, & La Rooy, 2004)。例えば、La Rooy ら（2005）では、5 歳児と 6 歳児を実験参加者として、あるイベントに参加させたあと、直後と、1 日後または 6 ヶ月後に面接を行った。その結果、5 歳児や 6 歳児においても、レミニセンスは 1 日後および 6 ヶ月後でも生じることが示されている。さらに別の研究では、大学生を実験参加者として、映像を提示した後さまざまな手がかりを与えて繰り返し面接を行った結果、手がかりを変化させることによってレミニセンスの量が増加することや、レミニセンスにより、報告の正確性は影響を受けないことが示されている（Gilbert & Fisher, 2006）。

またハイパームネジアについて調査した先行研究では、大学生を実験参加者として、写真を提示した後、10 分間の面接を 1 度行った場合と、5 分間の面接を 7 分間のインターバルを挟み、2 度に分割して合計 10 分間行った場合を比較した結果、インターバルを挟んで繰り返し面接を行った場合に、ハイパームネジアが生じたことが示されている（Mulligan, 2006）。

レミニセンスやハイパームネジアはなぜ生じるのだろうか。原因としては次のようなことが考えられる。

（1）想起時の文脈が変わるために生じるということ（e.g., Gilbert & Fisher, 2006）。つまり、思い出す手がかりが、最初の想起としばらく時間を置いた後の 2 回目の想起では違う可能性があるため、新たな内容が想起され、報告される可能性が考えられる。

（2）思い出した情報自体が、手がかりとなるということ。つまり、最初の想起で思い出した内容がきっかけとなって、その後のさらなる記憶の検索を促進する可能性が考えられる。

(3) 練習効果によって生じるということ。つまり，最初の想起が，それ以降思い出すための練習となったり，記憶方略の工夫につながったりする可能性が考えられる。

(4) (特に情動性が高い情報については) 時間が経つことで，情動的な抑制がはずれるということ。情動的な内容であれば，時間が経って，情動が落ち着いたときに，抑制されていた内容についての想起が亢進する可能性が考えられる (Christianson, 1992)。

想起の繰り返しのデメリット

他方で，想起を繰り返し行うことの主なデメリットとして，偽りの記憶 (false memory) の形成が挙げられる。例えば，何らかの出来事を目撃し，その後，その出来事についてメディアや友人などからそれに関する情報を受け取った場合，記憶がその情報に影響を受けて変容することが考えられる。このように，ある出来事を経験した後で，その出来事と関連する情報に接触したときに，その情報が出来事とは異なっているような場合，記憶はどのような影響を受けるのだろうか。このような場合に生じる現象の 1 つに事後情報効果 (post information effect) があげられる。事後情報効果について検討した研究としては，Loftus らの研究 (1978) がよく知られている (Loftus, Miller, & Burns, 1978)。Loftus らの研究では，実験参加者は，自動車事故のスライドを提示されたあと，「赤いダットサンが一時停止の標識で止まっていたときに，その車 (事故を起こした車) は赤いダットサンを追い越しましたか。」あるいは「赤いダットサンが徐行の標識で止まっていたとき，その車 (事故を起こした車) は赤いダットサンを追い越しましたか。」と尋ねられた。フィラー課題のあと，標識の種類について再

認テストが行われた。その結果、質問文で何も事後情報を与えなかった参加者（統制条件）のうち、正しく回答できた割合は 70%であったのに対し、スライドと質問文が一致していなかった参加者のうち、正しく回答できた割合は 43%であった。このように、目撃イベントの後に質問の仕方等を含め、誤った情報にさらされると、正しい記憶が誤った情報に上書きされたり、あるいは置き換えられたりする可能性、つまり記憶が「汚染」される可能性が示唆されている。事後情報効果は、その後もさまざまな研究で再現されており、想起を繰り返し行う過程で、何らかの形で誤った情報が与えられた場合、記憶が変容したり、偽りの記憶が形成されたりして、記憶が汚染される可能性が示唆されている（Bruck, Ceci, & Hembrooke, 2002; Poole & Lindsay, 2001; Roediger, Jacoby, & McDermott, 1996）。

以上で挙げた先行研究により、想起の繰り返しのデメリットについては示されてきているが、単に想起を繰り返したことによる影響と、繰り返しの過程で誤った情報が与えられたことによる影響が、区別して議論されていないことが指摘できる。つまり、想起の繰り返しの過程で誤った情報に触れる機会が低減されれば、記憶の汚染が生じないことも考えられる。先行研究では、この点について明確ではなく、想起の繰り返すことが報告に及ぼす影響と誤った情報を与えることが報告に及ぼす影響については、区別して検討する必要があるといえる。

1-4. 本稿の目的と仮説

上述の想起の繰り返しのメリット、デメリットについての問題を面接の問題に投影すると、NICHHD ガイドラインを用いた面接を繰り返すことについてはデメリットも考えられるが、メリットについても一定

の効果を期待できるのではないだろうか。子どもを対象とした実験では、発達段階によって記憶能力や言語報告能力にも違いが生じることが考えられる。そのため、まずはある程度統制されたサンプルである大学生を対象として、いわば理想的な状態で、NICHD ガイドラインが報告に及ぼす影響と想起を繰り返すことが報告に及ぼす影響について検討した後、様々な発達段階にある子どもに対して NICHD ガイドラインを用いた面接を繰り返し行う効果について検討することとする。

pp. 15-16 で想起のメリットとして挙げた（1）想起時の文脈が変わるためにレミニセンスやハイパームネジアが生じる可能性については、時間を置いて改めて面接を実施することで文脈（その結果として、想起するための手がかり）が変わることの効果が期待できる。このとき、最初の想起の時点で被面接者が誤った情報に触れる程度の違いにより、レミニセンスやハイパームネジアにより増加すると考えられる情報の正確さに違いが生じることが考えられる。面接時に誘導的な質問をすることで、誤情報が質問文に含まれていたり、被面接者自ら誤った情報を生成して報告したりすることが考えられるが、誘導的な質問を用いなければそのようなリスクは低減できると思われる。そこで、誘導の少ない面接法として NICHD ガイドラインを使用した面接を実施し、その効果を調査するため、面接法について特段の教示を与えない場合（統制条件）と比較検討する。また、想起を求める人物が変わることで、想起時の文脈に変化が生じるため、面接者が異なることによる影響が生じる可能性も考えられる。この点についても検討するため、面接の繰り返しの効果及び面接者の異同についての効果につき実験によって調査する（実験 1 から 3）。また、（2）思い出した情報自体

が、手がかりとなり、その後のさらなる記憶の検索を促進する可能性については、2 度目の面接だけで思い出される情報は、1 度目の面接で思い出される情報が手がかりになって思い出されていると考えられるので、共通して報告される情報と、後から加わった情報などを区別して、情報の量や正確さについて検討する。

(3) 最初の想起が、それ以降思い出するための練習となったり、記憶方略の工夫につながったりする可能性については、記憶方略の使用の仕方に影響を受けることが予想される。記憶方略の使用の仕方は発達段階に伴って変化することが知られている (Flavell, Beach & Chinsky, 1966)。繰り返しの想起と記憶方略の使用の仕方の交互作用について、実験によって発達的に調査する (実験 4)。

なお、(4) 特に情動性が高い情報について、時間が経つことで、情動的な抑制がはずれ、情動が落ち着いたときに、抑制されていた内容についての想起が亢進する可能性については、記憶に影響を与えるような、特にネガティブな情動を喚起する刺激を使用することに倫理上の制約もあることから、本稿では扱わないこととする。

さらに、不用意な記憶喚起の仕方をする、それは記憶を汚染する可能性がある。つまり、意図的に誤った方向へ誘導しなくとも、質問の仕方が誘導する可能性を含むものである場合 (e.g., 「それは A ですか、B ですか。」「それは A ですよ。ね。」) に、特に想起を繰り返した場合には、最初の想起におけるこのような誘導的な質問が後の想起に影響を及ぼすことが考えられる。そこで、本稿では、特に質問の仕方に制約を設けずに面接を行った場合を統制条件として設け、統制条件においてどのくらい誘導的な質問が使用されているのかについても調査する。

第 2 章 司法面接と想起の繰り返し

2-1. 実験 1：司法面接を繰り返した場合に報告内容に及ぼす影響

2-1-1. 目的

本実験では、NICHD ガイドラインを使用した面接を繰り返し行った場合と、ガイドラインを用いない面接を繰り返し行った場合の、報告内容の違いについて検討する。以下では、まず、質問方法が報告内容に及ぼす影響と、想起の繰り返しが報告内容に及ぼす影響について、それぞれ先行研究を概観する。

質問方法が被面接者の報告に影響を及ぼすことは、多くの先行研究で示されてきた。例えば、Loftus らの実験（1974）で、参加者に自動車事故に関する映像を提示し、「車が“衝突した（hit）”／“ぶつかった（bumped）”／“激突した（smashed）”ときの速度はどのくらいでしたか。」と尋ねたところ、質問の言葉が異なることによって評価された速度に違いが見られたことはよく知られている（Loftus & Palmar, 1974）。実務場面における研究でも、同様に、質問方法が報告内容に及ぼす影響について検討されてきた。Lamb & Fauchier（2001）は、性的虐待を受けた子どもに対して行った面接を分析し、誘導的な質問から矛盾した供述が多く引き出されることを示した。また、Poole & White（1991）は 4 歳児、6 歳児、8 歳児と大人を対象として、映像を提示した直後と 1 週間後に繰り返し面接を実施し、報告内容について検討した結果、Yes／No 質問に対して、年少児において報告内容の変遷が見られることを示した。その一方で、誘導のない質問に対しては、

年少児でも大人と同程度に正確な情報を報告したことを示した。先行研究では、概ね一貫して、誘導がない、オープンな質問を使用することによって正確な情報が報告され、質問が誘導的になるほど不正確な情報が報告されやすいということが示されている。

前章で述べたとおり、司法面接では面接は1度だけ行うことが推奨されている。これに対し、最近の研究では、想起を繰り返し行うことのメリット（レミニセンス、ハイパームネジア）に注目し、誘導の少ない手法を用いた場合、想起の繰り返しは、必ずしも不正確な報告を引き出すものではなく、むしろ完全な報告を得るために必要なものであるとする知見もある（La Rooy, Katz, Malloy, & Lamb, 2010）。このような、想起を繰り返し行うことの影響については、従来から多くの研究で議論がなされている（Goodman & Quas, 2008）。例えば、想起を繰り返すメリットとして、1回だけ面接を行った場合よりも面接者のバイアスによる正確さの低下が少ないことが示されている（Quas et al., 2007）。また、想起を繰り返すことで、新たな情報が得られ、中心的で重要な出来事の報告は一貫して報告され続けることも示されている（Hershkowitz & Turner, 2007）。

先行研究では、想起を繰り返した場合に報告の正確さが低下するとされているが（e.g., Bruck, Ceci, & Hembrooke, 2002）、これは質問方法によるものなのか、単に面接を繰り返し行ったことによるものなのか、明確ではない。そこで、本研究では、NICHD ガイドラインに従った面接（以下、FI とする）を繰り返した場合と、特段質問方法に制約を設けない面接（統制面接）を繰り返した場合を比較検討する。

本実験では、面接経験のない大学生に、NICHD ガイドラインの手法について教示を与えた場合と与えなかった場合の質問の仕方につい

て比較を行う。ここでは、NICHD ガイドラインの手法について教示を与えない場合に、多くの誘導的な質問が使用されることが予測される。NICHD ガイドラインを用いることで、誘導的な質問によって質問に含まれ誤情報に接触することや誤った報告を作話させられることがないような面接を行えば、繰り返し行った場合に報告の正確さは低下しないことが予測される。このとき、1 週間の遅延をおくことで、レミニセンスが生じ、報告内容に新たな情報が加わることが考えられる。一方、統制面接では一定の誘導的な質問が使用されることが予想される。その影響を受けるため、1 週間後に新たに報告された情報項目は、統制面接よりも FI で正確であり、統制面接では報告内容の正確さが低下するのに対し、FI では報告内容の正確さが維持されることが予測される。

2-1-2. 方法

実験参加者

18 歳から 24 歳までの大学生・大学院生 80 名 ($M = 19.93$, $SD = 1.07$)。性差の影響をなくすため、全員女性とした。まず参加者を、ランダムに FI 条件、統制条件にそれぞれ 40 名ずつ割り当てた。さらに、それぞれ 2 名 1 組にし、その中で面接者役と被面接者役に割り当てた。

このうち、統制条件の 1 組の参加者について、面接時間が他の面接者の 4 倍と極端に長くなったため、分析から除外した。また、FI 条件の 1 組の参加者について面接手続きに不備が見られたので、分析から除外した。よって分析対象は、参加者 76 名 (19 組 $\times$ 2 名ずつ $\times$ 2 条件) とした。

データ分析

面接条件の違いと、繰り返しの効果について検討するため、2（面接条件：FI，統制）×2（面接回：1回目，2回目）の2要因分散分析を行った。前者は参加者間要因，後者は参加者内要因であった。従属変数は，報告された情報数，情報の正確さ，および面接者の使用した質問数，質問から引き出された情報数，情報の正確さであった。なお，分析は SPSS 17.0J for Windows で行い，下位検定には Bonferroni 法を用いた。有意水準は 5%に設定した。

機材

映像の提示には，ノート型パーソナルコンピュータ（HP Compaq 6535s/CT Notebook PC，14.1 型液晶）を用い，面接の録音には IC レコーダー（OLYMPUS VoiceTrek V-41），録画にはデジタルビデオカメラ（SONY HDR-HC7）を用いた。

材料

刺激映像 刺激映像は，本実験用に制作した DVD を使用した（付録 1）。DVD は，事件性のある映像を視聴させることによって，目撃事態に近づけることを目的として，制作したものである。内容は，若い男女が，女性店員 2 名が働いている雑貨屋へとやって来て，男性がマニキュアや時計などの雑貨をカバンに入れ，そのまま代金を払わずに，女性とともに店から出ていくという，万引き場面を推測させるものであった。映像の時間は，1 分程度であった。

面接 面接手続きは，FI 条件（付録 2）と統制条件（付録 3）の 2

種類を用意した。面接者には、面接を行う前に面接手続きについて教示を行った。どちらの面接においても、刺激映像の聴き取り以外を統制するために、導入、ラポール形成、出来事の調査の順で行った。導入の段階では、面接者が被面接者に自己紹介をした。FI 条件でのみ、グラウンドルール（事実だけを話すこと／わからないことはわからないということ／間違いがあったら訂正すること）を確認した。ラポール形成の段階では、「今日ここに来るまでにあったことについて話してください。」と尋ね、オープン質問によってエピソード記憶の練習を行った。そして、出来事の調査の段階では、FI 条件ではオープン質問のみを用いて映像についての聴き取りを行い、統制条件では質問方法を制限せずに、面接者が自由に聴き取りを行った。

手続き

被面接者 まず、被面接者には、映像提示用のノートパソコンが設置された心理学実験準備室に入るように求め、数種類の課題への参加と事前に説明できない内容も含まれていることについて、書面にて承諾を得た（付録 4）。その後、「色を使用した課題に参加してもらいますが、映像の性質と課題の成績の関連をみるため、途中で映像を観てもらいます。」と教示し、以下の手順で課題および刺激提示を行った。

実験手続きは（1）無関連課題、（2）刺激の提示、（3）無関連課題（続き）、（4）面接 1、（5）面接 2（1 週間後）の 5 段階で構成された。（1）および（3）は、刺激の提示を偶発学習とするために実施した。

（1）無関連課題 後に行う課題（3）の練習として、色の塗り分け課題を与えた（付録 5）。この課題は、白地図に色を塗っていくもので、

隣り合ったスペースに同じ色があたらないようにするというルールに従って、4 色の色を用いて地図を塗り分けていくというものであった。ここでは、5 分間、東京都 23 区の白地図で塗り分けを実施した（付録 5）。

（2）刺激の提示 無関連課題の後、休憩しながら観るように教示し、刺激映像を提示した。

（3）無関連課題（続き） 刺激映像の提示後に、本番の課題として、日本列島の白地図の塗り分けを 5 分間実施した（付録 6）。

（4）面接 1 塗り分け課題終了後、「先ほど観た映像の内容について聴き取りを受けてください。」と教示し、面接室に移動して面接を受けるよう求めた。面接を受ける前に、面接をビデオ録画すること、音声録音することを説明し、承諾書（付録 7）に記入を求めた。承諾が得られた参加者に対し、面接を行った。

（5）面接 2 1 週間後、「先週の映像について再び聴き取りを受けてもらいます。」と教示し、面接室で面接に参加するよう求めた。面接終了後、謝礼として現金 1000 円を渡し、本当の実験の目的について説明し、最初に異なる目的を説明したことを謝罪した。

面接者 面接者には、面接記録用のビデオカメラ、IC レコーダーが設置された実験ブースに入るよう求め、面接実験への参加について書面にて承諾を得た（付録 4 及び付録 7）。その後、「面接官として、今

被面接者が観ている映像の内容について、聴き取りを行ってもらいます。」と教示した。被面接者に課題や刺激提示を行っている間に、FI条件あるいは統制条件の面接手続きについて説明を行った。面接終了後、謝礼として現金 750 円を渡した。

2-1-3. コーディング

報告内容

面接の内容は、全て書き起こし、スコア化した。事前に、4名の評定者によりDVDに含まれる情報を全て書き出し、正答の定義を決めた（付録8）。

Holliday & Albon (2004) に従って、それぞれの情報を以下の4種類に分類し、それぞれの面接条件で報告された情報のタイプについて検討した。登場人物に関する情報（e.g., どのような容姿か、何を身に着けていたか）を“人物情報”，事物に関する情報（e.g., どのような物か）を“事物情報”，活動に関する情報（e.g., 何をしたか）を“活動情報”，位置関係や周囲の環境，状況に関する情報（e.g., どのような場所か，どのような状況か）を“場所状況情報”とした。それぞれの項目について、被面接者が最初に言及した時点で、情報数1とした。例えば、被面接者が「公園で髪の毛の長い女の子が本を読んでいた。」と報告した場合、「公園で」（場所状況情報 1）「髪の毛の長い」「女の子が」（人物情報 2）「本を」（事物情報 1）「読んでいた」（活動情報 1）とスコア化した。DVDに含まれていた情報は、全部で168項目あり，そのうち人物情報が78項目，活動情報が34項目，事物情報が31項目，場所状況情報が25項目であった。

さらに、報告された情報が、DVDの内容と一致していたときに“正

答”，DVD の内容と不一致であったときに“誤答”（e.g., DVD では「白い」服の女の子が出てきていたのに対し，被面接者が「黒い」服だったと回答した場合），DVD の内容には含まれていなかったときに“作話”（e.g., DVD ではまったく登場していない人物について言及した場合）として分類した。

スコアリングは著者と研究仮説を知らない評定者 1 名が独立して行った。先行研究によると，スコアリングの一致度を確認するためには全データの 10% 以上のサンプリングが必要なので（Loewen & Philp, 2006），著者が被面接者 10 名（10 名×2 回ずつ，つまり面接 20 回分）の報告内容についてスコア化し，評定者が被面接者 38 名すべての報告内容をスコア化し，一致率を算出した。評定者間の一致率は 89.48% であった（ $\kappa = .75$ ）。不一致の項目については，評定者のスコア結果を採用した。

報告内容の変化

1 度目と 2 度目とでは，報告内容にどのような変化があるのだろうか。レミニセンス（1 度目には報告されなかった情報が，2 度目に新たに報告される）はどの程度起きたのだろうか。また，ハイパームネジア（1 度目に報告された内容に新たな情報が加わり，報告の総量が増加する）はどの程度起きたのだろうか。さらに，どのくらいの情報が 1 度目から 2 度目にかけて報告されなくなっているのだろうか。このことを検討するために，1 度目の面接では報告されなかったが 2 度目の面接で初めて報告されたものを“新出項目”，1 度目の面接で報告されたが 2 度目の面接では報告されなかったものを“抜け落ち項目”，とした。一貫して報告された情報を“共通項目”とした。また，報告

の総量の指標として、2回の面接で報告された項目の和集合を“ネット報告量”とした。

報告内容のコーディングの例を Table2.1.1 に示す。

Table2.1.1 コーディング例						
変数	報告内容					項目数
面接1回目	<u>赤い服の</u> ／ <u>女の人が</u> ／ <u>ベンチに</u> ／ <u>座って</u> ／ <u>本を</u> ／ <u>読んでいた。</u>					6
	人物1	人物1	場所1	活動1	事物1	活動1
面接2回目	<u>女の人が</u> ／ <u>座って</u> ／ <u>黄色い背表紙の</u> ／ <u>本を</u> ／ <u>読んでいた。</u>					5
	人物1	活動1	事物1	事物1	活動1	
↓						
新出項目	「黄色い背表紙の」					1
抜け落ち項目	「赤い服の」「ベンチに」					2
共通項目	「女の人が」「座って」「本を」「読んでいた」					4
ネット報告量	「赤い服の」「女の人が」「ベンチに」「座って」「黄色い背表紙の」「本を」「読んでいた」					7

質問タイプ

質問タイプは、9種類に分類した。質問の分類について Table2.1.2 に示す。このうち、応答については、分析から除外し、応答に続く情報は、1つ前の質問から引き出されたものとしてカウントした。面接者の発話は、著者と研究仮説を知らない1名の評定者が独立して前述の9種類に分類した。評定者が面接者10人分の質問タイプについてスコア化し、著者が面接者38人分すべての質問タイプをスコア化した。評定者間の一致率は76.57%であった ($\kappa = .72$)。不一致の項目に

については、著者が NICHD ガイドラインの研修を受け、質問タイプについてより正確に分別できるという観点から、著者のスコア結果を採用した。

Table2.1.2
質問タイプと定義および例

質問タイプ	定義	例
手がかり質問	手がかりを与えて自由に報告を求める質問形式。	「Aについて話してください」「先ほど言っていたBについて話してください」
時間の分割	時間の分割（AからBまでの間）を含む質問形式。	「Aが起こってからBが起こるまでの間について話してください」
促し	他に何があったか等、その他のことを尋ねる質問形式。	「あとは／そして／それから／ほかには」「それから何がありましたか」
WH質問	いつ、誰、どこ、どんな、どのくらい等を尋ねる質問形式。	「それはいつですか」「どこで起こりましたか」「どのくらいありましたか」
エコーイング	被面接者の発話の完全な繰り返し。	被面接者「子どもです」→面接者「子どもです」
応答	被面接者の発話に対する相槌。	「うんうん」
理由の質問	被面接者の発話の理由、意図などを尋ねる質問形式。	「どうしてそう思ったのですか」「そう答えた理由について話してください」
選択式質問	複数の選択肢を含む質問形式。「はい／いいえ」で答えさせる質問形式。	「Aですか、Bですか」「AからCのうちどれですか」「それはAですか」
付加疑問文	限定的な質問形式。	「それはAですよ」「Aでしょう」

2-1-4. 結果

面接時間

面接時間について 2（面接条件）×2（面接回）の分散分析を行った。

その結果、FI 条件 ($M=11.56$, $SD=3.80$) と統制条件 ($M=9.46$, $SD=4.29$) で有意な差は見られなかった ($F(1,36)=3.10$, $p<.87$, $\eta^2=.08$)。面接回では、面接 1 回目 ($M=9.63$, $SD=3.73$) より 2 回目 ($M=11.39$, $SD=4.42$) の方が面接時間は長かった ($F(1,36)=12.05$, $p<.01$, $\eta^2=.25$)¹。また、有意な交互作用は見られなかった ($F(1,36)=1.32$, $p=.26$, $\eta^2=.04$)。よって、以下の分析では面接時間については考慮しないこととする。

再生成績

各面接条件における面接 1 回目、2 回目及び合計の平均情報項目数について Table2.1.3 に示す。また、人物情報、活動情報、事物情報、場所状況情報について、面接条件による違いを検討するため、面接 1 回目及び 2 回目の合計値を使用したため、各面接条件における平均項目数について Table2.1.4 に示す。

¹面接 1 回目の平均値は FI 条件 1 回目 ($M=10.97$, $SD=3.69$) 及び統制条件 1 回目 ($M=8.28$, $SD=3.35$) の平均値であり、面接 2 回目の平均値は FI 条件 2 回目 ($M=12.15$, $SD=3.91$) 及び統制条件 2 回目 ($M=10.63$, $SD=4.87$) の平均値である。

Table2.1.3
各面接条件における平均情報項目数

変数	FI条件						統制条件					
	1回目			2回目			1回目			2回目		
	平均	SD		平均	SD		平均	SD		平均	SD	
面接時間	10.97	3.69		12.15	3.91		8.28	3.35		10.63	4.87	
全情報数	52.79	11.43		53.16	15.48		42.32	12.78		43.89	20.04	
正答数合計	49.00	10.72		48.37	13.69		38.89	11.57		37.37	16.52	
誤答数合計	2.89	1.91		3.79	2.18		2.63	1.71		3.74	2.86	
作話数合計	0.89	1.79		0.95	1.51		0.79	1.55		2.74	4.63	
正確性	0.93	0.04		0.91	0.04		0.92	0.06		0.85	0.11	
合計												

注) 正確性は、正答数合計/正答数合計+誤答数合計+作話数合計で算出した。

Table2.1.4

各面接条件における情報タイプごとの情報項目数

変数	FI条件		統制条件		FI・統制条件総合	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
正答数 1, 2 回目合計						
人物情報	45.26	9.15	38.84	11.95	42.05	10.99
活動情報	26.63	7.06	18.26	6.90	22.45	8.08
事物情報	17.42	6.27	12.84	5.39	15.13	6.22
場所状況情報	8.05	4.34	6.32	3.00	7.18	3.78
誤答数 1, 2 回目合計						
人物情報	5.16	2.61	4.21	3.17	4.68	2.91
活動情報	0.11	0.32	0.58	1.02	0.34	0.78
事物情報	1.00	1.05	1.26	1.24	1.13	1.14
場所状況情報	0.37	0.60	0.21	0.42	0.29	0.52
作話数 1, 2 回目合計						
人物情報	1.21	1.84	1.95	3.58	1.58	2.83
活動情報	0.47	0.91	0.89	2.05	0.68	1.58
事物情報	0.11	0.32	0.26	0.56	0.18	0.46
場所状況情報	0.11	0.32	0.47	1.17	0.29	0.87

全情報数 面接条件と面接回によって、報告された情報数に違いがあるかを調査するため、2（面接条件）×2（面接回）の分散分析を行った。その結果、FI条件（ $M=52.97$, $SD=13.42$ ）で統制条件（ $M=43.11$, $SD=16.60$ ）よりも多くの情報項目が報告されていた（ $F(1,36)=5.19$, $p<.05$, $\eta^2=.13$ ）。面接回では、面接1回目（ $M=47.55$, $SD=13.08$ ）と、面接2回目（ $M=48.53$, $SD=18.28$ ）で有意な差は見られなかった（ $F(1,36)=.16$, $p=.69$, $\eta^2=.00$ ）²。また、有意な交互作用も見られなかった（ $F(1,36)=.06$, $p=.80$, $\eta^2=.00$ ）。

² 面接1回目の平均値はFI条件1回目（ $M=52.79$, $SD=11.43$ ）及び統制条件1回目（ $M=42.32$, $SD=12.78$ ）の平均値であり、面接2回目の平均値はFI条件2回目（ $M=53.16$, $SD=15.48$ ）及び統制条件2回目（ $M=43.89$, $SD=20.04$ ）の平均値である。

正答項目 どのような情報タイプが各面接条件で報告されやすいのかを調査するため、まず正答項目について、2（面接条件）×4（情報タイプ：人物，活動，事物，場所状況）の分散分析を行った。その結果，FI条件（ $M=48.68$, $SD=12.13$ ）で統制条件（ $M=38.13$, $SD=14.09$ ）より多くの正答項目が報告されていた（ $F(1,36)=7.89$, $p<.01$, $\eta^2=.18$ ）。情報タイプでも主効果が認められ，多重比較の結果，人物情報（ $M=42.05$, $SD=10.99$ ），活動情報（ $M=22.45$, $SD=8.08$ ），事物情報（ $M=15.13$, $SD=6.22$ ），場所状況情報（ $M=7.18$, $SD=3.78$ ）の順に多くの正答項目が報告されており，それぞれの情報タイプ間で有意差が認められた（ $F(3,108)=334.20$, $p<.01$, $\eta^2=.90$ ）。

また，面接条件と情報タイプに有意な交互作用が認められた（ $F(3,108)=2.99$, $p<.05$, $\eta^2=.08$ ）。下位検定の結果，活動情報についてFI条件（ $M=26.63$, $SD=7.06$ ）で統制条件（ $M=18.26$, $SD=6.90$ ）より多くの正答項目が報告されており（ $F(1,36)=13.67$, $p<.01$, $\eta^2=.28$ ），事物情報についてもFI条件（ $M=17.42$, $SD=6.27$ ）で統制条件（ $M=12.84$, $SD=5.39$ ）より多くの正答項目が報告されていた（ $F(1,36)=5.82$, $p<.05$, $\eta^2=.14$ ）。

誤答項目 同様に，誤答項目について，2（面接条件）×4（情報タイプ）の分散分析を行った。その結果，FI条件（ $M=3.34$, $SD=2.07$ ）と統制条件（ $M=3.18$, $SD=2.39$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1,36)=.10$, $p=.76$, $\eta^2=.00$ ）。情報タイプで主効果が認められ，多重比較の結果，人物情報（ $M=4.68$, $SD=2.91$ ）が最も多く，次いで事物情報（ $M=1.13$, $SD=1.14$ ）が多く，活動情報（ $M=.34$, $SD=.78$ ）と場所状況情報（ $M=.29$, $SD=.52$ ）の間に差は見られなかった（ $F(3,108)=67.82$, $p<.01$, $\eta^2=.65$ ）。

また、有意な交互作用は見られなかった ($F(3,108) = 1.54, p = .21, \eta^2 = .04$)。

作話項目 最後に、作話項目についても、2（面接条件）×4（情報タイプ）の分散分析を行った。その結果、FI条件 ($M=0.92, SD=1.63$) と統制条件 ($M=1.76, SD=3.54$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36) = 1.23, p = .26, \eta^2 = .03$)。情報タイプで主効果が認められ、多重比較の結果、人物情報 ($M=1.58, SD=2.83$) が最も多く、活動情報 ($M=.68, SD=1.58$) と事物情報 ($M=.18, SD=.46$)、場所状況情報 ($M=.29, SD=.87$) の間にそれぞれ差は見られなかった ($F(3,108) = 7.52, p < .01, \eta^2 = .17$)。また、有意な交互作用は見られなかった ($F(3,108) = .27, p = .85, \eta^2 = .01$)。

正確性 報告された内容の信憑性を表すための指標として、正確性を用いて検討した。正確性は、報告された全項目数のうち正答が占める割合とした (Koriat & Goldsmith, 1994)。正確性について、2（面接条件）×2（面接回）の分散分析を行った。その結果、FI条件 ($M=.92, SD=.05$) と統制条件 ($M=.88, SD=.09$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36) = 3.37, p = .08, \eta^2 = .09$)。面接回では、面接1回目 ($M=.92, SD=.05$) よりも2回目 ($M=.88, SD=.09$) の方が正確性が低かった ($F(1,36) = 11.14, p < .01, \eta^2 = .24$)³。

また、面接条件と面接群に有意な交互作用が認められた ($F(1,36)$

³ 面接1回目の平均値はFI条件1回目 ($M=.93, SD=.04$) 及び統制条件1回目 ($M=.92, SD=.06$) の平均値であり、面接2回目の平均値はFI条件2回目 ($M=.91, SD=.04$) 及び統制条件2回目 ($M=.85, SD=.11$) の平均値である。

=4.21, $p < .05$, $\eta^2 = .11$)。下位検定の結果，統制条件において面接 1 回目 ($M = .92$, $SD = .06$) よりも 2 回目 ($M = .85$, $SD = .11$) のほうが，正確性が低かった ($t(18) = 3.11$, $p < .01$)。また，面接 2 回目において FI 条件 ($M = .91$, $SD = .04$) よりも統制条件 ($M = .85$, $SD = .11$) のほうが，正確性が低かった ($t(18) = 2.18$, $p < .05$)。

報告内容の変化

報告内容の変化についての指標である，新出項目，抜け落ち項目，共通項目，ネット報告量について Table2.1.5 に示す。

Table2.1.5
各面接条件における報告の変化項目

変数	FI条件		統制条件		FI・統制条件総合	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
新出項目合計	13.63	8.67	17.00	9.35	15.32	9.06
正確性	0.80	0.15	0.76	0.19	0.77	0.17
抜け落ち項目合計	13.16	6.87	15.47	11.69	14.32	9.53
正確性	0.88	0.14	0.83	0.20	0.86	0.17
共通項目合計	39.63	12.01	26.79	14.15	33.21	14.49
正確性	0.95	0.05	0.93	0.07	0.94	0.06
3項目合計	22.14	15.54	19.75	12.73	20.95	14.19
正確性	0.88	0.13	0.84	0.18	0.86	0.16
ネット報告量合計	66.42	13.54	59.26	17.53	62.84	15.87
正確性	0.90	0.04	0.87	0.08	0.89	0.07

新出項目，抜け落ち項目，新出項目 新出項目，抜け落ち項目，共通項目に関して面接条件による違いがあるかを調査するために，項目数と正確性について項目（新出，抜け落ち，共通）×面接条件の 2 要因分散分析を行った。

項目数についてみると，項目に主効果が認められ ($F(2,72) = 32.58$,

$p < .01$, $\eta^2 = .48$), 共通項目 ($M=33.21$, $SD=14.49$) の項目数が最も多く, 新出項目 ($M=15.32$, $SD=9.06$) と抜け落ち項目 ($M=14.32$, $SD=9.53$) の項目数に有意差は認められなかった。面接条件では, FI 条件 ($M=22.14$, $SD=15.54$) と統制条件 ($M=19.75$, $SD=12.73$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36) = 1.98$, $p = .17$, $\eta^2 = .05$)。また, 項目と面接条件に交互作用が認められた ($F(2,72) = 5.93$, $p < .01$, $\eta^2 = .14$)。下位検定として項目ごとに 1 要因分散分析を行った結果, 共通項目で有意差が認められ ($F(1,36) = 9.10$, $p < .01$, $\eta^2 = .20$), FI 条件 ($M=39.63$, $SD=12.01$) で統制条件 ($M=26.79$, $SD=14.14$) より項目数が多かった。

正確性についてみると, 項目に主効果が認められ ($F(2,70) = 14.41$, $p < .01$, $\eta^2 = .29$), 共通項目 ($M=.94$, $SD=.06$) の正確性が最も高く, 新出項目 ($M=.77$, $SD=.17$) と抜け落ち項目 ($M=.86$, $SD=.17$) の正確性に有意差は認められなかった。面接条件では, FI 条件 ($M=.88$, $SD=.13$) と統制条件 ($M=.84$, $SD=.18$) に有意な差は見られなかった ($F(1,35) = 1.76$, $p = .19$, $\eta^2 = .05$)。項目と面接条件に有意な相互作用は見られなかった ($F(2,70) = .24$, $p = .79$, $\eta^2 = .01$)。

ネット報告量 ネット報告量の項目数とその正確性について, 面接条件による違いがあるかを調査するために, 1 要因分散分析を行った。その結果, 項目数では, FI 条件 ($M=66.42$, $SD=13.54$) と統制条件 ($M=59.26$, $SD=17.53$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36) = 1.98$, $p = .17$, $\eta^2 = .05$)。また, 正確性でも FI 条件 ($M=.90$, $SD=.04$) と統制条件 ($M=.87$, $SD=.08$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36) = 1.84$, $p = .18$, $\eta^2 = .05$)。

質問タイプ

質問使用数（操作チェック） 各面接条件における質問使用数について Table2.1.6 に示す。

Table2.1.6
各面接条件における質問使用数

変数	FI条件		統制条件	
	平均	SD	平均	SD
質問数合計	5.39	6.91	7.97	12.35
手がかり質問	12.21	6.01	7.47	4.93
時間の分割	3.26	3.07	—	—
促し	9.84	6.76	1.42	1.87
WH質問	7.26	10.57	10.95	5.62
エコーイング	2.00	4.28	5.47	11.34
理由の質問	0.84	1.34	0.21	0.42
選択式質問	2.84	4.62	31.68	19.79
付加疑問文	0.11	0.32	3.74	3.40

各面接条件で使用された質問数について調査し、教示の効果があつたかを検討するため、2（面接条件）×8（質問タイプ：手がかり質問，時間の分割，促し，WH質問，エコーイング，理由の質問，選択式質問，付加疑問文）の分散分析を行った。その結果，FI条件（ $M=5.39$ ， $SD=6.91$ ）よりも統制条件（ $M=7.97$ ， $SD=12.35$ ）の方が使用された質問数が多かった（ $F(1,36)=7.04$ ， $p<.05$ ， $\eta^2=.16$ ）。質問タイプでは，主効果が認められ（ $F(7,252)=25.41$ ， $p<.01$ ， $\eta^2=.41$ ），多重比較の結果，選択式質問（ $M=17.26$ ， $SD=20.36$ ）が最も多く使用されていた⁴。

また，面接条件と質問タイプに交互作用が認められた（ $F(7,252)$

⁴ 選択式質問の平均値は，FI条件（ $M=2.84$ ， $SD=4.62$ ）及び統制条件（ $M=31.68$ ， $SD=19.79$ ）の平均値である。

=26.09, $p < .01$, $\eta^2 = .42$)。下位検定として面接条件ごとに 1 要因分散分析を行った結果, FI 条件では, 手がかり質問 ($M=12.21$, $SD=6.01$) が最も多く使用され, 続いて促し ($M=9.84$, $SD=6.76$), WH 質問 ($M=7.26$, $SD=10.5$) の順で多く使用されていた ($F(7, 126) = 15.45$, $p < .01$, $\eta^2 = .46$)。一方, 統制条件では, 選択式質問 ($M=31.68$, $SD=19.79$) が最も多く使用され, 続いて WH 質問 ($M=10.95$, $SD=5.62$), 手がかり質問 ($M=7.47$, $SD=4.93$) の順で多く使用されていた ($F(7, 126) = 29.29$, $p < .01$, $\eta^2 = .62$)。

それぞれの質問タイプから引き出された情報項目数 各質問から引き出された情報項目数について Table2.1.7 に示す。各面接条件でどのような質問が多く情報を引き出しているのかを調査するため, 質問ごとに, 平均して引き出された情報項目数について検討した。引き出された情報項目数は, ある質問タイプから引き出された項目数をその質問タイプの使用数で割ることで, 1 回の使用で平均して引き出している項目数を算出した。なお, 参加者ごとに使用した質問タイプが異なるため, 参加者によっては全く使用しなかった質問タイプも存在した。そのため, 以下では各条件で, 参加者の 4 分の 3 以上がその質問タイプを使用しなかった場合は分析から除外することとした。よって, FI 条件では, 手がかり質問, 時間の分割, 促し, WH 質問, エコーイング, 選択式質問が分析の対象であり, 統制条件では, 手がかり質問, 促し, WH 質問, エコーイング, 選択式質問, 付加疑問文が分析の対象であった。

Table2.1.7

各面接条件における面接1回目と2回目の各質問から引き出された情報数

変数	FI 条件				統制条件			
	1回目		2回目		1回目		2回目	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
手がかり質問	9.81	9.52	10.09	11.55	9.28	8.81	4.48	8.30
時間の分割	2.44	2.39	2.03	2.37	—	—	—	—
促し	1.10	1.26	0.74	0.96	1.28	2.41	0.52	0.75
WH質問	1.08	0.95	0.61	0.50	1.32	0.90	1.63	2.21
エコーイング	1.39	1.38	0.40	0.55	3.57	6.37	0.92	0.89
理由の質問	0.53	1.19	0.80	1.10	0.50	0.71	0.00	0.00
選択式質問	2.48	5.90	0.08	0.14	0.85	0.77	0.89	0.81
付加疑問文	0.00	—	2.00	—	0.23	0.37	0.42	0.88
総合	3.56	6.19	3.09	6.89	3.22	5.89	1.66	4.08

※総合については、FI条件（手がかり質問、時間の分割、促し、WH質問、エコーイング、選択式質問）、統制条件（手がかり質問、促し、WH質問、エコーイング、選択式質問、付加疑問文）の総合

FI 条件において、平均項目数について 2（面接回）×6（質問タイプ：手がかり質問、時間の分割、促し、WH 質問、エコーイング、選択式質問）の分散分析を行った。その結果、面接 1 回目（ $M=3.56$, $SD=6.19$ ）と 2 回目（ $M=3.09$, $SD=6.89$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1,130)=.70$, $p=.40$, $\eta^2=.01$ ）。質問タイプでは、主効果が認められ、多重比較の結果、手がかり質問から引き出された項目（ $M=9.95$, $SD=10.44$ ）が最も多く、その他の質問タイプでは差は認められなかった（ $F(5,130)=14.27$, $p<.01$, $\eta^2=.35$ ）⁵。また、面接回と質問タイプに有意な交互作用は見られなかった（ $F(5,130)=.13$, $p=.99$, $\eta^2=.01$ ）。

統制条件において、平均項目数について 2（面接回）×6（質問タイプ：手がかり質問、促し、WH 質問、エコーイング、選択式質問、付

⁵手がかり質問から引き出された項目の平均値は FI 条件 1 回目（ $M=9.81$, $SD=9.52$ ）及び FI 条件 2 回目（ $M=10.09$, $SD=11.55$ ）の平均値である。

加疑問文)の分散分析を行った。その結果、面接1回目($M=3.22$, $SD=5.89$)と2回目($M=1.66$, $SD=4.08$)に有意な差は見られなかった($F(1,138)=2.44$, $p=.12$, $\eta^2=.02$)。質問タイプでは、主効果が認められ、多重比較の結果、手がかり質問から引き出された項目($M=7.01$, $SD=8.79$)が最も多く、その他の質問タイプでは差は認められなかった($F(5,138)=9.53$, $p<.01$, $\eta^2=.26$)⁶。また、面接回と質問タイプに交互作用が認められた($F(5,138)=.13$, $p<.05$, $\eta^2=.33$)。下位検定として質問タイプごとに対応のある t 検定を行った結果、手がかり質問についてのみ有意差が認められ、面接1回目($M=9.54$, $SD=9.05$)で2回目($M=7.44$, $SD=10.40$)よりも多く使用されていた($t(16)=2.37$, $p<.05$)⁷。

それぞれの質問タイプから引き出された項目の正確性 続いて、各面接条件で、どのような質問が正確に情報を引き出しているのかを調査するため、引き出された項目の正確性について検討した。なお、質問タイプによっては、情報を引き出していないものもあったため、参加者の4分の3以上がその質問タイプから情報を引き出していなかった場合は分析から除外することとした。よって、FI条件では、手がかり質問、時間の分割、促し、WH質問が分析の対象であり、統制条件では、手がかり質問、WH質問、エコーイング、選択式質問、付加疑問文が分析の対象であった。

⁶手がかり質問から引き出された項目の平均値はCI条件1回目($M=9.28$, $SD=8.81$)及びCI条件2回目($M=4.48$, $SD=8.30$)の平均値である。

⁷面接1回目の平均値はFI条件1回目($M=9.81$, $SD=9.52$)及び統制条件1回目($M=9.28$, $SD=8.81$)の平均値であり、面接2回目の平均値はFI条件2回目($M=10.09$, $SD=11.55$)及び統制条件2回目($M=4.48$, $SD=8.30$)の平均値である。

各質問から引き出された情報の正確性について Table2.1.8 に示す。

Table2.1.8
各面接条件における面接1回目と2回目の各質問から引き出された情報の正確性

変数	FI 条件				統制条件			
	1回目		2回目		1回目		2回目	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
手がかり質問	0.94	0.05	0.93	0.04	0.96	0.06	0.87	0.18
時間の分割	0.94	0.09	0.96	0.06	—	—	—	—
促し	0.82	0.28	0.83	0.25	0.67	0.58	0.52	0.50
WH質問	0.94	0.08	0.72	0.40	0.90	0.15	0.84	0.20
エコーイング	0.92	0.17	0.76	0.13	0.81	0.36	0.95	0.12
理由の質問	1.00	—	0.50	0.71	1.00	0.00	1.00	—
選択式質問	0.85	0.14	0.73	0.46	0.84	0.20	0.85	0.21
付加疑問文	—	—	0.00	—	1.00	0.00	0.61	0.39
総合	0.91	0.16	0.86	0.24	0.91	0.03	0.83	0.03

※総合については、FI条件（手がかり質問、時間の分割、促し、WH質問）、統制条件（手がかり質問、WH質問、エコーイング、選択式質問、付加疑問文）の総合

FI 条件において、引き出された項目の正確性について 2（面接回）
×4（質問タイプ：手がかり質問、時間の分割、促し、WH 質問）の分散分析を行った。その結果、面接 1 回目 ($M=.91, SD=.16$) と 2 回目 ($M=.86, SD=.24$) に有意な差は見られなかった ($F(1,79) = .92, p = .34, \eta^2 = .01$)。質問タイプでは、主効果が認められ、多重比較の結果、時間の分割 ($M=.95, SD=.07$)、手がかり質問 ($M=.93, SD=.05$)、促し ($M=.83, SD=.26$)、WH 質問 ($M=.82, SD=.32$) の順に引き出された項目の正確性が高く、時間の分割と WH 質問の間にのみ有意差が認められた ($F(3,79) = 4.08, p < .05, \eta^2 = .13$)⁸。また、面接回と質問タイプに有

⁸ 時間の分割、手がかり質問、促し、WH 質問の平均値は、各質問項目の FI 条件 1 回目及び FI 条件 2 回目の正確性の平均値である。

意な交互作用は見られなかった ($F(3,79) = 1.51, p = .22, \eta^2 = .05$)。

統制条件において、引き出された項目の正確性について 2 (面接回) × 5 (質問タイプ: 手がかり質問, WH 質問, エコーイング, 選択式質問, 付加疑問文) の分散分析を行った。その結果、面接回で主効果が認められ、面接 1 回目 ($M = .91, SD = .03$) よりも 2 回目 ($M = .83, SD = .03$) で引き出された項目の正確性が低下していた ($F(1,98) = 4.05, p < .05, \eta^2 = .04$)。質問タイプでは、有意な主効果は見られなかった ($F(4,98) = .68, p = .61, \eta^2 = .03$)。また、面接回と質問タイプに交互作用が認められた ($F(4,98) = 2.84, p < .05, \eta^2 = .10$)。下位検定として質問タイプごとに対応のある t 検定を行った結果、手がかり質問のみ、面接 1 回目 ($M = .96, SD = .06$) より 2 回目 ($M = .87, SD = .18$) で正確性が低下していた ($t(15) = 2.56, p < .05$)。

2-1-5. 考察

面接を繰り返し行った場合に司法面接が報告内容に与える影響

本実験では、NICHD ガイドラインの手法について教示を与えない場合に、多くの誘導的な質問が使用されることが予測されていた。そして、NICHD ガイドラインを用いることで、誤情報への接触や作話させられることがない面接を行えば、繰り返し行った場合に報告の正確さは低下しないのではないかと考えられていた。統制面接で FI よりも誘導的な質問が多く使用されていたのは、後述のとおりであるが、各面接で報告された情報の正確さについてみると、面接 1 回目より 2 回目で正確さは低下していたことが示された。このとき、FI 条件では面接 1 回目と 2 回目で正確さに有意差はみられなかったが、統制条件では、面接 1 回目から 2 回目にかけて有意に正確さが低下していた。ま

た、FI 条件では統制条件よりも多くの情報項目が報告されていたことが示された。このことから、FI を繰り返し実施した場合、統制面接よりも多くの情報を引き出すことができ、繰り返すときに情報の正確さが維持されるということが示唆される。

正確さにこのような違いが生じた要因としてはどのようなことが考えられるだろうか。本実験では、情報を正答、誤答、作話に分類し、それぞれについて面接条件や面接回による違いを調査した。その結果、FI では統制面接よりも多くの正答項目が報告されていることがわかった。一方、誤答項目、作話項目については面接条件による違いは見られなかった。これらの結果から、FI 条件でより多くの情報を、正確さを低下させることなく引き出すことができていたのは、FI を行うことにより、より多くの正答項目を引き出していたためであると考えられる。

また、面接条件の違いによって、報告される情報タイプに違いが生じるかについても調査した。その結果、正答、誤答、作話すべての項目において、人物情報が最も多く報告されていた。これは、刺激映像が、主役となる登場人物をカメラが追っている構造となっていたため、視点中心の人物についての報告が多かったものと考えられ、映像の性質上の特徴によるものと思われる。

ただし、FI のような誘導の少ない面接であっても、統制面接と比べて誤答や作話の報告を抑制することができるという結果ではなかった。一定数の誤った報告が見られたことについては、刺激映像の提示が偶発学習であったことの影響である可能性が考えられる。本実験では、実際を目撃事態に近付けるために、刺激映像提示時に映像を意図的に記憶しないような実験手続きを採っている。そのため、誘導がな

くとも、被面接者が記憶が曖昧な情報に関しては、誤って報告することもあり得るだろう。面接を繰り返し実施した場合、FI では、統制面接よりも正確な情報が報告されていたが、このように潜在的に不正確な報告があるということについては、留意が必要であるといえる。

面接を繰り返し行った場合に NICHD ガイドラインの教示が面接者の質問の仕方に与える影響

面接を繰り返し行った場合に NICHD ガイドラインが面接者の質問の仕方に与える影響について、まず FI 条件と統制条件で、質問タイプの使用数を比較した。その結果、FI 条件では、統制条件より質問の使用数が少なかった。FI 条件では、統制条件よりも多くの情報が引き出せていたことをみると、NICHD ガイドラインを使用した場合、より少ない質問で多くの情報を引き出すことができていたといえる。このことから、面接者がたくさん質問をし、聴き取りの流れをつくっていく面接者主体の面接ではなく、被面接者の報告を中心とした、被面接者主体の面接であったといえる。

また、それぞれの面接条件で使用されていた質問タイプについての分析では、有意な交互作用がみられた。手がかり質問、時間の分割、促しなど、NICHD ガイドラインで推奨されているオープン質問については、統制条件よりも FI 条件で多く使用されていた。一方、NICHD ガイドラインでは使用を避けることが推奨されている選択式質問、付加疑問文は FI 条件よりも統制条件で多く使用されていた。このことから、質問方法に制約のない面接では、潜在的に選択式質問、付加疑問文などの誘導的な質問が多用されていることが示唆される。また、10 分程度の NICHD ガイドラインの教示であっても、誘導的な質問で

はなくオープン質問を使用するように意識づけるためには有効であることが示された。

また、それぞれの質問から引き出された情報についてみると、どちらの面接条件でも、手がかり質問が最も多くの情報を引き出していたことがわかった。手がかり質問によって、被面接者の自由報告が促進されたためと考えられる。引き出された情報の正確さについてみると、FI 条件では、手がかり質問、時間の分割、促し、WH 質問から引き出された情報の正確性が高かった。このことは、オープン質問により多くの情報を正確に引き出すという、NICHD ガイドラインの目的と一致している。一方で、統制条件では、面接 1 回目から 2 回目にかけて情報の正確性が低下しており、その中でも、手がかり質問から引き出された情報の正確性が低下していた。このことは、統制条件では、面接 2 回目の時点で誘導的ではない質問の方法を使用した場合でも、誤った情報が報告されるということを示しており、統制条件の面接 1 回目で誘導を含む質問を使用したことによって、誘導的な質問に含まれていた誤情報や、誘導的な質問から引き出された誤った報告により、刺激映像についての記憶が汚染された可能性が示唆される。この結果は、誤情報を含む面接を繰り返し行った場合に報告の正確さが低下するという先行研究と一致している（Bruck, Ceci, & Hembrooke, 2002; Poole & Lindsay, 2001; Roediger, Jacoby, & McDermott, 1996）。

結論と課題

以上をまとめると、面接を繰り返し行う場合、NICHD ガイドラインに基づく面接であれば、そうでない面接よりも正確な報告を引き出すことができるといえる。しかし、いずれの面接条件でも報告された内

容に誤った内容も含まれていたことから、NICHD ガイドラインを用いた面接を行った場合にも不正確な情報が報告される可能性があることに留意する必要があるといえる。しかし、1 回の報告だけでは情報が不十分な場合など、再度面接することが必要な場合には、NICHD ガイドラインを使用することが有効であるといえるだろう。

また、積極的に誤情報を与えなくても、面接者の質問の仕方が誘導的であると、面接を繰り返し行う場合に報告の正確さは低下する可能性があるといえる。英国内務省・英国保健省（1992 仲他訳 2007）では、面接のビデオ録画が推奨されているが、このような、面接者の発話も被面接者の発話も、全て完全に記録できるようなシステムが必要であろう。

最後に、以下で本実験での課題を述べる。まず、本実験では、FI と統制面接をそれぞれ 2 回ずつ繰り返した場合の比較を行った。その結果、統制面接だけ正確さが低下することが示されたが、面接 1 回目に統制面接を行ったことによる結果なのか、統制面接を 2 回繰り返したことによる結果なのかは定かではない。現実場面では、事件の目撃直後や、虐待があった直後に、誰かに報告する前に FI を受けることは困難な場合もある。このような場合、1 回目の報告を行う際に誘導的な質問があった場合にも、次に FI を行えば正確な報告が得られるのかという疑問が残る。

また、FI を繰り返した場合に正確さが維持されたのは、FI の繰り返しの結果なのか、面接 1 回目に FI を行ったことによる結果なのかも定かではない。実際に、法廷で証言する場合などは、最初にオープン形式の質問で報告させたあと、反対尋問で誘導的な質問によって報告を求められることがある。1 回目に FI を行うことで、次に誘導があっ

ても正確さが維持されるのかについても疑問が残る。

さらに，本研究では，同一面接者が面接を行ったため，2 回目の面接時に面接者は，映像に対するイメージがすでに出来上がっていた可能性が考えられる。そのため，面接者が持つ“事前情報”により，2 回目の面接で使用する質問が，誘導的になっていた可能性も考えられる。面接者の事前情報が面接内容に与える影響については，また別途検討する必要がある。

次節では，1 回目に司法面接を行い，2 回目に統制面接を行った場合や，1 回目に統制面接を行い，2 回目に司法面接を行った場合について調査する。

2-2. 実験 2：面接を繰り返した場合に 1 度目に司法面接を行うことが報告内容に及ぼす影響

2-2-1. 目的

本実験では、面接を繰り返した場合に、1 度目に FI を行うことが報告内容に及ぼす影響について調査する。実験 1 では、FI を 2 度繰り返した場合と、統制面接を 2 度繰り返した場合の報告内容について検討した。その結果、FI を繰り返し行った場合には、報告内容の正確さが維持されるのに対し、統制面接を繰り返し行った場合には正確さが低下していた。この理由として、以下の 2 点が考えられる。

1 つめに、FI を繰り返し行った場合に報告の正確さが低下しなかったのは、1 回目に FI を行ったことで、予防効果が生じたということである。自由報告を先に行うことで、他の情報によって記憶が汚染されないまま定着し、後の誘導的な質問への抵抗力がつくということは、先行研究でも示されている（e.g., 大沼・箱田・大上, 2005）。また、直接的な質問よりも自由報告を先に行った方が正確な情報を引き出すことができるという知見もある（e.g., Snee & Lush, 1941）。実験 1 では、1 回目の FI でオープン質問を多く使用したことにより自由報告が促進されたため、2 回目に行う面接の方法の違いに関わらず、正確な報告を行うための耐性ができていた可能性がある。

2 つめに、統制面接を繰り返し行った場合に報告の正確さが低下したのは、1 度目に統制面接を行ったことで、記憶が汚染された可能性があるということである。前節でも述べたように、誘導的な質問を先に行うことは、事後情報効果など、記憶を不正確にする方向の影響を与えることが考えられる。統制面接に含まれていた誘導的な質問によ

り引き出された誤った記憶が、正しい記憶と混在して定着してしまう可能性がある。

つまり、1 度目に行う面接方法によって、2 度目に報告される内容に違いが生じるのではないだろうか。そこで本実験では、以上の可能性を考慮し、1 度目の面接が FI であることで、予防効果があるのかを検討する。なお、面接者が持つ事前情報が及ぼす影響について交絡することを防ぐため、同一の面接者による面接の繰り返しではなく、異なる面接者により、面接を繰り返し行うこととする。

本実験では、2 度目の面接では統制面接（以下、CI とする）を行う場合に、1 度目に FI を行った場合（FI-CI 条件）と、CI を行った場合（CI-CI 条件）について比較する。先行研究で、1 度目に自由報告を行えば後の誘導的な質問に対する抵抗力がつくことが示されていることから、FI-CI 条件では CI-CI 条件よりも正確な情報が報告されることが予測される。

2-2-2. 方法

実験参加者

本実験の参加者は 18 歳から 27 歳の大学生 120 名（男性 60 名、女性 60 名）であった（ $M=19.87$, $SD=1.10$ ）。本実験の参加者のうち、実験 1 に参加した者はいなかった。まず参加者を、ランダムに FI-CI 条件、CI-CI 条件にそれぞれ 60 名ずつ割り当てた。さらに、それぞれ 3 名 1 組にし、その中で面接者役 2 名と被面接者役 1 名に割り当てた。すべての組で被面接者は 2 回ずつ面接を受け、面接者 2 名がそれぞれ 1 回ずつ面接を行った。なお、性差の影響をなくすため、それぞれ女性同士、男性同士で組になるようにした。

このうち、FI-CI 条件の 1 組の参加者および CI-CI 条件の 1 組の参加者について、面接手続きに不備が見られたので、分析から除外した。よって分析対象は、FI-CI 条件 57 名（3 名×19 組）、CI-CI 条件 57 名（3 名×19 組）であった。

データ分析

面接条件の違いと、繰り返しの効果について検討するため、2（面接条件：FI-CI, CI-CI）×2（面接回：1 回目, 2 回目）の 2 要因分散分析を行った。前者は参加者間要因、後者は参加者内要因であった。従属変数は、報告された情報数および情報の正確性であった。また、実験 1 と同様に Holliday & Albion（2004）に従って、それぞれの情報を 4 種類（人物情報、活動情報、事物情報、場所状況情報）に分類した。分析は SPSS 17.0J for Windows で行い、下位検定には Bonferroni 法を用いた。有意水準は 5%に設定した。

機材

実験 1 と同様、映像の提示にはノート型パーソナルコンピュータ（HP Compaq 6535s/CT Notebook PC, 14.1 型液晶）を用い、面接の録音には IC レコーダー（OLYMPUS VoiceTrek V-41）、録画にはデジタルビデオカメラ（SONY HDR-HC7）を用いた。

材料

刺激映像 刺激映像は、実験 1 で使用した DVD であった。DVD は、事件性のある映像を視聴させることによって、目撃事態に近づけることを目的として、実験用に制作したものである。

面接 面接手続きは、2種類用意した。FI-CI 条件では、1 回目に FI を行い、2 回目には CI を行った。CI-CI 条件では、2 回とも CI を行った。面接者には、面接を行う前に面接手続きについて教示を行った。FI, CI の具体的な面接シナリオについては実験 1 と同様である。ただし、本実験では、どちらの条件でも 1 回目と 2 回目の面接は異なる面接者が実施し、2 回目の面接者に対して 1 回目の面接についての情報は与えなかった。

手続き

被面接者 まず、被面接者には、映像提示用のノートパソコンが設置された心理学実験準備室に入るように求め、数種類の課題への参加と事前に説明できない内容も含まれていることについて、書面にて承諾を得た。その後、「色を使用した課題に参加してもらいますが、映像の性質と課題の成績の関連をみるため、途中で映像を観てもらいます。」と教示し、以下の手順で課題および刺激提示を行った。

実験手続きは（1）無関連課題、（2）刺激の提示、（3）無関連課題（続き）、（4）面接 1、（5）面接 2（1 週間後）の 5 段階で構成された。（1）および（3）は、刺激の提示を偶発学習とするために実施した。（1）から（5）の詳細については、実験 1 と同様であるので、割愛する。

面接者 面接者には、面接記録用のビデオカメラ、IC レコーダーが設置された実験ブース（以下、面接室）に入るよう求め、面接実験への参加について書面にて承諾を得た。その後、「面接官として、今被面接者が観ている映像の内容について、聴き取りを行ってもらいま

す。」と教示した。面接 1 回目では，被面接者に課題や刺激提示を行っている間に面接手続きについて説明を行い，面接 2 回目では，被面接者が面接室に入室する前に説明を行った。

2-2-3. コーディング

面接の内容は，全て書き起こし，スコア化した。スコア化する際の正答の定義は，実験 1 で使用したものと同様の定義を使用した。実験 1 と同様に，それぞれの項目について，被面接者が最初に言及した時点で，情報数 1 とした。

スコア化は筆者と研究仮説を知らない評定者 1 名が独立して行った。筆者が参加者 30 名（10 組×面接 2 回＝面接 20 回分）の報告内容についてスコア化し，評定者が 120 名すべての参加者の報告内容をスコア化した。評定者間の一致率は 92.94%であった（ $\kappa = .81$ ）。不一致の項目については，評定者のスコア結果を採用した。

2-2-4. 結果

面接時間

面接条件の違いにより面接の所要時間に違いが生じることによって，報告量に影響を与えている可能性を考慮するため，面接時間について 2（面接条件）×2（面接回）の分散分析を行った。その結果，FI-CI 条件（ $M=9.31$ ， $SD=3.13$ ）と CI-CI 条件（ $M=8.82$ ， $SD=3.48$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1,36)=.39$ ， $p=.54$ ， $\eta^2=.01$ ）。面接回では，面接 1 回目（ $M=9.04$ ， $SD=3.02$ ）と 2 回目（ $M=9.08$ ， $SD=3.59$ ）に有意な

差は見られなかった ($F(1,36)=.00, p=.96, \eta^2=.00$)⁹。また、面接条件と面接回に有意な交互作用は見られなかった ($F(1,36)=.37, p=.55, \eta^2=.01$)。よって、以下の分析では面接時間については考慮しないこととする。

再生成績

各面接条件における面接1回目、2回目及び合計の平均情報項目数について Table2.2.1 に示す。また、人物情報、活動情報、事物情報、場所状況情報について、面接条件による違いを検討するため、面接1回目及び2回目の合計値を使用したため、各面接条件における平均項目数について Table2.2.2 に示す。

⁹ 面接1回目の平均値は FI-CI 条件1回目 ($M=9.52, SD=2.19$) 及び CI-CI 条件1回目 ($M=8.57, SD=3.68$) の平均値であり、面接2回目の平均値は FI-CI 条件2回目 ($M=9.10, SD=3.91$) 及び CI-CI 条件2回目 ($M=9.07, SD=3.35$) の平均値である。

Table2.2.1
各面接条件における平均情報項目数

変数	FI-CI条件						CI-CI条件					
	1回目			2回目			1回目			2回目		
	平均	SD	合計	平均	SD	合計	平均	SD	合計	平均	SD	合計
面接時間	9.52	2.19	3.13	9.10	3.91	9.31	8.57	3.68	9.07	3.35	8.82	3.48
全情報数	46.05	10.14	11.27	42.68	12.35	44.37	40.47	11.51	44.95	11.00	42.71	11.33
正答数合計	43.84	9.96	10.81	40.63	11.65	42.24	38.11	10.72	41.74	10.27	39.92	10.51
誤答数合計	1.47	1.47	1.29	1.47	1.12	1.47	1.74	0.99	2.00	1.37	1.86	1.19
作話数合計	0.74	1.10	1.05	0.58	1.02	0.66	0.63	1.34	1.21	3.78	0.92	2.81
正確性	0.95	0.04	0.03	0.94	0.04	0.95	0.95	0.03	0.93	0.08	0.94	0.06

注) 正確性は、正答数合計/正答数合計 + 誤答数合計 + 作話数合計で算出した。

Table2.2.2

各面接条件における情報タイプごとの情報項目数

変数	FI-CI条件		CI-CI条件		FI-CI条件・CI-CI条件総合	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
正答数 1, 2 回目合計						
人物情報	40.58	8.22	39.47	8.76	40.03	8.39
活動情報	21.84	5.99	19.58	5.70	20.71	5.88
事物情報	15.26	3.74	15.42	6.69	15.34	5.34
場所状況情報	6.79	2.78	5.37	2.83	6.08	2.86
誤答数 1, 2 回目合計						
人物情報	2.00	1.76	2.74	1.76	2.37	1.78
活動情報	—	—	0.11	0.32	0.05	0.23
事物情報	0.84	0.96	0.74	1.15	0.79	1.04
場所状況情報	0.11	0.46	0.16	0.50	0.13	0.48
作話数 1, 2 回目合計						
人物情報	0.89	1.05	1.32	2.43	1.11	1.86
活動情報	0.32	0.58	0.32	0.95	0.32	0.78
事物情報	0.05	0.23	—	—	0.03	0.16
場所状況情報	0.05	0.23	0.21	0.71	0.13	0.53

全情報数 面接条件と面接回によって、報告された情報数に違いがあるかを調査するため、2（面接条件）×2（面接回）の分散分析を行った。その結果、FI-CI条件（ $M=44.37$, $SD=11.27$ ）とCI-CI条件（ $M=42.71$, $SD=11.33$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1,36)=.28$, $p=.60$, $\eta^2=.01$ ）。面接回では、面接1回目（ $M=43.26$, $SD=11.06$ ）と2回目（ $M=43.82$, $SD=11.59$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1,36)=.09$, $p=.77$, $\eta^2=.00$ ）¹⁰。また、面接条件と面接回に交互作用が認められた（ $F(1,36)=4.43$, $p<.05$, $\eta^2=.11$ ）。下位検定の結果、FI-CI条件では面接1回目（ $M=46.05$,

¹⁰ 面接1回目の平均値はFI-CI条件1回目（ $M=46.05$, $SD=10.14$ ）及びCI-CI条件1回目（ $M=40.47$, $SD=11.51$ ）の平均値であり、面接2回目の平均値はFI-CI条件2回目（ $M=42.68$, $SD=12.35$ ）及びCI-CI条件2回目（ $M=44.95$, $SD=11.00$ ）の平均値である。

$SD=10.14$) と 2 回目 ($M=42.68$, $SD=12.35$) に有意差が見られなかったが, CI-CI 条件で面接 1 回目 ($M=40.47$, $SD=11.51$) よりも 2 回目 ($M=44.95$, $SD=11.00$) で報告された情報量が多かった ($F(1,18)=5.04$, $p < .05$, $\eta^2 = .22$)。

正答項目 どのような情報タイプが各面接条件で報告されやすいのかを調査するため, まず正答項目について, 2 (面接条件) $\times$ 4 (情報タイプ) の分散分析を行った。その結果, FI-CI 条件 ($M=42.24$, $SD=10.81$) と CI-CI 条件 ($M=39.92$, $SD=10.51$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36)=.59$, $p = .45$, $\eta^2 = .02$)。情報タイプでは, 主効果が認められ, 人物情報 ($M=40.03$, $SD=8.39$), 活動情報 ($M=20.71$, $SD=5.89$), 事物情報 ($M=15.34$, $SD=5.34$), 場所状況情報 ($M=6.08$, $SD=2.86$) の順に多くの正答項目が報告されており, それぞれの情報タイプ間で有意差が認められた ($F(3,108)=406.41$, $p < .01$, $\eta^2 = .92$)。面接条件と情報タイプに有意な交互作用は見られなかった ($F(3,108) = .50$, $p = .68$, $\eta^2 = .01$)。

誤答項目 同様に, 誤答項目について, 2 (面接条件) $\times$ 4 (情報タイプ) の分散分析を行った。その結果, FI-CI 条件 ($M=1.47$, $SD=1.29$) と CI-CI 条件 ($M=1.86$, $SD=1.19$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36)=1.43$, $p = .24$, $\eta^2 = .04$)。情報タイプでは, 主効果が認められ, 多重比較の結果, 人物情報 ($M = 2.37$, $SD=1.78$) が最も多く, 次いで事物情報 ($M = .79$, $SD=1.04$) が多く, 場所状況情報 ($M = .13$, $SD=.48$) と活動情報 ($M = .05$, $SD=.23$) の間に差は見られなかった ($F(3,108) = 37.91$, $p < .01$, $\eta^2 = .51$)。面接条件と情報タイプに有意な交互作用は見

られなかった ($F(3,108) = 1.13, p = .34, \eta^2 = .03$)。

作話項目 最後に、作話項目についても、2（面接条件）×4（情報タイプ）の分散分析を行った。その結果、FI-CI 条件 ($M=.66, SD=1.05$) と CI-CI 条件 ($M=.92, SD=2.81$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36)=.30, p = .59, \eta^2 = .01$)。情報タイプでは、主効果が認められ、多重比較の結果、人物情報 ($M = 1.11, SD=1.86$) が最も多く、活動情報 ($M = .32, SD=.78$) と場所状況情報 ($M = .13, SD=.53$)、事物情報 ($M = .03, SD=.16$) の間にそれぞれ差は見られなかった ($F(3,108) = 12.25, p < .01, \eta^2 = .25$)。面接条件と情報タイプに有意な交互作用は見られなかった ($F(3,108) = .58, p = .63, \eta^2 = .02$)。

正確性 報告された内容の信憑性を表すための指標として、正確性を用いて検討した。正確性は、報告された全項目数のうち正答が占める割合とした (Koriat & Goldsmith, 1994)。正確性について、2（面接条件）×2（面接回）の分散分析を行った。その結果、FI-CI 条件 ($M=.95, SD=.03$) と CI-CI 条件 ($M=.94, SD=.06$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36)=1.21, p = .30, \eta^2 = .03$)。面接回でも、面接 1 回目 ($M=.95, SD=.04$) と 2 回目 ($M=.94, SD=.06$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36)=.10, p = .75, \eta^2 = .00$)¹¹。また、面接条件と面接回に有意な交互作用も見られなかった ($F(1,36)=.29, p = .59, \eta^2 = .01$)。

¹¹ 面接 1 回目の平均値は FI-CI 条件 1 回目 ($M=.95, SD=.04$) 及び CI-CI 条件 1 回目 ($M=.95, SD=.03$) の平均値であり、面接 2 回目の平均値は FI-CI 条件 2 回目 ($M=.94, SD=.04$) 及び CI-CI 条件 2 回目 ($M=.93, SD=.08$) の平均値である。

報告内容の変化

報告内容の変化についての指標である，新出項目，抜け落ち項目，ネット報告量，共通項目について Table2.2.3 に示す。

Table2.2.3
各面接条件における報告の変化項目

変数	FI-CI条件		CI-CI条件		FI-CI条件・CI-CI条件総合	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
新出項目合計	10.16	6.83	14.00	7.31	12.08	7.25
正確性	0.86	0.12	0.89	0.15	0.88	0.14
抜け落ち項目合計	13.26	9.04	9.47	5.55	11.37	7.65
正確性	0.85	0.14	0.86	0.14	0.86	0.14
共通項目合計	32.79	10.02	31.00	9.28	31.89	9.57
正確性	0.98	0.03	0.97	0.03	0.97	0.03
3項目合計	18.74	13.26	18.16	11.92	18.45	12.55
正確性	0.90	0.12	0.91	0.13	0.90	0.12
ネット報告量合計	56.21	9.62	54.47	13.25	55.34	11.45
正確性	0.94	0.03	0.92	0.07	0.93	0.05

新出項目，抜け落ち項目，共通項目 新出項目，抜け落ち項目，共通項目に関し面接条件による違いがあるかを調査するために，項目数と正確性について項目（新出，抜け落ち，共通）×面接条件の2要因分散分析を行った。

項目数についてみると，項目に主効果が認められ（ $F(2,72) = 66.59$, $p < .01$, $\eta^2 = .65$ ），共通項目（ $M=31.89$, $SD=9.57$ ）の項目数が最も多く，新出項目（ $M=12.08$, $SD=7.25$ ）と抜け落ち項目（ $M=11.37$, $SD=7.65$ ）の項目数に有意差は認められなかった。面接条件では，FI-CI条件（ $M=18.73$, $SD=13.26$ ）とCI-CI条件（ $M=18.16$, $SD=11.92$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1,36)=.21$, $p = .65$, $\eta^2 = .01$ ）。また，項目と面接条件に有意な交互作用は見られなかった（ $F(2,72)=1.92$, $p = .15$, η^2

=.05)。

正確性についてみると、項目に主効果が認められ ($F(2,70) = 9.89, p < .01, \eta^2 = .22$)、共通項目 ($M=.97, SD=.03$) の正確性が最も高く、新出項目 ($M=.88, SD=.14$) と抜け落ち項目 ($M=.86, SD=.14$) の正確性に有意差は認められなかった。面接条件では、FI-CI 条件 ($M=.90, SD=.12$) と CI-CI 条件 ($M=.91, SD=.13$) に有意な差は見られなかった ($F(1,35)=.51, p = .48, \eta^2 = .01$)。また、項目と面接条件に有意な交互作用は見られなかった ($F(2,70)=.30, p = .74, \eta^2 = .01$)。

ネット報告量 ネット報告量の項目数とその正確性について、面接条件による違いがあるかを調査するために、1 要因分散分析を行った。その結果、項目数では、FI-CI 条件 ($M=56.21, SD=9.62$) と CI-CI 条件 ($M=54.47, SD=13.25$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36)=.21, p = .65, \eta^2 = .01$)。また、正確性でも FI-CI 条件 ($M=.94, SD=.03$) と CI-CI 条件 ($M=.92, SD=.07$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36)=.94, p = .34, \eta^2 = .03$)。

2-2-5. 考察

報告された情報量についてみると、2 回の面接でどちらも統制面接を行った場合、1 回目の面接よりも 2 回目の面接で報告された情報量が多かった。これに対し、面接 1 回目で FI を行った場合には、面接 1 回目と 2 回目で報告された情報量に違いは見られなかった。次に、報告された情報の正確さについてみると、1 回目の面接が FI であったかどうかに関わらず、情報の正確さに違いは見られなかった。

報告された情報タイプの違いについてみると、正答項目、誤答項目、

作話項目で一貫して、人物情報が最も多く報告されていた。これは、実験 1 と同様に、映像の性質によるものと思われる。刺激映像が、登場人物をカメラが追っている構造となっていたため、視点中心となる人物に関する情報が最も記憶されやすいと考えられるが、この結果は面接条件が異なっても同様に見られることがわかった。

本実験の結果からは、1 度目に FI を行うことによる予防効果があるかは定かではない。本実験では、1 度目に統制面接を行った場合でも、1 度目に FI を行った場合と同程度に正確な情報が 2 度目の面接で報告されることが示された。つまり、実験 1 で統制面接を繰り返し行った場合に面接 2 回目で正確さが低下したのは、1 度目の面接の手法だけの要因によるものではないということが考えられる。すなわち、1 度目に FI を行った場合に必ず正確性が維持されるとはいえず、反対に、1 度目に統制面接を行った場合に必ず正確さの低下を引き起こすものではないということが示唆された。今後の課題として、その他の要因について考慮する必要があるといえる。

一方で、統制面接を繰り返し行う場合には、2 度目の面接で情報の報告量が増加するが、1 度目に FI を行った場合には、2 度目に行った統制面接と同程度の情報量が報告されることがわかった。実験 1 では、統制面接よりも FI においてより多くの情報が報告されることが示されていたが、実験 1 の結果を鑑みると、FI を 1 度目に行った場合は、多くの情報が報告され、そのまま 2 度目でも同程度の量の情報が報告されることが考えられる。これに対し、統制面接を繰り返し実施する場合、1 度目の面接では報告される情報は少ないが、本実験では異なる面接者が面接を実施したため、面接者という文脈が変わったことで、1 度目には報告されなかった情報が 2 回目の面接時に報告され、その

結果として2度目の面接でより多くの情報を報告するようになった可能性が考えられる。面接場面に慣れていないような被面接者に対し、最初に面接を実施する場合に、FIを行えば、最初の面接の段階から、統制面接を繰り返し実施するのと同じくらい多くの情報を引き出すことができるというメリットが考えられるだろう。

2-3. 実験 3：面接を繰り返した場合に 1 度目に統制面接を行うことが報告内容に及ぼす影響

2-3-1. 目的

本実験では、1 度目の面接で統制面接を行う効果について検討する。先述したとおり、先行研究では、事後情報効果 (post information effect) など、出来事を目撃した直後に誤情報に接触することで、後の報告が不正確に歪められることが示されてきた (e.g., Loftus, Miller, & Burns, 1978)。これは、目撃した直後に外部からの情報に晒されることで、正しい目撃記憶と誤った情報が混同してしまい、ソースモニタリングエラーが起こっているためであると考えられる。このようなエラーについて、自ら答えを出すために考えるというような、付随的な認知操作があることで、よりエラーが増加するという知見があり、他者が用意した情報に比べ、自分で考えた情報をより良く覚えているという記憶現象を生成効果 (generation effect) という (Slamecka & Graf, 1978)。

実験 1 では、統制面接を繰り返し行うことで、報告の正確さが低下していたことが示されている。この原因として、1 度目に統制面接を行ったことで誘導的な質問の影響を受けることにより、自ら誤情報を生成し、その情報の影響を受け、2 度目の面接で誤った報告が増加したことが考えられる。それでは、1 度目に統制面接に含まれる誘導的な質問により、刺激映像の記憶と誤った情報が混在した可能性があるような場合には、2 度目に FI を行ったとしても、正確さは低下するのだろうか。1 度目の面接で誘導的な質問の影響を受けて誤った情報を報告したとしても、2 回目の面接で誘導がなければ正確さは低下しないことも考えられる。

そこで本実験では、1 度目に統制面接（CI）を行い 2 度目に FI を行う条件（CI-FI 条件）と 1 度目と 2 度目に FI を行う条件（FI-FI 条件）を設定し、報告内容について調査する。なお、実験 2 と同様に、面接者が持つ事前情報が及ぼす影響について交絡することを防ぐため、同一の面接者による面接の繰り返しではなく、異なる面接者により、面接を繰り返し行うこととする。

報告される情報の量に関しては、実験 2 の結果からは、1 度目に CI を行った場合に、1 度目に FI を行った場合よりも少ないことが予測される。報告される情報の正確さに関しては、1 度目に CI を行った場合には誤情報を報告しやすく、その結果として FI を行った場合よりも正確さが低下することが考えられるので、CI-FI 条件では FI-FI 条件よりも報告される情報の正確さが低いことが予測される。

2-3-2. 方法

データ分析、機材、材料、手続きについては、実験 2 と同様であるので、割愛する。

実験参加者

本実験の参加者は 18 歳から 24 歳の大学生 120 名（男性 60 名，女性 60 名）あった（ $M=19.84$ ， $SD=1.47$ ）。本実験の参加者のうち、実験 1 及び実験 2 に参加した者はいなかった。まず参加者を、ランダムに FI-FI 条件，CI-FI 条件にそれぞれ 60 名ずつ割り当てた。さらに、それぞれ 3 名 1 組にし、その中で面接者役 2 名と被面接者役 1 名に割り当てた。すべての条件で面接は 2 回ずつ行われ、面接者 2 名がそれぞれ 1 回ずつ面接を行った。なお、性差の影響をなくすため、それぞれ

女性同士，男性同士で組になるようにした。

このうち，FI-FI 条件の 1 組の参加者について，面接手続きに不備が見られたので，分析から除外した。よって分析対象は，FI-FI 条件 57 名（3 名×19 組），CI-FI 条件 60 名（3 名×20 組）であった。

2-3-3. コーディング

面接の内容は，全て書き起こし，スコア化した。スコア化する際の正答の定義は，実験 1 で使用したものと同様の定義を使用した。実験 1 と同様に，それぞれの項目について，被面接者が最初に言及した時点で，情報数 1 とした。

スコア化は筆者と研究仮説を知らない評定者 1 名が独立して行った。筆者が参加者 30 名（10 組×面接 2 回＝面接 20 回分）の報告内容についてスコア化し，評定者が 120 名すべての参加者の報告内容をスコア化した。評定者間の一致率は 92.76%であった($\kappa=.81$)。不一致の項目については，評定者のスコア結果を採用した。

2-3-4. 結果

面接時間

面接条件の違いにより面接の所要時間に違いが生じることによって，報告量に影響を与えている可能性を考慮するため，面接時間について 2（面接条件）×2（面接回）の分散分析を行った。その結果，FI-FI 条件（ $M=9.02$ ， $SD=3.27$ ）と CI-FI 条件（ $M=10.23$ ， $SD=3.10$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1,35)=3.03$ ， $p=.09$ ， $\eta^2=.08$ ）。面接回では，面接 1 回目（ $M=10.16$ ， $SD=3.52$ ）と 2 回目（ $M=9.16$ ， $SD=2.87$ ）に有

意な差は見られなかった ($F(1,35)=1.97, p=.17, \eta^2=.05$)¹²。また、面接条件と面接回に有意な交互作用も見られなかった ($F(1,35)=1.17, p=.29, \eta^2=.03$)。よって、以下の分析では面接時間については考慮しないこととする。

再生成績

各面接条件における面接1回目、2回目及び合計の平均情報項目数について Table2.3.1 に示す。また、人物情報、活動情報、事物情報、場所状況情報について、面接条件による違いを検討するため、面接1回目及び2回目の合計値を使用したため、各面接条件における平均項目数について Table2.3.2 に示す。

¹²面接1回目の平均値は FI-FI 条件1回目 ($M=9.93, SD=3.60$) 及び CI-FI 条件1回目 ($M=10.36, SD=3.53$) の平均値であり、面接2回目の平均値は FI-FI 条件2回目 ($M=8.05, SD=2.75$) 及び CI-FI 条件2回目 ($M=10.11, SD=2.68$) の平均値である。

Table2.3.1
各面接条件における平均情報項目数

変数	FI-FI条件				CI-FI条件			
	1回目		2回目		1回目		2回目	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
面接時間	9.93	3.60	8.05	2.75	10.36	3.53	10.11	2.68
全情報数	53.37	11.57	47.89	13.01	42.60	15.12	42.45	12.97
正答数合計	50.74	11.18	44.95	12.02	39.90	14.08	39.30	12.17
誤答数合計	2.05	1.51	1.95	1.87	1.80	1.94	2.40	1.19
作話数合計	0.58	1.46	0.95	2.57	0.90	1.37	0.75	1.07
正確性	0.95	0.04	0.94	0.06	0.94	0.07	0.93	0.04
合計								
	9.02	3.27	9.02	3.27	10.23	3.10	10.23	3.10
	50.63	2.64	50.63	2.64	42.53	2.58	42.53	2.58
	47.84	11.82	47.84	11.82	39.60	12.99	39.60	12.99
	2.00	1.68	2.00	1.68	2.10	1.61	2.10	1.61
	0.76	2.07	0.76	2.07	0.83	1.22	0.83	1.22
	0.95	0.05	0.95	0.05	0.93	0.05	0.93	0.05

注) 正確性は、正答数合計/正答数合計+誤答数合計+作話数合計で算出した。

Table2.3.2

各面接条件における情報タイプごとの情報項目数

変数	FI-FI条件		CI-FI条件		FI-FI条件・CI-FI条件総合	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
正答数 1, 2 回目合計						
人物情報	48.37	10.56	37.75	11.84	42.92	12.32
活動情報	24.63	5.83	20.30	8.13	22.41	7.34
事物情報	16.11	5.39	15.55	6.58	15.82	5.96
場所状況情報	6.58	2.32	5.60	2.30	6.08	2.33
誤答数 1, 2 回目合計						
人物情報	2.26	3.00	2.85	2.08	2.56	2.55
活動情報	0.21	0.54	0.10	0.31	0.15	0.43
事物情報	1.42	1.68	1.15	1.23	1.28	1.45
場所状況情報	0.11	0.46	0.10	0.45	0.10	0.45
作話数 1, 2 回目合計						
人物情報	0.79	1.36	1.25	1.45	1.03	1.41
活動情報	0.32	0.67	0.20	0.52	0.26	0.60
事物情報	0.42	1.17	0.10	0.45	0.26	0.88
場所状況情報	—	—	0.10	0.45	0.05	0.32

全情報数 面接条件と面接回によって、報告された情報数に違いがあるかを調査するため、2（面接条件）×2（面接回）の分散分析を行った。その結果、FI-FI条件（ $M=50.63$, $SD=2.64$ ）でCI-FI条件（ $M=42.53$, $SD=2.58$ ）よりも報告された情報量が多かった（ $F(1,37)=4.82$, $p<.05$, $\eta^2=.12$ ）。面接回では、面接1回目（ $M=47.85$, $SD=14.40$ ）と2回目（ $M=45.10$, $SD=13.11$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1,37)=1.80$, $p=.19$, $\eta^2=.05$ ）¹³。また、面接条件と面接回に有意な交互作用も見られなかった（ $F(1,37)=1.61$, $p=.21$, $\eta^2=.04$ ）。

¹³面接1回目の平均値はFI-FI条件1回目（ $M=53.37$, $SD=11.57$ ）及びCI-FI条件1回目（ $M=42.60$, $SD=15.12$ ）の平均値であり、面接2回目の平均値はFI-FI条件2回目（ $M=47.89$, $SD=13.01$ ）及びCI-FI条件2回目（ $M=42.45$, $SD=12.97$ ）の平均値である。

正答項目 どのような情報タイプが各面接条件で報告されやすいのかを調査するため、まず正答項目について、2（面接条件）×4（情報タイプ）の分散分析を行った。その結果、FI-FI 条件（ $M=47.84$, $SD=11.82$ ）で CI-FI 条件（ $M=39.60$, $SD=12.97$ ）より多くの正答項目が報告されていた（ $F(1,37)=5.34$, $p<.05$, $\eta^2=.12$ ）。情報タイプでも主効果が認められ、人物情報（ $M=42.92$, $SD=12.32$ ）、活動情報（ $M=22.41$, $SD=7.34$ ）、事物情報（ $M=15.82$, $SD=5.96$ ）、場所状況情報（ $M=6.08$, $SD=2.33$ ）の順に多くの正答項目が報告されており、それぞれの情報タイプ間で有意差が認められた（ $F(3,111)=302.94$, $p<.01$, $\eta^2=.89$ ）。また、面接条件と情報タイプに交互作用が認められた（ $F(3,111)=6.68$, $p<.01$, $\eta^2=.15$ ）。下位検定として情報タイプごとに1要因分散分析を行った結果、人物情報について、FI-FI 条件（ $M=48.37$, $SD=10.56$ ）で CI-FI 条件（ $M=37.75$, $SD=11.84$ ）よりも多くの正答項目が報告されていた（ $F(1,37)=8.70$, $p<.01$, $\eta^2=.19$ ）。

誤答項目 同様に、誤答項目について、2（面接条件）×4（情報タイプ）の分散分析を行った。その結果、FI-FI 条件（ $M=2.00$, $SD=1.68$ ）と CI-FI 条件（ $M=2.10$, $SD=1.61$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1,37)=.05$, $p=.83$, $\eta^2=.00$ ）。情報タイプでは、主効果が認められ、多重比較の結果、人物情報（ $M=2.56$, $SD=2.55$ ）が最も多く、次いで事物情報（ $M=1.28$, $SD=1.45$ ）が多く、活動情報（ $M=.15$, $SD=.43$ ）と場所状況情報（ $M=.10$, $SD=.45$ ）の間に差は見られなかった（ $F(3,111)=22.20$, $p<.01$, $\eta^2=.38$ ）。また、面接条件と情報タイプに有意な交互作用は見られなかった（ $F(3,111)=.58$, $p=.63$, $\eta^2=.02$ ）。

作話項目 最後に、作話項目についても、2（面接条件）×4（情報

タイプ)の分散分析を行った。その結果、FI-FI条件 ($M=.76$, $SD=2.07$) と CI-FI条件 ($M=.83$, $SD=1.22$) に有意な差は見られなかった ($F(1,37) = .02$, $p = .88$, $\eta^2 = .00$)。情報タイプで主効果が認められ、多重比較の結果、人物情報 ($M = 1.03$, $SD=1.41$) が最も多く、活動情報 ($M = .26$, $SD=.60$) と事物情報 ($M = .26$, $SD=.88$)、場所状況情報 ($M = .05$, $SD=.32$) の間にそれぞれ差は見られなかった ($F(3,111) = 12.78$, $p < .01$, $\eta^2 = .26$)。また、面接条件と情報タイプに有意な交互作用は見られなかった ($F(3,111) = 1.96$, $p = .12$, $\eta^2 = .05$)。

正確性 報告された内容の信憑性を表すための指標として、正確性を用いて検討した。正確性は、報告された全項目数のうち正答が占める割合とした (Koriat & Goldsmith, 1994)。正確性について、2 (面接条件) $\times$ 2 (面接回) の分散分析を行った。その結果、FI-FI条件 ($M=.95$, $SD=.05$) と CI-FI条件 ($M=.93$, $SD=.05$) に有意な差は見られなかった ($F(1,37) = 1.00$, $p = .33$, $\eta^2 = .03$)。面接回でも、面接1回目 ($M=.95$, $SD=.05$) と2回目 ($M=.93$, $SD=.06$) に有意な差は見られなかった ($F(1,37) = 1.15$, $p = .29$, $\eta^2 = .03$)¹⁴。また、面接条件と面接回に有意な交互作用も見られなかった ($F(1,36) = .09$, $p = .76$, $\eta^2 = .00$)。

報告内容の変化

報告内容の変化についての指標である、新出項目、抜け落ち項目、ネット報告量、共通項目について Table 2.3.3 に示す。

¹⁴面接1回目の平均値は FI-FI条件1回目 ($M=.95$, $SD=.04$) 及び CI-FI条件1回目 ($M=.94$, $SD=.07$) の平均値であり、面接2回目の平均値は FI-FI条件2回目 ($M=.94$, $SD=.06$) 及び CI-FI条件2回目 ($M=.93$, $SD=.04$) の平均値である。

Table2.3.3
各面接条件における報告の変化項目

変数	FI-FI条件		CI-FI条件		FI-FI条件・CI-FI条件総合	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
新出項目合計	9.05	8.12	12.25	5.90	10.69	7.16
正確性	0.86	0.25	0.81	0.22	0.83	0.23
抜け落ち項目合計	14.58	9.91	12.70	6.47	13.62	8.27
正確性	0.92	0.12	0.88	0.12	0.90	0.12
共通項目合計	38.00	10.48	29.90	11.73	33.85	11.74
正確性	0.96	0.04	0.96	0.05	0.96	0.05
3項目合計	20.54	15.76	18.28	11.73	19.38	13.83
正確性	0.92	0.16	0.88	0.16	0.90	0.16
ネット報告量合計	61.63	10.62	54.85	15.12	58.15	13.40
正確性	0.93	0.06	0.92	0.05	0.92	0.05

新出項目，抜け落ち項目，新出項目 新出項目，抜け落ち項目，共通項目に関して面接条件による違いがあるかを調査するために，項目数と正確性について項目（新出，抜け落ち，共通）×面接条件の2要因分散分析を行った。

項目数についてみると，項目に主効果が認められ（ $F(2,74) = 67.35$, $p < .01$, $\eta^2 = .65$ ），共通項目（ $M=33.85$, $SD=11.74$ ）の項目数が最も多く，新出項目（ $M=10.69$, $SD=7.16$ ）と抜け落ち項目（ $M=13.62$, $SD=8.27$ ）の項目数に有意差は認められなかった。面接条件では，FI-FI条件（ $M=20.54$, $SD=15.76$ ）とCI-FI条件（ $M=18.28$, $SD=11.73$ ）で有意な差は見られなかった。（ $F(1,37)=2.60$, $p = .12$, $\eta^2 = .07$ ）。また，項目と面接条件に交互作用が認められた（ $F(2,74) = 3.56$, $p < .05$, $\eta^2 = .08$ ）。下位検定として項目ごとに1要因分散分析を行った結果，共通項目で有意差が認められ（ $F(1,37) = 5.15$, $p < .05$, $\eta^2 = .12$ ），FI-FI条件（ $M=38.00$, $SD=10.48$ ）でCI-FI条件（ $M=29.90$, $SD=11.73$ ）より項目数

が多かった。

正確性についてみると、項目に主効果が認められ ($F(2,72)=7.29, p < .01, \eta^2=.17$)、共通項目 ($M=.96, SD=.05$) の正確性が最も高く、新出項目 ($M=.83, SD=.23$) と抜け落ち項目 ($M=.90, SD=.12$) の正確性に有意差は認められなかった。面接条件では、FI-FI 条件 ($M=.92, SD=.16$) と CI-FI 条件 ($M=.88, SD=.16$) に有意な差は見られなかった ($F(1,36)=.79, p=.38, \eta^2=.02$)。また、項目と面接条件に有意な交互作用は見られなかった ($F(2,72)=.35, p=.71, \eta^2=.01$)。

ネット報告量 ネット報告量の項目数とその正確性について、面接条件による違いがあるかを調査するために、1 要因分散分析を行った。その結果、項目数では、FI-FI 条件 ($M=61.63, SD=10.62$) と CI-FI 条件 ($M=54.85, SD=15.12$) に有意な差は見られなかった ($F(1,37)=2.60, p=.12, \eta^2=.07$)。また、正確性でも FI-FI 条件 ($M=.93, SD=.06$) と CI-FI 条件 ($M=.92, SD=.05$) に有意な差は見られなかった ($F(1,37)=.37, p=.55, \eta^2=.01$)。

2-3-5. 考察

報告された情報量についてみると、2 度の面接でどちらも FI を行った場合に、1 度目の面接で統制面接を行い 2 度目の面接でのみ FI を行った場合よりも面接で報告された情報量が多かった。次に、報告された情報の正確さについてみると、1 度目の面接で FI を行ったかどうかに関わらず、情報の正確さに違いは見られなかった。しかし、正答項目だけを見ると、1 度目に統制面接を行った場合では、報告された正答項目が少ないことがわかった。報告全体の正確さに有意な差は認め

られなかったものの、1 度目に FI を行った場合の方が、多くの正しい情報を引き出すことができることが示唆された。

報告された情報タイプの違いについてみると、正答項目、誤答項目、作話項目で一貫して、人物情報が最も多く報告されていた。これは、実験 1 及び 2 と一貫して得られている結果である。

本実験の結果からは、1 度目に統制面接を行うことで、生成効果によるソースモニタリングエラーが見られたのか定かではない。今後の課題としては、面接方法以外についても考慮する必要があるだろう。一方で、実験 2 と 3 の結果から、共通して、FI を 1 度目に行った場合に報告される情報の量が多いということは示されている。このことから、より多くの情報を引き出すために有効な手法として、FI が機能しているということがいえるだろう。

実験 1 では、FI を繰り返した場合に、統制面接を繰り返した面接よりも報告された情報の正確さが高いことが示されていた。しかし、実験 2 及び 3 を通してみると、面接 1 回目にものみ FI を行った場合でも、統制面接を行った場合でも、同じ面接方法を繰り返し行った場合と報告の正確さに違いは見られなかった。以上の知見をまとめると、面接を繰り返し行う場合に報告される情報の正確さが低下する原因としては、面接方法以外の要因が関係していることが考えられる。実験 1 と、実験 2 及び 3 を比較した場合に異なる点として挙げられることは、面接者の異同である。実験 1 では、同一の面接者が 2 回の面接を実施していたのに対し、実験 2 及び 3 では、異なる面接者が 1 回ずつ面接を実施している。このことにより、面接を繰り返す中で、被面接者の報告に異なる影響を与えていたことが考えられる。そこで、次節では、実験 1 から 3 のデータを再分析し、面接者の要因について検討したい。

2-4. 同一面接者による面接の繰り返しと異なる面接者による面接の繰り返しの比較（実験 1 から 3 の再分析）

2-4-1. 目的

実験 2 及び実験 3 をまとめると、面接を繰り返し行った場合 1 回目に FI を行うことで、1 回目に統制面接を行った場合よりも報告される情報量が多いことが示された。しかし、報告の正確さに関しては、面接方法による違いは見られなかった。これに対し、実験 1 では、統制面接を 2 回繰り返し行った場合、FI を繰り返し行った場合よりも、後の報告が不正確になることが示されていた。実験 1 と実験 2 及び 3 の相違点は、面接者が同一であるか異なるかということである。面接者が同一か異なるかによって被面接者の報告にどのような影響を及ぼすのだろうか。同一面接者が面接を行うことで、面接者側に及ぼす影響としては、1 回目の面接で得た情報が 2 回目の面接を行うときに何らかのバイアスとして働く可能性が考えられる。また、被面接者側に及ぼす影響としては 1 回目の面接と 2 回目の面接が類似した環境となるため、1 回目の面接で自らが生成した誤情報の影響を受けやすくなる可能性が考えられる。

仮に、異なる面接者が面接を実施することで、報告される情報の正確さが低下しないのであれば、1 度の面接で得られた情報が不十分だった場合、異なる面接者が再度面接を行うことで、報告を不正確に歪める要因を減少させることができるかもしれない。また反対に、同一面接者によって面接を行う場合に、報告される情報の正確さが低下するのであればさらなる配慮が必要となるといえる。そこで、本節では、面接者の影響について調査するため、実験 1 から 3 のデータを再分析

し、同一面接者による面接の繰り返しと異なる面接者による面接の繰り返しの違いについて検討する。

2-4-2. 方法

データは、実験 1 の FI 条件及び統制条件、実験 2 の CI-CI 条件、実験 3 の FI-FI 条件における被面接者の報告内容を使用する。実験 1 の FI 条件及び実験 3 の FI-FI 条件を FI 条件、実験 1 の統制条件及び実験 2 の CI-CI 条件を CI 条件とする。また、実験 1 の FI 条件及び CI 条件を同面接者条件とし、実験 2 の CI-CI 条件及び実験 3 の FI-FI 条件を異面接者条件とする。

データ分析

面接条件の違いと、面接者の効果について検討するため、2（面接方法：FI，CI）×2（面接者：同面接者，異面接者）の 2 要因分散分析を行った。両条件とも参加者間要因であった。従属変数は、報告された情報数および情報の正確性であった。なお、情報数および正確性は、面接 1 回目と 2 回目の合計値を分析に用いた。分析は SPSS 17.0J for Windows で行い、下位検定には Bonferroni 法を用いた。有意水準は 5% に設定した。

2-4-3. 結果

面接時間

面接方法条件あるいは面接者条件により面接の所要時間に違いが生じるかを検討するために、面接時間について 2（面接方法）×2（面接者）の分散分析を行った。その結果、FI 条件（ $M=20.11$, $SD=6.96$ ）

と CI 条件 ($M=18.28$, $SD=6.26$) に有意な差は見られなかった ($F(1, 72) = 1.58$, $p = .21$, $\eta^2 = .02$)。面接者条件では、主効果が認められ、同面接者条件 ($M=21.02$, $SD=7.56$) の方が異面接者条件 ($M=17.37$, $SD=5.04$) より面接時間が長かった ($F(1, 72) = 6.32$, $p < .05$, $\eta^2 = .08$)。面接方法と面接者に有意な交互作用は見られなかった ($F(1, 72) = 2.68$, $p = .11$, $\eta^2 = .04$)。

再生成績

全項目数 面接条件と面接者条件によって、報告された情報数に違いがあるかを調査するため、2 (面接方法) $\times$ 2 (面接者) の分散分析を行った。その結果、FI 条件 ($M=103.61$, $SD=21.49$) で CI 条件 ($M=85.82$, $SD=25.02$) よりも報告された情報量が多かった ($F(1, 72) = 10.81$, $p < .01$, $\eta^2 < .13$) (Figure 2.4.1 参照)。面接者条件では、同面接者条件 ($M=96.08$, $SD=28.17$) と異面接者条件 ($M=93.34$, $SD=21.29$) で有意な差は見られなかった ($F(1, 72) = .26$, $p = .61$, $\eta^2 = .00$)。また、面接方法と面接者に有意な交互作用は見られなかった ($F(1, 72) = .13$, $p = .72$, $\eta^2 = .00$)。

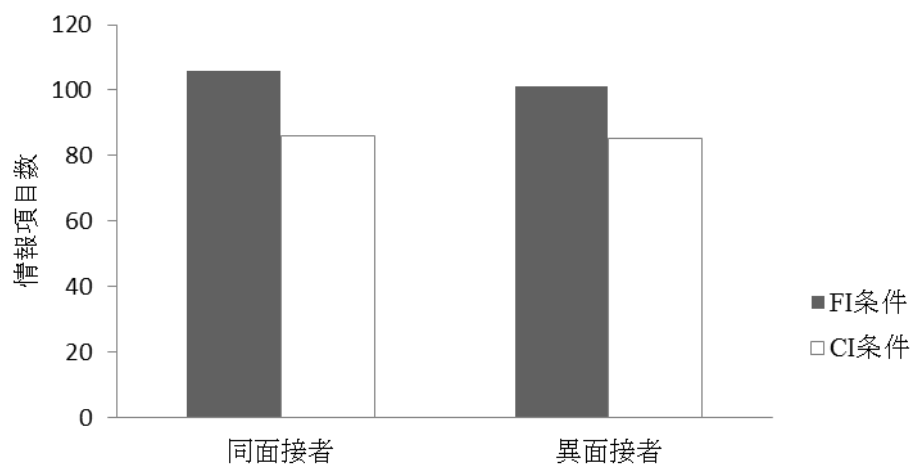


Figure2.4.1
各条件で報告された情報項目数

正答項目 同様に，正答項目数に違いがあるかを調査するため，2（面接方法）×2（面接者）の分散分析を行った。その結果，FI 条件（ $M=96.53$ ， $SD=20.45$ ）で CI 条件（ $M=78.05$ ， $SD=22.08$ ）よりも報告された正答項目数が多かった（ $F(1,72)=14.00$ ， $p<.01$ ， $\eta^2<.16$ ）（Figure2.4.2 参照）。面接者条件では，同面接者条件（ $M=86.81$ ， $SD=25.22$ ）と異面接者条件（ $M=87.76$ ， $SD=21.08$ ）で有意な差は見られなかった（ $F(1,72)=.04$ ， $p=.85$ ， $\eta^2=.00$ ）。また，面接方法と面接者に有意な交互作用は見られなかった（ $F(1,72)=.28$ ， $p=.60$ ， $\eta^2=.00$ ）。

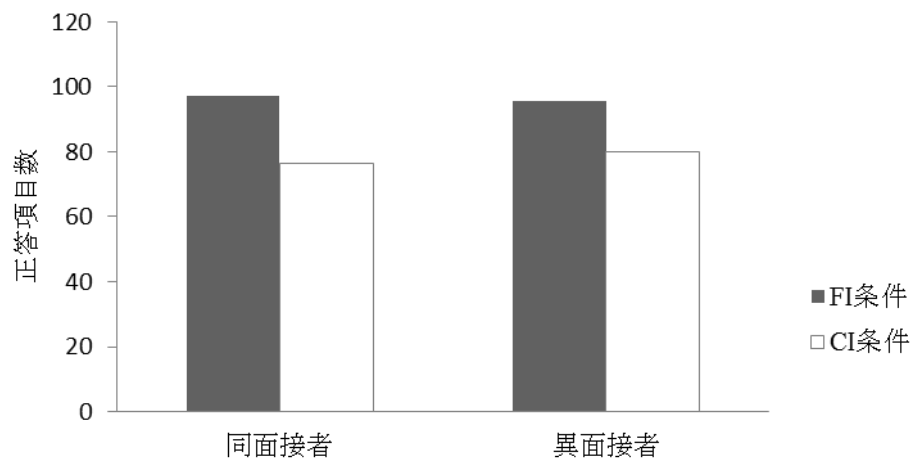


Figure2.4.2
各条件で報告された正答項目数

誤答項目 同様に，誤答項目数に違いがあるかを調査するため，2（面接方法）×2（面接者）の分散分析を行った。その結果，FI 条件（ $M=5.34$ ， $SD=3.33$ ）と CI 条件（ $M=5.05$ ， $SD=3.36$ ）で有意な差は見られなかった（ $F(1,72)=.17$ ， $p=.69$ ， $\eta^2=.00$ ）。面接者条件では，主効果が認められ，同面接者条件（ $M=6.53$ ， $SD=3.59$ ）で異面接者条件（ $M=3.87$ ， $SD=2.44$ ）よりも報告された誤答項目数が多かった（ $F(1,72)=13.88$ ， $p<.01$ ， $\eta^2=.16$ ）（Figure2.4.3 参照）。また，面接方法と面接者に有意な交互作用は見られなかった（ $F(1,72)=.00$ ， $p=.97$ ， $\eta^2=.00$ ）。

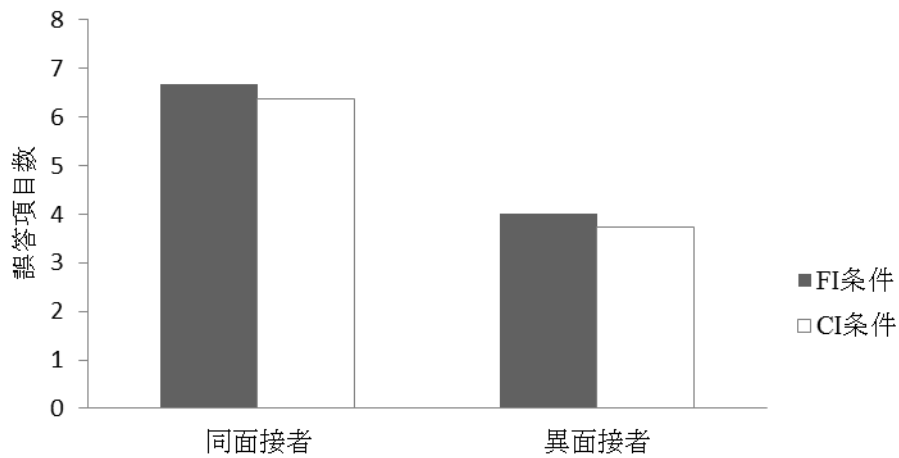


Figure2.4.3
各条件で報告された誤答項目数

作話項目 最後に，作話項目についても，2（面接方法）×2（面接者）の分散分析を行った。その結果，FI条件（ $M=1.68$ ， $SD=2.74$ ）とCI条件（ $M=2.68$ ， $SD=5.08$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1, 72) = 1.13$ ， $p = .29$ ， $\eta^2 = .02$ ）。面接者条件では，同面接者条件（ $M=2.68$ ， $SD=4.69$ ）と異面接者条件（ $M=1.68$ ， $SD=3.38$ ）で有意な差は見られなかった（ $F(1, 72) = 1.13$ ， $p = .29$ ， $\eta^2 = .02$ ）。また，面接方法と面接者に有意な交互作用は見られなかった（ $F(1, 72) = .53$ ， $p = .47$ ， $\eta^2 = .01$ ）。

正確性 実験1から3と同様に，報告された内容の信憑性を表すための指標として，正確性を用いて検討した。正確性について，2（面接方法）×2（面接者）の分散分析を行った。その結果，FI条件（ $M=.93$ ， $SD=.04$ ）とCI条件（ $M=.91$ ， $SD=.07$ ）に有意な差は見られなかった（ $F(1, 72) = 2.36$ ， $p = .13$ ， $\eta^2 = .03$ ）。面接者条件では，有意差が認められ，面接者異条件（ $M=.94$ ， $SD=.05$ ）で面接者同条件（ $M=.90$ ， $SD=.06$ ）よりも正確性が高かった（ $F(1, 72) = 7.73$ ， $p < .01$ ， $\eta^2 = .10$ ）（Figure2.4.4

参照)。また、面接方法と面接者に有意な交互作用は見られなかった ($F(1, 72) = .83, p = .37, \eta^2 = .01$)。

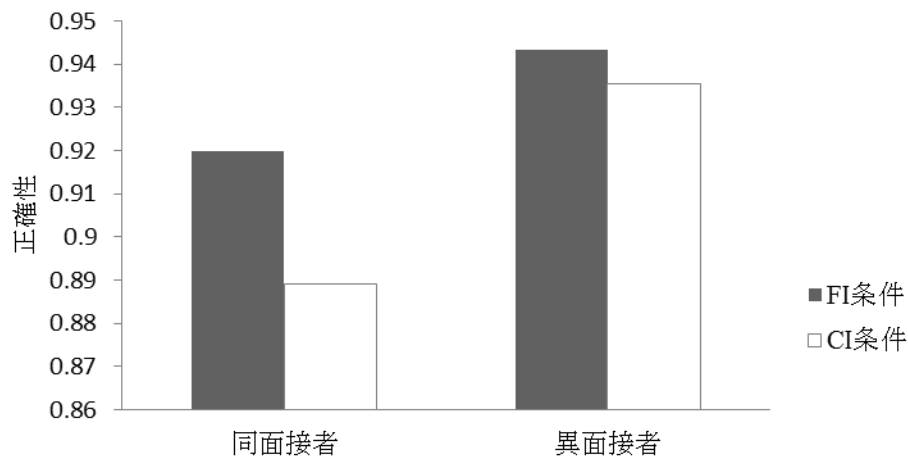


Figure 2.4.4
各面接条件で報告された情報の正確性

2-4-4. 考察

報告された情報量について見ると、FIを繰り返した場合、統制面接を繰り返した場合よりも情報量が多かった。また、報告された情報の正確さについてみると、異なる面接者が繰り返し面接を行った場合に、同一面接者が繰り返し面接を行った場合よりも情報の正確さが高いことが示された。

情報項目についてみていくと、FIの場合、正しく報告された情報量が統制面接より多かった。また、同一面接者による面接と異なる面接者による面接を比較すると、面接者が繰り返し面接を行った場合に、異なる面接者が繰り返し面接を行った場合よりも誤って報告された情報量が多かった。

以上の結果からは、まず、FIが統制面接よりも多くの正しい情報を

引き出しているということがいえる。これは、実験 1 (P.33 参照) や実験 3 (p.68 参照) の結果とも一貫している。

面接者が異なる場合に情報の正確さが高かったことについては、以下の 2 つの要因が考えられる。1 つ目に、被面接者の情報源モニタリングの混同が減少した可能性が考えられる。目撃後に誤情報に接すると、事後情報の情報源を目撃した出来事へと誤って帰属してしまう「情報源モニタリングの失敗」が起きやすい (大沼・箱田・大上, 1999)。このようなモニタリングの失敗は、ソースの混同しやすさによって影響を受けると考えられる。すなわち、異なる面接者よりも同じ面接者の方が、より情報源モニタリングの失敗が起きやすいと考えられる。そのため、1 度目に報告した誤情報が 2 度目の面接における報告に与える影響がより大きく、その結果として、報告全体の正確さの低下を引き起こしたと考えられる。一方で、異なる面接者が面接を繰り返し実施する場合には、被面接者の情報源モニタリングの失敗を抑制することができる可能性がある。

2 つ目に、面接者側の事前情報が排除された結果、面接の誘導性が低下していた可能性も考えられる。実験 1 では、同一面接者が面接を繰り返し行った結果、2 度目の面接時には面接者が出来事に関する情報を有していたため、事前情報に基づいたクローズな質問が多く、確認作業の側面を有した面接となっていた可能性がある。そのため、誘導が増加し、被面接者の報告を不正確に歪めていたことが考えられる。これに対し、実験 2 及び 3 では、面接 2 度目では事前情報を有していない面接者が面接を実施したため、誘導性が抑制されたことが考えられる。

以上をまとめると、面接条件が報告に及ぼす影響としては、FI によ

り正しい情報が多く報告されること、面接者の異同が報告に及ぼす影響としては、面接を繰り返し行う場合に、異なる面接者が繰り返しの面接を実施することで報告の正確さは低下しないということが示された。

第 3 章

実験 4：司法面接の繰り返しの発達の検討

3-1. 目的

事件や事故に遭遇した人から正確な報告をより多く得ることは、事件の解決のためにも、今後の予防のためにも重要である。目撃者や被害者の負担を考えれば、こういった情報の聴取（面接）は出来る限り少ないほうがよい。しかし、現実には、1 度では情報を収集することができず、複数回の面接が行われることが一般的である。

Ackil & Zaragoza (1998) では、強制的に、意識的に作話させた場合においても、特に年少児では、後の面接で作話した内容が事実として報告され、その結果として報告の誤りが増加することが示された。この実験では、小学校 1・2 年生、3・4 年生、大学生を実験参加者として、ビデオを提示した後にビデオの内容とは明らかに異なる質問に対し、強制的に作話するように求めた。そして 1 週間後に、作話した内容について「はい」「いいえ」で答えさせる質問形式で、その内容が実際にビデオに含まれていたかを尋ねた。その結果、全ての年齢群で、作話した内容はビデオに含まれていたとする回答が生じた。また、この誤った報告は、低い年齢群（小学校 1・2 年生および 3・4 年生）でより顕著であった。この追試的位置付けで行われた Zaragoza らの研究 (2001) では、大学生に対し同様の実験を行い、作話に対して肯定的なフィードバック (e.g., 「そう、A は正しい答えです。」) を与えた。その結果、誤った報告の増加がみられた。この実験では、作話から 1 ヶ月から 2 ヶ月後に行われた自由報告でも、作話した内容が実際にビデオに含まれていたものとして報告されることが示されている。目撃

記憶と一緒に誤情報が与えられると、その時点では誤情報だと意識されているものでさえ、後に目撃記憶と区別することが困難になる可能性があるといえるだろう。これらの先行研究は、特に年少児に対して、面接は繰り返し行わずに 1 度だけ行う方が、正確な情報を引き出すことができるという主張を支持している（Zaragoza, Payment, Ackil, Drivdahl, & Beck, 2001）。

これに対し、La Rooy らの研究（2005）では、5 歳児と 6 歳児を実験参加者として、あるイベントに参加させたあと、直後と、1 日後または 6 ヶ月後に面接を行った。その結果、1 日後でも 6 ヶ月後でもレミニセンスが生じていることが示されている（La Rooy, Pipe, & Murray, 2005）。また、他の先行研究では、面接を繰り返してもオープン形式の質問（「何があったか話してください」等、回答の幅に制約のない質問）を使用すれば、大人でも子どもでも正確さに差はないことや（Poole & White, 1991）、面接を繰り返し行った場合、1 回だけ面接を行った場合よりも面接者のバイアスによる正確さの低下が少ないことが示されている（Quas et al., 2007）。また、面接を繰り返し行った場合、新たな情報が得られ、中心的で重要な出来事の報告が一貫して報告されたという結果も示されている（Hershkowitz & Turner, 2007）。

しかし、オープン形式の質問であっても、Bartlett の研究（1932）に見られる通り、自発的に誤った報告がなされることがある。また、回答の幅に制約がない自発的な報告（再生、自由報告）を求めた場合でも、文脈再現などの手続きが後の自発的な報告に影響を及ぼすことが知られている（笠原・越智, 2006；仲, 2012）。それでは、特別な教示を避け、下記に示すような厳密な手法を用いた場合はどうか。本研究ではオープン質問を主体とする面接を 2 度繰り返した場合、面接

1 回目から 2 回目にかけて、正確な想起や誤り、作話がどう変化するのか、また、想起された情報量のうちの正確な情報の割合（正確性）に影響はあるのかを検討する。

NICHD ガイドラインをはじめとする FI では、正確な情報を得るために、面接は 1 度だけ行うことが推奨されているが、上述の問題を踏まえ、本研究では NICHD ガイドラインを用いた面接を 2 度繰り返し、その効果を見る。なお、ここでは、小学校低学年、中学年、高学年、中学校、大学生を対象とする。Ackil & Zaragoza (1998) では、小学校低学年、中学年は大学生よりも、繰り返しの報告で誤った報告が多かったという知見が示されているが、NICHD ガイドラインを使用した面接を繰り返した場合でも、同様に年少児において報告の誤りが増加し、それにより報告全体の正確さが低下するのかを調査したい。また、出来事を想起するための方略や想起量は学童期を通じて発達することが示されている（仲，2012）。こういった発達が面接の繰り返しとどのような交互作用を持つのかは想起過程の解明という点からも実務の点からも重要である。

仮説としては、学童期は、加齢に伴って語彙量などの言語に関する能力が発達するため、年齢が上がるほど報告される量が増加することが予測される。報告内容の正確さについては、それぞれの年齢条件で、1 回目の面接で自発的に報告される誤った情報が少ない場合には、面接を繰り返した場合にも報告の正確さについて年齢による差は見られないことが予測される。しかし、Ackil & Zaragoza (1998) の知見からは 1 度誤った情報にさらされると、ソースモニタリングが不得手な年少児ではその影響を受けやすいことが考えられる。そのため、1 回目の面接で自発的に報告される誤った情報が多い場合、面接を繰り返

返した場合に小学校低学年，中学年では他の年齢条件よりも報告の正確さが低下することが予測される。

3-2. 方法

実験参加者

札幌市内及び近郊の小学校と中学校に協力依頼をしたところ，調査の趣旨に対して3つの小学校と1つの中学校から賛同を得ることができた。まず，小学校及び中学校に在籍している児童の保護者に対し，調査協力依頼書を配布し，協力を得ることができた家庭の中から，実験日程（1週間の間隔を開け，2度参加することができるということ）の調整がついた児童が本調査に参加した。

その結果，合計72名の児童と，北海道大学に在籍する20名の学生が本調査に参加した。しかし，そのうち1名は面接手続きに不備があったため，またその他の7名は面接の遅延時間が他の参加者と異なったため，分析からは除外した。その結果，分析対象となったのは，小学校低学年16名（男児9名，女児7名； $M=7$ 歳6ヶ月，年齢範囲6歳10ヶ月 - 8歳7ヶ月），小学校中学年19名（男児11名，女児8名； $M=9$ 歳7ヶ月，年齢範囲8歳10ヶ月 - 10歳9ヶ月），小学校高学年12名（男児4名，女児8名； $M=11$ 歳6ヶ月，年齢範囲10歳7ヶ月 - 12歳3ヶ月），中学校1年生18名（男児10名，女児8名； $M=13$ 歳1ヶ月，年齢範囲12歳7ヶ月 - 13歳6ヶ月），大学生19名（男性9名，女性10名； $M=19$ 歳8ヶ月，年齢範囲18歳10ヶ月 - 23歳9ヶ月）であった。

データ分析

面接回数（1回目，2回目）×年齢（小学校低学年，小学校中学年，小学校高学年，中学校1年生，大学生）の2要因計画。面接回数は参加者内要因，年齢は参加者間要因である。

材料

実験は，ダミーの色の塗り分け課題の休憩時間に刺激映像を提示し，その後映像の内容を聴取するという手続きで行う。そのため，色の塗り分け課題と刺激映像を作成した。

（1）塗り分け課題 4色の色鉛筆を用いて，隣り合ったスペースが同じ色にならないようにしながら47都道府県の白地図に色を塗っていくという課題である（付録6）。練習問題として，東京都23区の白地図による課題を設けた（付録5）。

（2）刺激映像 刺激映像は，立川（2009）が作成した映像を用いた（付録9）。実験参加者が精神的な負担を感じないようにするため，日常的なシーンを撮影したものを使用した。内容は，3つのシーンから構成されている。第1のシーンは，大学生の女性（主人公）が自転車に乗って住宅街を走行し，公園にやって来るシーンであった。第2のシーンは，主人公が公園のわきに自転車を止め，その際に自転車で走行する他の女性とすれ違うというシーンであった。第3のシーンは，主人公が公園の中にあるベンチに座って本を読むというシーンで，ベンチの後ろでは3人の小学生くらいの女兒がブランコで遊んでいた。

いずれのシーンにも、セリフは入っていなかった。映像の時間は、全体を通して1分程度のものであった。

機材

映像の提示には、ノート型パーソナルコンピュータ（HP Compaq 6535s/CT Notebook PC, 14.1 型液晶）を用い、面接の録音には IC レコーダー（OLYMPUS VoiceTrek V-41）、録画にはデジタルビデオカメラ（SONY HDR-HC7）を用いた。

手続き

参加者に対して、実験者が（1）5 分間色塗り課題の練習問題を実施した後、（2）「休憩しながら見てください。」と教示して、1 分程度の刺激映像を提示した。その後、（3）再び 5 分間色塗り課題を実施し、（4）色塗り課題終了後、面接者が待機している面接室に移動してもらい、第一著者が NICHD ガイドラインに従って、導入、ラポールの形成、出来事の調査の順で面接を行った。導入の段階では、「事実だけを話すこと」「わからないことはわからないということ」「間違いがあったら訂正すること」の 3 点の約束事（グラウンドルール）について、確認した。ラポールの形成の段階では、エピソード記憶の報告の練習をするため、「今日ここに来るまでにあったこと」を尋ねた。出来事の調査の段階では、オープン質問を用いて刺激映像についての聴き取りを行った。最初は「先ほど見た（1 週間前に見た）映像について、わかっていることを全て教えてください。」と尋ねた。続いて、被面接者の反応に応じて、「さっき言っていた～についてもう少し詳しく教えてください。」といった特定の対象について尋ねる質問や、

「他には。」「それから。」といった被面接者の報告をさらに促すような質問を使用した。また、必要に応じて、被面接者が報告した内容をさらに明確化するために「いつ」「どこで」「誰」「何」といった質問を使用する場合もあったが、被面接者が言及していない物事については質問しなかった。なお、被面接者が説明を省略することを防ぐために、面接時には、面接者は刺激映像の内容を一切知らないと伝えた。

(6) 1週間後、「先週の映像について再び聴き取りを行います。」と教示し、面接室で面接に参加するよう求めた。面接終了後、謝礼を渡し、実験の真の目的について説明した。

倫理的配慮

本調査では、小学生および中学生を参加者とした場合、まず保護者に対して本調査についての説明を行い、書面にて了解を得た(付録 10)。その際に、本調査の特質上、児童に対しては最初に本調査の本来の趣旨とは異なる説明を行うことについても了解を得た。大学生を参加者とした場合には、調査の性質上、事前に説明できない内容が含まれることについて説明し、了解を得た。また、面接を行う前に、面接をビデオ録画すること、音声録音することを説明し、承諾が得られた参加者に対し、面接を行った。参加者が小中学生の場合は事前に保護者からも承諾を得た。参加者全員に対して、調査への参加はいつでも中止できること、データは研究目的以外に使用しないこと、個人を特定するような分析および研究発表は行わないこと、研究の趣旨については調査終了後に説明し、質問があれば調査者はいつでも答えることについて説明をし、参加者の了解を得た。

3-3. コーディング

事前に、4名の評定者によりDVDに含まれる情報を書き出し、客観的な情報として認められるものを正答とした(付録11)。すなわち、本研究で扱われる情報とは客観的に評価可能なものであり、主観的な情報(e.g., 「子どもが楽しそうだった。')については考慮しないこととする。Holliday & Albon (2004)に従って、それぞれの情報を以下の4種類に分類した。登場人物に関する情報(e.g., どのような容姿か、何を身に着けていたか)、活動に関する情報(e.g., 何をしたか)、事物に関する情報(e.g., どのような物か)、位置関係や周囲の環境、状況に関する情報(e.g., どのような場所か、どのような状況か)である。これらを以下、順に人物情報、活動情報、事物情報、場所状況情報とする。DVDに含まれていた情報は、全部で178項目あり、そのうち人物情報が62項目、活動情報が28項目、事物情報が63項目、場所状況情報が25項目であった。

面接の内容は、全て書き起こし、スコア化した。それぞれの項目について、被面接者が最初に言及した時点で、情報数1とした。例えば、被面接者が「公園で髪の毛の長い女の子が本を読んでいた」と報告した場合、「公園で」(場所状況情報1)「髪の毛の長い」「女の子が」(人物情報2)「本を」(事物情報1)「読んでいた」(活動情報1)とスコア化した。さらに、報告された情報が、DVDの内容と一致していたときに「正答」、DVDの内容と不一致であったときに「誤答」(e.g., DVDでは「白い」服の女の子が出てきていたのに対し、被面接者が「黒い」服だったと回答した場合)、DVDの内容には含まれていなかったときに「作話」として分類した(e.g., DVDではまったく登場していない人物について言及した場合)。

スコア化は、まず分類の客観性を確認するために、各年齢条件からそれぞれ無作為に 2 名分×2 回ずつの面接を抽出し、実験者と仮説を知らない評定者の 2 名が独立して分類した。その結果、一致率は 84.88% であった ($\kappa=.68$)。不一致の項目については協議により決定し、その定義に基づいて、仮説を知らない評定者が全ての分類を行った。

3-4. 結果

以下、得られた 128 件（5 年齢群×2 回ずつ）の面接を分析する。なお、分析には SPSS 17.0J for Windows を使用し、下位検定には Bonferroni 法を用いた。有意水準は 5% に設定した。まず、面接に要した時間を比較し、年齢や面接回数の効果があるかどうかを調べる。続いて、面接の内容につき、全再生数、正項目数、誤答項目数、作話項目数について、年齢×面接回数の効果を検討する。

面接時間

面接回（面接 1 回目，2 回目）×年齢（低学年，中学年，高学年，中学生，大学生）の 2 要因分散分析を行った結果、面接回に主効果が認められ ($F(1,79)=13.69, p < .01, \eta^2 = .15$)，面接 1 回目 ($M=6.83, SD=1.69$) よりも 2 回目 ($M=6.29, SD=1.74$) で面接の所要時間が短かった。年齢では、低学年 ($M=7.07, SD=2.16$)，大学生 ($M=6.88, SD=1.77$)，高学年 ($M=6.62, SD=1.31$)，中学年 ($M=6.50, SD=1.43$)，中学生 ($M=5.78, SD=1.58$) の順に面接時間が長かったが、有意な差は見られなかった ($F(4,79)=1.77, p = .14, \eta^2 = .08$)。また、面接回と年齢に有意な交互作用は見られなかった ($F(4,79)=.55, p = .70, \eta^2 = .03$)。年齢ご

との面接時間については有意差が認められなかったため、年齢の影響を検討する際には面接時間について考慮しない。

再生成績

スコア化の結果を Table3.1 及び Table3.2 に示す。以下、全項目数、正答項目数、誤答項目数、作話項目数のそれぞれについて、面接回（面接 1 回目，2 回目）×年齢（低学年，中学年，高学年，中学生，大学生）の 2 要因分散分析を行った。誤答項目及び作話項目に関しては，報告された情報項目数が少なかったため，合わせて分析を行った。また，報告された情報の種類に及ぼす年齢の影響について調べるために，情報タイプ（人物，活動，事物，場所状況）×年齢（低学年，中学年，高学年，中学生，大学生）の 2 要因分散分析を行った。次に，各面接回で被面接者が報告した情報の正確さに及ぼす年齢の影響について調べるために，Koriat & Goldsmith（1994）に倣って，報告された全項目数のうち正答が占める割合を「正確性」とし，正確さを表す指標として用いた。正確性について，面接回（面接 1 回目，2 回目）×年齢（低学年，中学年，高学年，中学生，大学生）の 2 要因分散分析を行った。

Table3.1

各年齢条件における再生成績の平均値 (SD)

変数	低学年		中学年		高学年		中学生		大学生	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
全項目合計	26.63	32.56	29.37	33.42	37.25	35.75	31.50	33.11	34.37	34.53
	(11.21)	(15.72)	(9.50)	(9.38)	(12.20)	(8.78)	(9.48)	(9.72)	(9.18)	(7.82)
人物	11.38	14.06	11.68	14.63	16.92	15.50	13.22	13.89	13.53	13.68
	(6.30)	(8.39)	(5.73)	(6.77)	(7.14)	(5.35)	(3.95)	(4.38)	(4.45)	(3.59)
活動	7.88	9.00	8.68	8.58	10.25	8.75	8.83	8.39	8.89	9.11
	(2.31)	(3.10)	(2.89)	(2.29)	(2.96)	(1.86)	(3.24)	(2.87)	(2.58)	(2.23)
事物	5.13	6.75	6.47	6.89	7.08	8.00	6.78	7.56	7.84	7.11
	(3.01)	(3.92)	(2.63)	(3.02)	(3.55)	(3.59)	(3.57)	(3.93)	(3.66)	(3.31)
場所状況	2.25	2.75	2.53	3.32	3.00	3.50	2.67	3.28	4.11	4.63
	(1.48)	(2.18)	(1.31)	(1.89)	(2.04)	(1.93)	(1.64)	(2.14)	(2.13)	(2.19)
正答項目合計	23.75	26.06	26.16	27.79	35.00	31.25	28.78	28.06	32.37	31.47
	(10.54)	(12.99)	(8.64)	(7.89)	(10.80)	(7.45)	(8.56)	(6.98)	(8.45)	(7.49)
人物	9.81	10.19	9.89	11.00	15.42	12.17	11.28	10.56	12.16	12.21
	(5.98)	(6.42)	(5.14)	(5.20)	(6.35)	(4.41)	(3.34)	(2.59)	(3.82)	(3.33)
活動	7.31	7.88	7.89	7.84	9.92	8.17	8.56	7.83	8.63	8.42
	(2.60)	(2.96)	(2.66)	(1.83)	(2.57)	(1.75)	(2.99)	(2.50)	(2.50)	(2.48)
事物	4.63	5.44	6.05	6.00	6.67	7.58	6.39	6.61	7.53	6.53
	(2.60)	(3.48)	(2.34)	(2.94)	(2.96)	(3.23)	(3.42)	(3.79)	(3.24)	(3.08)
場所状況	2.00	2.56	2.32	2.95	3.00	3.33	2.56	3.06	4.05	4.32
	(1.32)	(2.13)	(1.16)	(1.65)	(2.04)	(1.92)	(1.58)	(1.86)	(2.09)	(1.86)

Table3.1(続き)

各年齢条件における再生成績の平均値 (SD)

誤答項目合計	1.69 (1.25)	3.44 (2.76)	1.47 (1.39)	2.89 (2.40)	1.92 (1.38)	3.00 (2.09)	1.83 (2.18)	2.78 (3.10)	1.47 (1.22)	2.00 (1.29)
人物	1.06 (0.85)	2.31 (1.92)	0.89 (1.10)	2.00 (2.05)	1.33 (0.98)	2.58 (1.73)	1.39 (1.79)	2.17 (2.53)	1.05 (0.97)	1.05 (1.22)
活動	0.31 (0.60)	0.31 (0.48)	0.26 (0.45)	0.26 (0.56)	0.17 (0.39)	0.08 (0.29)	0.11 (0.32)	— (0.42)	0.21 (0.60)	0.37 (0.60)
事物	0.13 (0.34)	0.69 (1.25)	0.16 (0.37)	0.47 (0.70)	0.42 (0.67)	0.33 (0.65)	0.22 (0.55)	0.39 (0.78)	0.16 (0.37)	0.47 (0.77)
場所状況	0.19 (0.54)	0.13 (0.34)	0.16 (0.37)	0.16 (0.37)	— (0.37)	— (0.37)	0.11 (0.32)	0.22 (0.43)	0.05 (0.23)	0.11 (0.32)
作話項目合計	1.19 (1.97)	3.06 (4.48)	1.74 (2.68)	2.74 (4.24)	0.33 (0.78)	1.50 (1.68)	0.83 (1.20)	2.28 (4.18)	0.53 (1.65)	1.05 (2.59)
人物	0.50 (1.10)	1.56 (2.53)	0.89 (1.49)	1.63 (3.09)	0.17 (0.39)	0.75 (0.97)	0.50 (0.79)	1.17 (2.12)	0.32 (1.38)	0.42 (1.02)
活動	0.25 (0.58)	0.81 (1.42)	0.53 (0.77)	0.47 (0.70)	0.17 (0.39)	0.50 (0.52)	0.17 (0.38)	0.56 (1.25)	0.05 (0.23)	0.32 (0.95)
事物	0.38 (0.89)	0.63 (1.31)	0.26 (0.73)	0.42 (0.90)	— (0.90)	0.08 (0.29)	0.17 (0.38)	0.56 (1.04)	0.16 (0.50)	0.11 (0.32)
場所状況	0.06 (0.25)	0.06 (0.25)	0.05 (0.23)	0.21 (0.54)	— (0.54)	0.17 (0.39)	— (0.39)	— (0.39)	— (0.39)	0.21 (0.71)
正確性	0.88 (0.11)	0.81 (0.15)	0.89 (0.08)	0.83 (0.11)	0.95 (0.04)	0.88 (0.05)	0.92 (0.07)	0.86 (0.11)	0.94 (0.05)	0.91 (0.07)
面接時間 (分)	7.38 (2.09)	6.75 (2.26)	6.63 (1.39)	6.37 (1.50)	6.83 (1.37)	6.43 (1.27)	6.03 (1.29)	5.53 (1.82)	7.31 (1.91)	6.46 (1.56)

Table3.2
各年齢条件における情報タイプごとの再生成績の平均値 (SD)

変数	低学年	中学年	高学年	中学生	大学生	5学年総合		
	総合	総合	総合	総合	総合	1回目	2回目	総合
全項目合計	29.59	31.39	36.50	32.31	34.45	31.56	33.77	
	(13.76)	(9.53)	(10.43)	(9.50)	(8.41)	(10.53)	(10.38)	
人物	25.44	26.32	32.42	27.11	27.21			27.39
	(14.17)	(11.78)	(11.88)	(6.95)	(6.97)			(10.50)
活動	16.88	17.26	19.00	17.22	18.00			17.60
	(5.15)	(4.64)	(4.20)	(5.59)	(4.38)			(4.78)
事物	11.88	13.37	15.08	14.33	14.95			13.89
	(6.36)	(4.84)	(6.86)	(7.14)	(6.39)			(6.27)
場所状況	5.00	5.84	6.50	5.61	8.74			6.45
	(3.23)	(2.79)	(3.63)	(3.09)	(3.91)			(3.58)
正答項目合計	24.91	26.97	33.13	28.42	31.92	28.93	28.85	
	(11.70)	(8.21)	(9.27)	(7.71)	(7.89)	(9.86)	(8.82)	
人物	20.00	20.89	27.58	21.83	24.37			22.67
	(12.08)	(9.94)	(10.46)	(4.82)	(6.37)			(9.07)
活動	15.19	15.74	18.08	16.39	17.05			16.40
	(5.43)	(4.04)	(3.80)	(5.19)	(4.64)			(4.68)
事物	10.06	12.05	14.25	13.00	14.05			12.64
	(5.79)	(4.33)	(5.88)	(6.89)	(6.02)			(5.87)
場所状況	4.56	5.26	6.33	5.61	8.37			6.06
	(3.12)	(2.38)	(3.65)	(3.09)	(3.64)			(3.38)
誤答＋作話項目合計	4.69	4.42	3.86	3.38	2.53	2.62	4.93	
	(4.61)	(4.07)	(3.90)	(2.39)	(2.32)	(2.29)	(4.37)	
人物	5.44	5.42	4.83	5.22	2.84			4.71
	(4.49)	(4.60)	(2.48)	(3.84)	(2.50)			(3.81)
活動	1.69	1.53	0.92	0.83	0.95			1.19
	(1.85)	(1.54)	(1.17)	(1.47)	(1.18)			(1.48)
事物	1.81	1.32	0.83	1.33	0.89			1.25
	(2.23)	(1.77)	(1.19)	(1.57)	(0.94)			(1.61)
場所状況	0.44	0.58	0.17	0.33	0.37			0.39
	(0.73)	(0.77)	(0.39)	(0.59)	(0.83)			(0.70)
正確性	0.85	0.86	0.91	0.89	0.93	0.92	0.86	
	(0.13)	(0.09)	(0.05)	(0.09)	(0.06)	(0.07)	(0.11)	
面接時間 (分)	7.07	5.78	6.62	6.50	6.88	6.83	6.29	
	(2.16)	(1.58)	(1.31)	(1.43)	(1.77)	(1.69)	(1.74)	

全項目数 被面接者が報告した全項目数について、面接回×年齢の 2 要因分散分析を行った結果、面接回に主効果が認められ ($F(1,79)=6.96$, $p < .01$, $\eta^2 = .08$)、面接 1 回目 ($M = 31.56$, $SD = 10.53$) よりも 2 回目 ($M = 33.77$, $SD = 10.38$) でより多くの情報が報告された。年齢では、高学年 ($M = 36.50$, $SD = 10.43$)、大学生 ($M = 34.45$, $SD = 8.41$)、中学生 ($M = 32.31$, $SD = 9.50$)、中学年 ($M = 31.39$, $SD = 9.53$)、低学年 ($M = 29.59$, $SD = 13.76$) の順に報告された項目数が多かったが、有意な差は見られなかった ($F(4,79)=1.10$, $p = .36$, $\eta^2 = .05$)。また、面接回と年齢に交互作用が認められたので ($F(4,79)=2.73$, $p < .05$, $\eta^2 = .12$)、年齢条件ごとに面接回について 1 要因分散分析を行った。その結果、低学年条件及び中学年条件でのみ主効果が認められ ($F(1,15)=8.88$, $p < .01$, $\eta^2 = .37$; $F(1,18)=6.54$, $p < .05$, $\eta^2 = .27$)、面接 1 回目 ($M = 26.63$, $SD = 11.21$; $M = 29.37$, $SD = 9.50$) よりも 2 回目 ($M = 32.56$, $SD = 15.72$; $M = 33.42$, $SD = 9.38$) でより多くの情報が報告された。

次に、情報タイプ×年齢の 2 要因分散分析を行った結果、情報タイプに主効果が認められた ($F(3,237)=212.18$, $p < .01$, $\eta^2 = .73$)。多重比較の結果、人物情報 ($M = 27.39$, $SD = 10.50$)、活動情報 ($M = 17.60$, $SD = 4.78$)、事物情報 ($M = 13.89$, $SD = 6.27$)、場所状況情報 ($M = 6.45$, $SD = 3.58$) の順に報告された情報項目が多かった (全て $p < .01$)。年齢では、高学年 ($M = 36.50$, $SD = 10.43$)、大学生 ($M = 34.45$, $SD = 8.41$)、中学生 ($M = 32.31$, $SD = 9.50$)、中学年 ($M = 31.39$, $SD = 9.53$)、低学年 ($M = 29.59$, $SD = 13.76$) の順に報告された項目数が多かったが、有意な差は見られなかった ($F(4,79)=1.10$, $p = .36$, $\eta^2 = .05$)。また、情報タイプと年齢に有意な交互作用は見られなかった ($F(12,237)=.73$, $p = .72$, $\eta^2 = .04$)。

正答項目数 被面接者が報告した正答項目数について、面接回×年齢の2要因分散分析を行った結果、面接回では面接1回目 ($M=28.93$, $SD=9.86$) と2回目 ($M=28.85$, $SD=8.82$) に有意な差は見られなかった ($F(1,79)=.28$, $p=.60$, $\eta^2=.00$)。年齢では、高学年 ($M=33.13$, $SD=9.27$)、大学生 ($M=31.92$, $SD=7.89$)、中学生 ($M=28.42$, $SD=7.71$)、中学年 ($M=26.97$, $SD=8.21$)、低学年 ($M=24.91$, $SD=11.70$) の順に報告された正答項目が多かったが、有意な差は見られなかった ($F(4,79)=2.37$, $p=.06$, $\eta^2=.11$)。また、面接回×年齢の交互作用が認められたので ($F(4,79)=3.43$, $p<.05$, $\eta^2=.15$)、面接回ごとに年齢条件について1要因分散分析を行った。その結果、面接1回目で主効果が認められ ($F(4,83)=3.60$, $p<.01$)、高学年 ($M=35.00$, $SD=10.80$)、大学生 ($M=32.37$, $SD=8.45$)、中学生 ($M=28.78$, $SD=8.56$)、中学年 ($M=26.16$, $SD=8.64$)、低学年 ($M=23.75$, $SD=10.54$) の順に報告された正答項目が多く、多重比較の結果、高学年と低学年の間に有意差が認められた ($p<.05$)。

次に、情報タイプ×年齢の2要因分散分析を行った結果、情報タイプに主効果が認められた ($F(3,237)=175.17$, $p<.01$, $\eta^2=.69$)。多重比較の結果、人物情報 ($M=22.67$, $SD=9.07$)、活動情報 ($M=16.40$, $SD=4.68$)、事物情報 ($M=12.64$, $SD=5.87$)、場所状況情報 ($M=6.06$, $SD=3.38$) の順に報告された正答項目が多かった (全て $p<.01$)。年齢では、高学年 ($M=33.13$, $SD=9.27$)、大学生 ($M=31.92$, $SD=7.89$)、中学生 ($M=28.42$, $SD=7.71$)、中学年 ($M=26.97$, $SD=8.21$)、低学年 ($M=24.91$, $SD=11.70$) の順に報告された正答項目が多かったが、有意な差は見られなかった ($F(4,79)=2.37$, $p=.06$, $\eta^2=.11$)。また、情報タ

イプと年齢に有意な交互作用は見られなかった ($F(12,237)=.81, p=.64, \eta^2=.04$)。

誤答＋作話項目数 被面接者が報告した誤答＋作話項目数について、面接回×年齢の2要因分散分析を行った結果、面接回に主効果が認められ ($F(1,79)=23.26, p<.01, \eta^2=.23$)、面接1回目 ($M=2.62, SD=2.29$) よりも2回目 ($M=4.93, SD=4.37$) でより多くの誤答＋作話項目が報告されていた。年齢では、低学年 ($M=4.69, SD=4.61$)、中学年 ($M=4.42, SD=4.07$)、中学生 ($M=3.86, SD=3.90$)、高学年 ($M=3.38, SD=2.39$)、大学生 ($M=2.53, SD=2.32$) の順に報告された誤答＋作話項目が多かったが、有意な差は見られなかった ($F(4,79)=1.87, p=.12, \eta^2=.09$)。また、面接回と年齢に有意な交互作用は見られなかった ($F(4,79)=.75, p=.56, \eta^2=.04$)。

次に、情報タイプ×年齢の2要因分散分析を行った結果、情報タイプに主効果が認められた ($F(3,237)=75.92, p<.01, \eta^2=.49$)。人物情報 ($M=4.71, SD=3.81$)、事物情報 ($M=1.25, SD=1.61$)、活動情報 ($M=1.19, SD=1.48$)、場所状況情報 ($M=.39, SD=.07$) の順に報告された誤答＋作話項目が多く、多重比較の結果、人物情報と事物情報、活動情報 (それぞれ $p<.01$)、および事物情報、活動情報と場所状況情報の間に有意な差が認められた (それぞれ $p<.01$)。年齢では、有意な差は見られなかった ($F(4,79)=1.87, p=.12, \eta^2=.09$)。また、情報タイプと年齢に有意な交互作用は見られなかった ($F(12,237)=1.18, p=.30, \eta^2=.06$)。

正確性 正確性について，面接回×年齢の2要因分散分析を行った結果，面接1回目（ $M = .92, SD = .07$ ）よりも2回目（ $M = .86, SD = .11$ ）で正確性が低下していた（ $F(1,79) = 19.97, p < .01, \eta^2 = .20$ ）。年齢では，主効果が認められ（ $F(4,79) = 4.04, p < .01, \eta^2 = .17$ ），大学生（ $M = .93, SD = .06$ ），高学年（ $M = .91, SD = .05$ ），中学生（ $M = .89, SD = .09$ ），中学年（ $M = .86, SD = .09$ ），低学年（ $M = .85, SD = .13$ ）の順に正確性が高く，多重比較の結果，大学生と低学年の間に有意な差が認められた（ $p < .01$ ）。

報告内容の変化及び総量

面接1回目と2回目とでは，報告内容にどのような変化があるのだろうか。レミニセンス（1回目には報告されなかった情報が，2回目に新たに報告される）はどの程度起きたのだろうか。また，ハイパームネジア（1回目に報告された内容に新たな情報が加わり，報告の総量が増加する）はどの程度起きたのだろうか。さらに，どのくらいの情報が1回目から2回目にかけて報告されなくなっているのだろうか。

このことを検討するために，1回目の面接では報告されなかったが2回目の面接で初めて報告されたものを「新出項目」，1回目の面接で報告されたが2回目の面接では報告されなかったものを「抜け落ち項目」とした。一貫して報告された情報を「共通項目」とした。また，報告の総量の指標として，2回の面接で報告された項目の和集合を「ネット報告量」とした。まず，抜け落ち項目，新出項目，共通項目について全項目数と正確性に対する年齢の影響を調べるために項目（抜け落ち，新出，共通）×年齢の2要因分散分析を行った。また，ネット報告量についても年齢の影響を調べるために，全項目数と正確性につ

いて 1 要因分散分析を行った。抜け落ち項目，新出項目，共通項目，ネット報告量について Table3.3 に示す。

Tab3.3
各年齢条件における報告の変化項目及び総数の平均値(SD)

変数	低学年	中学年	高学年	中学生	大学生	総合
新出項目合計	13.69	13.26	10.08	10.72	9.32	11.45
	(7.36)	(6.11)	(3.20)	(6.01)	(5.02)	(5.94)
正答	8.69	8.68	6.92	6.78	6.89	
	(4.95)	(3.50)	(2.50)	(3.25)	(3.62)	
誤答＋作話	2.53	2.26	1.58	1.97	1.21	
	(3.11)	(3.29)	(1.50)	(3.34)	(2.00)	
正確性	0.67	0.69	0.69	0.69	0.74	0.70
	(0.23)	(0.21)	(0.17)	(0.22)	(0.24)	(0.21)
抜け落ち項目合計	8.06	8.95	11.50	8.61	9.05	9.10
	(3.86)	(3.85)	(6.68)	(4.42)	(4.82)	(4.69)
正答	6.63	7.11	10.58	7.17	7.68	
	(3.84)	(3.16)	(6.04)	(3.82)	(3.84)	
誤答＋作話	0.72	0.92	0.46	0.72	0.68	
	(0.99)	(1.82)	(0.78)	(1.32)	(1.19)	
正確性	0.81	0.81	0.93	0.84	0.87	0.85
	(0.20)	(0.21)	(0.06)	(0.18)	(0.12)	(0.17)
共通項目合計	18.56	20.42	25.75	22.89	25.32	22.46
	(9.84)	(7.73)	(7.12)	(6.84)	(6.87)	(8.02)
正答	17.13	19.05	24.42	21.61	24.68	
	(8.88)	(7.43)	(6.08)	(6.33)	(6.63)	
誤答＋作話	0.72	0.68	0.67	0.61	0.32	
	(1.11)	(0.99)	(0.92)	(1.02)	(0.62)	
正確性	0.93	0.93	0.96	0.95	0.98	0.95
	(0.06)	(0.06)	(0.05)	(0.06)	(0.03)	(0.05)
3 項目合計	13.44	14.21	15.78	14.07	14.56	
	(8.47)	(7.66)	(9.20)	(8.56)	(9.47)	
正確性	0.80	0.81	0.86	0.82	0.86	
	(0.20)	(0.20)	(0.16)	(0.20)	(0.18)	
ネット報告量合計	40.31	42.63	47.33	42.22	43.68	
	(16.56)	(11.46)	(13.01)	(12.16)	(10.40)	
正答	32.44	34.84	41.92	35.56	39.26	
	(14.31)	(8.85)	(11.83)	(9.56)	(9.47)	
誤答＋作話	3.97	3.87	2.71	3.31	2.21	
	(4.06)	(3.65)	(2.26)	(3.92)	(2.34)	
正確性	0.80	0.82	0.89	0.85	0.90	
	(0.13)	(0.09)	(0.04)	(0.10)	(0.06)	

新出項目，抜け落ち項目，共通項目 新出項目，抜け落ち項目，共通項目に関して年齢による違いがあるかを調査するために，項目数と正確性について，項目（新出，抜け落ち，共通）×年齢の2要因分散分析を行った。

項目数についてみると，項目に主効果が認められ ($F(2,158)=135.97$, $p < .01$, $\eta^2 = .63$)，共通項目 ($M=22.46$, $SD=8.02$)，新出項目 ($M=11.45$, $SD=5.94$)，抜け落ち項目 ($M=9.10$, $SD=4.69$) の順に項目数が多かった。年齢では，高学年 ($M=15.78$, $SD=9.20$)，大学生 ($M=14.56$, $SD=9.47$)，中学年 ($M=14.21$, $SD=7.66$)，中学生 ($M=14.07$, $SD=8.56$)，低学年 ($M=13.44$, $SD=8.47$) の順に項目数が多かったが，有意な差は見られなかった ($F(4,79)=.56$, $p = .69$, $\eta^2 = .03$)。また，項目×年齢の交互作用が見られたので ($F(8,158)=3.42$, $p < .01$, $\eta^2 = .15$)，項目ごとに1要因分散分析を行った。その結果，共通項目でのみ有意差が見られ，高学年 ($M=25.75$, $SD=7.12$)，大学生 ($M=25.32$, $SD=6.87$)，中学生 ($M=22.89$, $SD=6.84$)，中学年 ($M=20.42$, $SD=7.73$)，低学年 ($M=18.56$, $SD=9.84$) の順に項目数が多かったが，水準間での有意差は見られなかった（高学年—大学生 $p=1.00$ ；高学年—中学生 $p=1.00$ ；高学年—中学年 $p=.66$ ；高学年—低学年 $p=.17$ ；大学生—中学生 $p=1.00$ ；大学生—中学年 $p=.55$ ；大学生—低学年 $p=.12$ ；中学生—中学年 $p=1.00$ ；中学生—低学年 $p=1.00$ ；中学年—低学年 $p=1.00$ ）。

正確性についてみると，項目に主効果が認められ ($F(2,158)=51.86$, $p < .01$, $\eta^2 = .40$)，共通項目 ($M=.95$, $SD=.05$)，抜け落ち項目 ($M=.85$, $SD=.17$)，新出項目 ($M=.70$, $SD=.21$) の順に正確性が高かった。年齢では，大学生 ($M=.86$, $SD=.18$)，高学年 ($M=.86$, $SD=.16$)，中学生 ($M=.82$, $SD=.20$)，中学年 ($M=.81$, $SD=.20$)，低学年 ($M=.80$, SD

=.20) の順に正確性が高かったが、有意な差は見られなかった ($F(4,79)=1.22, p = .31, \eta^2 = .06$)。また、項目と年齢に有意な交互作用は見られなかった ($F(8,158)=.33, p = .95, \eta^2 = .02$)。

ネット報告量 ネット報告量の項目数と正確性について、年齢による違いがあるかを調査するために、1 要因分散分析を行った。その結果、項目数については、高学年 ($M = 47.33, SD = 13.01$)、大学生 ($M = 43.68, SD = 10.40$)、中学年 ($M = 42.63, SD = 11.46$)、中学生 ($M = 42.22, SD = 12.16$)、低学年 ($M = 40.31, SD = 16.56$) の順に項目数が多かったが、有意差は認められなかった ($F(4,79)=3.29, p < .05$)。正確性では、年齢の主効果が認められ ($F(4,79)=.56, p = .69$)、大学生 ($M = .90, SD = .06$)、高学年 ($M = .89, SD = .04$)、中学生 ($M = .85, SD = .10$)、中学年 ($M = .82, SD = .09$)、低学年 ($M = .80, SD = .13$) の順に正確性が高く、多重比較の結果、大学生と低学年の間に有意な差が認められた ($p < .05$)。

3-5. 考察

本研究は、司法面接の手法を用いて面接を繰り返し行った場合、年齢により異なる効果が生じるのか、また報告内容がどのように変化するかについて検討した。以下では実験結果で得られた結果について考察する。

報告された情報量

面接 1 回目よりも 2 回目の方が平均 2 項目程度、報告された情報の量が多かった。このことについては 2 つの可能性が考えられる。1 つは、異なる文脈で想起したことにより、新たな手がかりによってより

多くの情報が想起された可能性があるということである。例えば、La Rooy らの研究（2005）では 5 歳児と 6 歳児に対し、出来事を目撃した直後と 6 ヶ月後の記憶成績について調べた（La Rooy, Pipe, & Murray, 2005）。その結果、レミニセンスは 1 日後でも 6 ヶ月後でも生じることが示されている。本実験においても、1 週間の遅延をおいたことで、色塗り課題により色に焦点が当てられていたものが、よりストーリーに焦点が当てられるようになるなどしたため、同様の現象が生じた可能性がある。

もう 1 つは、練習効果からの説明が考えられる。虐待を受けた子どもに対する事実確認面接で、本題の事実の聞き取りの前に自由報告の練習をすると、練習をしなかったときよりも、本題の事実についてより多くの情報が報告されたという知見がある（Price, Roberts, & Collins, 2013）。記憶方略を自発的に用いることが不得手な小学校低学年や中学年では、特に練習効果の影響が大きかった可能性がある。

報告された情報のタイプ

先行研究では、情報の性質（正答、誤答、作話）によって、情報タイプの報告量が異なることが示されていた（Holliday & Albon, 2004）。これに対し、本研究では、情報の性質（正答、誤答、作話）に関わらず、登場人物に関する情報が最も多く報告されており、続いて活動に関する情報あるいは事物に関する情報が多く、位置関係や周囲の環境、状況に関する情報が最も少ないという、一貫した傾向が示された。これは、目撃映像の性質によるのかもしれない。本研究で用いられた刺激映像は、主人公となる女性の行動を追う形で撮影されたものであった。そのため、ストーリーの中心が女性であり、最も長い時間注視さ

れていた可能性がある。Hershkowitz & Turner (2007) は、面接を繰り返し実施した場合に、周辺的な情報は抜け落ちやすく、中心的な情報が一貫して報告されやすいということを示した。この知見を踏まえると、刺激映像の中心的な情報が女性に関する情報であったため、女性に関する情報である人物情報が最も多く報告され、続いて女性の活動に関する情報、女性が扱った事物に関する情報が多くなり、周辺的な情報である環境や状況に関する情報はこれらより少なかった可能性がある。従って、例えば人物が映像の周辺的な情報となり、環境や状況に関する描写が映像の中心となるような刺激映像の場合にも同様の結果が得られるのかは不明である。中心的情報と周辺的情報の内容をコントロールするなどし (e.g., 伊東・佐山, 2005), 情報タイプを検討することが必要であろう。

報告された情報の正確性

面接 1 回目から 2 回目にかけて報告された情報の正確性が低下したことについては、面接 2 回目において誤情報が増加したためであると考えられる。全報告のうち、正答項目数については、面接 1 回目と 2 回目で有意差は認めらなかったのに対し、誤答 + 作話項目数は、面接 1 回目よりも 2 回目で増加した。つまり、面接 1 回目から 2 回目にかけて、正情報については同程度報告されたのに対し誤情報のみ増加しており、総じて誤情報の比率が増加していたために、報告の正確性が低下したものといえる。

他方、面接を繰り返し行った場合に一貫して報告された情報に着目してみると、新たに加わった情報や抜け落ちた情報よりも一貫して報告された情報の方が正確性が高いことが示された。

Krähenbühl ら (2009) は、4 から 9 歳の児童に対し、Chris という女性が犬の世話について教室で話す場面を実際に見せ、その後オープン質問を使用して答えられる質問（実際に目撃した出来事に関する質問）と答えられない質問（実際に目撃せず、「知らない。」と答えるのが正解となる質問）を 5 度繰り返し尋ねた (Krähenbühl, Blades, & Eiser, 2009)。その結果、答えられる質問については、1 度は答えを変えても、その後の繰り返しでは一貫して変わらないことが示された。これは、最初の繰り返しの段階では、面接者が異なる答えを要求しているかと考えるために、その要求に従おうとして答えを変えるが、数回繰り返し尋ねられることで、その影響が低減されるためだと考えられた。これに対し、答えられない質問では、繰り返し尋ねられる度に報告が変容した。答えられない質問に関しては、正解についての確信が持てないまま、子どもは「知らない。」と言うこともできず、毎回答えを変えたと考えられる。一般に、司法においては一貫性を信用性の指標とすることが多い。本研究では確信度を測定しなかったが、今後法的な要請に応えるためには、正確性、一貫性、確信度の関係性についてより詳細に調査する必要がある。

年齢に関しては、報告の正確性は小学校低学年で低く、小学校中学年以上では、大学生と同程度であった。一般に、ソースモニタリングを含むメタ認知能力は、学童期を通じて高まるとされ、この変化は低学年と中・高学年において大きいとされる。例えば、Ackil & Zaragoza (1995) は、小学校 1 年生は、小学校 3 年生および 5 年生よりもソースモニタリングエラーが多く、特に 1 週間の遅延を置いた場合に顕著であることを示している。仲 (2012) も、小学校 2 年では 5 年生に比べ、外部からの質問や、自ら生成したイメージとの混乱が生じやすい

ことを示している。本研究でも、実際に目撃した情報と、それ以外の情報との間にソースモニタリングエラーが起こることによって、特に小学校低学年で、誤情報の報告が多かった可能性が考えられる。

第 4 章 総合考察

4-1. 研究結果のまとめ

本稿では、実験 1 から 3 で面接を繰り返し行った場合に NICHD ガイドラインを用いた面接（FI）が報告内容に及ぼす影響について調査した。また、実験 4 で面接の繰り返しと被面接者の記憶方略との関係を調べるために、発達的な検討を行った。まずは、研究結果について振り返ることとする。

実験 1 では、同一の面接者が面接を繰り返し実施する場合に、FI を繰り返す場合と統制面接を繰り返す場合を比較した。その結果、(1) FI では、より多くの情報が報告されていたこと（p.32 参照）、(2) FI では報告された情報の正確さは維持されていたが、統制面接では面接 1 回目から 2 回目にかけて正確さが低下していたこと（p.34 参照）が示された。また、(3) FI の教示が与えられないと、選択式質問、付加疑問文などの誘導的な質問が使用されやすく、教示を与えた場合には手がかり質問、時間の分割、促しなどを使用することができていたこと（p.37 参照）、(4) FI では、質問の使用数が少なく、より多くの情報が引き出せていたこと（p.38 参照）が示された。

実験 2 では、異なる面接者が面接を繰り返し実施する場合に、1 回目に FI を行うことが報告内容に及ぼす影響について調査した。その結果、(1) 2 回の面接でどちらも統制面接を行った場合、1 回目の面接では報告される情報量が少なく、2 回目の面接で報告される情報量が増えるのに対し、1 回目の面接で FI を行った場合には、面接 1 回目から 2 回目と同じ程度の情報量が報告されること（p.55 参照）、(2) 報告された情報の正確さは、1 回目の面接で FI を行ったかどうかに関

わらず、違いはないこと（p.57 参照）が示された。

実験 3 では、異なる面接者が面接を繰り返し実施する場合に、1 回目に面接を行うことが報告内容に及ぼす影響について調査した。その結果、(1) 2 回の面接でどちらも FI を行った場合に、1 回目の面接で統制面接を行い 2 回目の面接でのみ FI を行った場合よりも面接で報告された情報量が多いこと（p.67 参照）、(2) 報告された情報の正確さは、1 回目の面接で統制面接を行ったかどうかに関わらず、違いはないこと（p.69 参照）、(3) 正しく報告された情報だけを見ると、1 回目に統制面接を行った場合では、2 回の面接でどちらも FI を行った場合よりも報告された正情報が少ないこと（p.68 参照）が示された。

また、実験 1 から実験 3 の再分析の結果、(1) 総じて報告された情報量について見ると、FI を繰り返した場合、統制面接を繰り返した場合よりも情報量が多いこと（p.76 参照）、(2) その構成についてみていくと、FI の場合、正しく報告された情報量が多いこと（p.77 参照）、(3) 同一面接者による面接と異なる面接者による面接を比較すると、面接者が繰り返し面接を行った場合に、異なる面接者が繰り返し面接を行った場合よりも誤って報告された情報量が多いこと（p.78 参照）、(4) 報告された情報の正確さについてみると、異なる面接者が繰り返し面接を行った場合に、同一の面接者が繰り返し面接を行った場合よりも情報の正確さが高いこと（p.79 参照）が示された。

実験 4 では、FI の繰り返しの効果について発達的に検討した結果、(1) 面接 1 回目と 2 回目の報告量については、特に小学校低学年および中学年において、面接 1 回目よりも 2 回目でより多くの情報が報告されること（p.96 参照）、(2) 報告された情報のタイプについては、年齢による差はなく、人物情報が最も多く報告され、続いて活動情報

あるいは事物情報が多く、場所状況情報が最も少ないこと (p.96 参照), (3) 報告された情報の正確さについては、面接 1 回目よりも 2 回目で低下しており、大学生と比較して、小学校中学年以上では正確さに差がなかったが、小学校低学年では正確さが低くなること (p.99 参照), (4) 2 回の面接を通して一貫して報告された情報については、面接 1 回目でのみ報告された情報や面接 2 回目でのみ報告された情報よりも、情報数が多く、正確さが高いこと (p.101 参照), (5) 情報のネット報告量については年齢による差はないが、ネット報告量の正確さは大学生よりも小学校低学年が低くなること (p.102 参照) が示された。

以下では、これらの研究結果から、司法面接と、想起の繰り返しの効果について示唆されたことをまとめていく。

4-2. 司法面接の効果

実験結果をまとめると、FI は、(1) 安定して多くの情報量を聴き取ることができ、(2) 聴き取った情報の正確さはある程度保証されるものであるといえる。このような、FI の効果をもたらす原因としては、面接者側へ及ぼす影響と、被面接者側へ及ぼす影響がそれぞれ考えられる。

面接者側へ及ぼす影響としては、FI は面接者の個人差による影響を低減させるということがいえる。統制面接、つまり何の制約もない面接を行った場合、面接者はクローズな質問を使用しがちであることが実験 1 で示されていた。つまり、使用できる質問について面接者の裁量の幅は広く、そのために聴き取られる情報の量や質に差が広がりやすいと考えられる。これに対し、FI では、ガイドラインによって質問の指針が明確に定められているので、面接者の個人差の影響を受けず

に、ガイドラインのポイントに従って質問が進められていくので、そもそも被面接者が覚えている情報の量にある程度影響を受けるものの、安定した量の情報を引き出すことができるだろう。

また、FIでは誘導的な質問の使用が抑制されるので、統制面接よりも面接者による誘導を低減させるということがいえる。一方、統制面接では、面接者は何をどのように質問するか考えなければならないため、仮説を立てながら面接を進めていく必要があり、仮説を検証するために「それは A ですか。」というような質問をしたり、「B ですよ。」と確認したり、結果的に誘導的な質問をしがちであるといえる。そのため、統制面接を行った場合にはクローズな質問が多くなっている。さらに、面接を繰り返し行う場合には、繰り返しの過程で、面接者が 1 回目の面接で情報を得ることによって、後の面接がより誘導的になることが考えられる。これに対し、FIは質問の方法がオープン質問に限られており、また、面接の進め方についてもガイドラインによって定められているため、被面接者が報告していない内容については面接者側から質問をすることはできない。そのため、誘導が抑制されるという効果があり、このようにオープン質問主体の面接を行った結果として、報告の正確さが確保されているといえる。この知見は、先行研究とも一致している (Lamb & Fauchier, 2001)。Lamb らの研究では、実際に性的虐待が疑われたケースで 2 回以上、面接を繰り返し行っている 24 の面接データを分析し、オープン質問とクローズ質問から引き出された情報について検討している。この研究で使用された面接データは実際のケースであったため、事実がわからず、「真の」正確さを測ることはできなかった。代わりに、繰り返しの過程で変遷があった報告に関しては、少なくともいずれかの報告は誤っているものとし

て、正確さを測る指標として変遷した報告に着目し、オープン質問から引き出された情報とクローズ質問から引き出された情報のうち、変遷が見られる割合について調査した。その結果、オープン質問から引き出された情報には変遷が見られなかったが、クローズ質問から引き出された情報には多くの変遷が見られたことが示されている。本研究では、オープン質問により、報告の正確さが保たれるという結果が統計的に示されたが、実際のケースの面接データを使用した先行研究（Lamb & Fauchier, 2001）と一致した結果となっている。

次に、被面接者側へ及ぼす影響としては、FIは、統制面接よりも被面接者が誤情報に触れる機会を低減させ、刺激映像と後から得た情報の混同を抑制するといえる。同一の面接者が統制面接を繰り返した場合に報告内容の正確さが低下するのは、被面接者が目撃した出来事の情報と、面接で報告した（あるいは面接者から与えられた）誤った情報を混同してしまうことが原因として考えられる。先行研究では、特に低い年齢の子どもは、自ら体験した出来事でさえも後から与えられた情報と混同しやすいということが示されている（e.g., Bruck, Ceci, Francoeur, & Barr, 1995）。Bruckらの研究では、5歳の子どもを対象として、実際に注射を受けた後に注射の痛みについて様々なフィードバック（「注射は痛かった。」「注射は痛くなかった。」「（痛みには言及せずに）注射が終わった。」）を与えた場合に、注射の痛みについての報告に違いが出るかどうかを調査した。その結果、フィードバックを与えられた方向に、注射の痛みについての報告が誘導されることが示された。情報源の混同に関して、本研究においても同様の知見が得られている。Bruckらの研究で、特に被暗示性の高い低年齢の子どもにおいて、実際に体験した、痛みを伴うような経験でさえも

後から与えられた情報と混同する可能性があることを考慮すると、子どもに面接する際には、より慎重に誤った情報に触れさせないように注意を払う必要があるといえるだろう。

FI では、先に述べたとおり、ガイドラインに従って、オープン質問を中心に進められているため、被面接者が報告していない内容については、原則として質問することができない。そのため、被面接者は面接の中で自らが報告していない情報と接触することがほぼなく、誤情報に晒される危険性は統制面接よりも低いということがいえる。

これまで諸外国ではさまざまな FI の有効性について実証されてきたが、本稿においても諸外国における知見と同様に、NICHD ガイドラインが正確な情報をより多く聴き取るために有効であることが示された。本稿における実験では、面接者を対象とした場合に NICHD ガイドラインの要点を教示しただけにすぎないが、それでも一定の効果が示されている。FI について、体系的な研修やトレーニングを行うことで、さらなる効果が期待できるだろう。

4-3. 司法面接と想起の繰り返し

再度の確認となるが、本稿で検証してきた想起を繰り返した場合のメリットとしては、(1) 想起時の文脈が変わることの効果（思い出す手がかりが、1 回目と 2 回目で異なる）によって新たな情報が報告されることがあること、(2) 思い出したことが、さらなる記憶の検索を促進する可能性があること、(3) 1 回目の想起が、思い出す練習となり、記憶方略の工夫につながって、2 回目の想起では思い出す量が増える可能性があること、が挙げられる。一方でデメリットとしては、時間が経過するために 2 回目では記憶が減衰すること、記憶の変容や

汚染が進むこと，などが考えられる。

実験結果からは，(1) 及び (2) で考えられていた通り，想起を繰り返すことで新たな情報が報告されることが分かった。このことは，面接の繰り返しのメリットの 1 つとして考えられる。一方で，そこで得られた情報は，一貫して報告された情報よりも正確さが低いということには留意しなければならない。実験結果からは，一貫して報告されている情報は，新たに追加された情報（新出項目）や，最初に報告された後抜け落ちた情報（抜け落ち項目）よりも正確であることが示された（p.36, p.59, p.71 参照）。つまり，一貫して報告されている情報は正確さがある程度保証されているものとして信頼できると考えることができるだろう。

また，(3) については，特に年少児で練習効果が見られた（p.96）。年少児にとって，自由報告のような形式で覚えていることを他者からの促しもなく話すということは，非日常的で不慣れな状況である。そのため，1 度自由報告することを経験するということが，後の報告を促進するために重要となるといえるだろう。しかし一方で，年少児は大人よりも面接を繰り返した場合に報告の誤りが増えやすいということもある。面接で聴き取る内容についてではなくても，何らかの記憶した体験を対象とした NICHD ガイドラインに基づく面接を 1 度経験させることで，面接の構造に慣れさせることは有効かもしれない。そのように面接への構えを作らせることは，特に年少児に対して，多くの情報を聴き取るためには重要であるといえるだろう。

想起の繰り返しのデメリットに対しては，FI では統制面接よりも，想定されていたデメリットを低減させることができる可能性が示された。先に述べたとおり，想起を繰り返す過程で誘導的な質問の影響

を受けて記憶が変容したり，汚染されたりすることについては，ガイドラインに従って質問に一定の制約を設けることで抑制できることが考えられる。しかし，一方で，想起を繰り返した場合に，一定数誤情報の報告が増える可能性については考慮しなければならない。特に，1度目の面接だけで報告されていたり，2度目の面接で新たに報告されたりするような繰り返しの過程で変化する項目については留意することが求められる。これに対し，本稿の実験では，2度の面接で一貫して報告され続けた情報の正確さは高いということが示唆されており，各面接で報告された情報をしっかりと記録し，どの情報がどの面接で報告されたか吟味することが有効といえる。司法面接では録画・録音が推奨されているが，その重要性が本稿においても再確認された。

4-4. 課題と今後の展望

本稿では，司法面接の効果と司法面接と繰り返しの想起との相互作用について実験によって検討した。司法面接は原則として1度だけ行うことが推奨されているが，一定の留意の下で，必要に応じて繰り返しガイドラインに基づいた面接を行うことも許容できるといえよう。本稿における研究では，大学生や，一定の学力水準の児童を参加者として調査を行っていたが，実際の司法面接では様々な対象者を想定している。現在は，児童相談所を中心として被害確認のための面接として司法面接が使用されているが，児童の年齢は様々であり，知的に制約がある児童や，話すことに非協力的な児童もいる。ABE（p.9 参照）では，子どもだけでなく，異なる文化的背景を持つ人々や外傷体験のある人々にも配慮したガイドラインとなっている。このように，司法

面接が今後さまざまな場面で活用されていくのであれば、幅広い対象者に対してその効果を検証する必要があるだろう。諸外国では、司法面接研究が進んでいるが、日本における研究はまだ数少ないので、今後の司法面接研究の発展が期待される。

また、今回は実験室での実験だったが、実際の面接場面では、複雑な多くの環境要因が存在するだろう。司法面接の普及にともなって、実務上のデータも蓄積されつつあるところ、司法面接が出来事の報告に及ぼす影響については、今後実際のデータを活用した応用的な研究や、実務上における効果検証によって、さらなる検討が加えられることが求められる。

終章 さいごに

本稿の執筆は、面接法研究の意義について改めて考える機会となった。実際の面接場面は、面接者と被面接者の相互交流で成り立っているものであり、常に想定外のことが起きる可能性がある。構造化面接が可能な面接場面というのは、枠組みを決めることができ、被面接者もその枠組みに対して理解があり、協力的である場合であろう。情報を収集する目的で行われる面接は、大抵の場合、事実は何かが不明確であり、構造化することが難しい。事実を模索したり、時には仮説を被面接者に対してぶついたりすることも必要とされるかもしれない。つまり、司法面接のような構造化された面接が有効であるということは、限られた場面でしかないともいえる。しかし、本稿で得られた知見は単に司法面接の有効性という観点だけではなく、被面接者の報告に面接者が及ぼす影響について示唆を与えるという観点からも有意義であろう。被面接者により面接で報告された内容は、そのまま内容が吟味されず、正しい情報として無批判に受け入れられてしまうことが多分にある。しかし、被面接者による報告は、常に面接者の質問方法などの影響を受け、変容する可能性があるものであり、正しいものかどうか確認するためには、その報告がなされた経緯なども含めて正確に記録しておくことなどが必要となるということがいえる。

面接法は1つのツールでしかない。人間の相互作用で面接が成り立つ限り、正確な事実を聴き取るための万能な面接法というものは存在しないだろう。しかしその中で、司法面接の効果について意識することで、面接者が常に誘導していないかを内省し、事実を聴き取るために自らの面接方法を振り返るきっかけとなるのではないだろうか。ま

た，できる限り客観的な記録媒体により面接を記録することは，事実を見極めるうえでは重要となってくるだろう。本稿では，面接の限られた一場面を切り取って実験的に検討したものであるが，今後，基礎的研究においても，実務上においても，面接法研究が発展することが望まれる。

謝辞

本稿の執筆にあたり、まず、司法面接についてご教授いただき、修士課程からずっとあたたかくご指導していただいた、指導教官の仲真紀子先生に厚く御礼申し上げます。

そして、実験材料の撮影にご協力していただいたみなさま、また、実験に参加してくださった実験参加者のみなさま、特に、調査の趣旨にご賛同いただき、快く調査にご協力をいただいた、江別市立第一中学校、札幌市立羊丘小学校、札幌市立伏古小学校、札幌市立真駒内桜山小学校の関係者、児童、保護者のみなさまにおかれましては、心より御礼申し上げます。

また、日々さまざまな面で支えていただき、忙しい中、本稿執筆にあたり多くのアドバイスをいただきました上宮愛さん、そして仲研究室のみなさまには心から感謝いたします。

最後に、研究を進めていくにあたって、あたたかく見守り、支えていただいた家族、友人に心から感謝いたします。

引用文献

- Ackil, J.K., & Zaragoza, M.S. (1995). Developmental differences in eyewitness suggestibility and memory for source. *Journal of Experimental Child Psychology*, **60**, 57-83.
- Ackil, J.K., & Zaragoza, M.S. (1998). Memorial consequences of forced confabulation: Age differences in susceptibility to false memories. *Developmental Psychology*, **34**, 1358-1372.
- アルドリッジ M.・ウッド J. 仲真紀子(編)(2004). 子どもの面接法 北大路書房(Aldridge, M., & Wood, J. (1998). *Interviewing children: Guide for child care and forensic practitioners*. Jhon Wiley & Sons, Ltd.)
- Bartlett, F.C. (1932). *Remembering: A study in experimental and social psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bruck, M., Ceci, S.J., Frangoeur, E., & Barr, R. (1995). Hardly cried when I got my shot!" Influencing children's reports about a visit to their pediatrician. *Child Development*, **66**, 193-208.
- Bruck, M., Ceci, S.J., & Hembrooke, H. (2002). The nature of children's true and false narratives. *Developmental Review*, **22**, 520-554.
- Christianson, S.A. (1992). Emotional stress and eyewitness memory: A critical review. *Psychological Bulletin*, **112**, 284-309.
- 英国内務省・英国保健省(編) 仲真紀子・田中周子(訳)(2007). 子どもの司法面接——ビデオ録画面接のためのガイドライン(Home Office (1992). Memorandum of good practice on video recorded interviews with child witness for criminal proceedings. London:

Author.)

- Erdelyi, M. H., & Becker, J. (1974). Hypermnnesia for pictures: Incremental memory for pictures but not for words in multiple recall trials. *Cognitive Psychology*, **6**, 159-171.
- Flavell, J. H., Beach, D. R., & Chinsky, J. M. (1966). Spontaneous verbal rehearsal in a memory task as a function of age. *Child Development*, **37**, 283-299.
- Geiselman, R.E., Fisher, R.P., MacKinnon, D.P., & Holland, H.L. (1985). Eyewitness memory enhancement in the police interview: Cognitive retrieval mnemonics versus hypnosis. *Journal of Applied Psychology*, **70**, 401-412.
- Gilbert, J.A.E., & Fisher, R.P. (2006). The effects of varied retrieval cues on reminiscence in eyewitness memory. *Applied Cognitive Psychology*, **20**, 723-739.
- Goodman, G.S., & Quas, J.A. (2008). Repeated interviews and children's memory. *Psychological Science*, **17**, 386-390.
- Hershkowitz, I., & Turner, A. (2007). The effects of repeated interviewing on children's forensic statements of sexual abuse. *Applied Cognitive Psychology*, **21**, 1131-1143.
- Holliday, R.E., & Albon, A.J. (2004). Minimising misinformation effects in young children with cognitive interview mnemonics. *Applied Cognitive Psychology*, **18**, 263-281.
- 伊東裕司・佐山玲子 (2005). 情動的ストレスが記憶に及ぼす効果に対する空間的中心性と内容的中心性の影響. *法と心理学*, **4**, 107-116.

- 笠原洋子・越智啓太 (2006). イメージ化強調方略による目撃記憶の想起促進. 犯罪心理学研究, **44**, 1-9.
- Koriat, A., & Goldsmith, M. (1994). Memory in naturalistic and laboratory contexts: Distinguishing the accuracy-oriented and quantity-oriented approaches to memory assessment. *Journal of Experimental Psychology: General*, **123**, 297-315.
- Krähenbühl, S., Blades, M., & Eiser, C. (2009). The effect of repeated questioning on children's accuracy and consistency in eyewitness testimony. *Legal and Criminological Psychology*, **14**, 263-278.
- Lamb, M.E., & Fauchier, A. (2001). The effects of question type on self-contradictions by children in the course of forensic interviews. *Applied Cognitive Psychology*, **15**, 483-491.
- Lamb, M.E., Orbach, Y., Sternberg, K.J., Aldridge, J., Pearson, S., Stewart, H.L., Esplin, P.W., & Bowler, L. (2009). Use of structured investigative protocol enhances the quality of investigative interviews with alleged victims of child sexual abuse in Britain. *Applied Cognitive Psychology*, **23**, 449-467.
- Lamb, M.E., Orbach, Y., Hershkowitz, I., Esplin, P.W., & Horowitz, D. (2007). A structured forensic interview protocol improves the quality and informativeness of investigative interviews with children: A review of research using the NICHD Investigative Interview Protocol. *Child Abuse & Neglect*, **31**, 1201-1231.
- La Rooy, D., Katz, C., Malloy, L.C., & Lamb, M.E. (2010). Do We Need to Rethink Guidance on Repeated Interviews?. *Psychology, Public, Policy, and Law*, **16**, 373-392.

- La Rooy, D., Pipe, M.E., & Murray, J.E. (2005). Reminiscence and hypermnesia in children's eyewitness memory. *Journal of Experimental Child Psychology*, **90**, 235-254.
- Loftus, E.F., Miller, D.G., & Burns, H.J. (1978). Semantic integration of verbal information into a visual memory. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, **4**, 19-31.
- Loftus, E.F., & Palmer, J.C. (1974). Reconstruction of automobile destruction: An example of the interaction between language and memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **13**, 585-589.
- Loewen, S., & Philp, J. (2006). Recasts in the adult L2 classroom: Characteristics, explicitness, and effectiveness. *Modern Language Journal*, **90**, 536-556.
- Mulligan, N.W. (2005). Total retrieval time and hypermnesia: Investigating the benefits of multiple recall tests. *Psychological Research*, **69**, 272-284.
- 仲真紀子 (2012). 科学的証拠にもとづく取調べの高度化 ―司法面接の展開とPEACEモデル―. エビデンスに基づく取調べの化学化. 法と心理, **12**,
- 仲真紀子 (2012). 面接の在り方が目撃した出来事に関数児童の報告と記憶に及ぼす影響. 心理学研究, **83**, 303-313.
- 越智啓太 (2002). 認知インタビュー研究の展望. 日本認知科学会テクニカルレポート, TR-42.
- 大沼夏子・箱田裕司・大上渉 (1999). 目撃記憶の事後情報効果に対する「反対の論理」の影響. 応用心理学研究, **25**, 1-9.

- 大沼夏子・箱田裕司・大上渉 (2005). 目撃直後の自由再生は情報源誤
帰属を予防する：出来事の情動性の効果．認知心理学研究, **2**,
133-140.
- Otani, H., & Hodge, M. H. (1991). Does hypermnesia occur in recognition
and cued recall? *American Journal of Psychology*, **104**, 101–116.
- Orbach, Y., Hershkowitz, I., Lamb, M.E., Sternberg, K.J., Esplin, P.W., &
Horokowitz, D. (2000). Assessing the value of structured protocols
for forensic interviews of alleged child abuse victims. *Child Abuse &
Neglect*, **24**, 733-752.
- Pipe, M.E., Sutherland, R., Webster, M., Jones, C.H., & La Rooy, D.
(2004). Do early interviews affect children's long-term recall?.
Applied Cognitive Psychology, **18**, 823-839.
- Pool, D.A., & Lindsay, D.S. (2001). Children's Eyewitness Reports After
Exposure to Misinformation From Parents. *Journal of Experimental
Psychology: Applied*, **7**, 27-50.
- Pool, D.A., & White, L.T. (1991). Effects of question repetition on the
eyewitness testimony of children and adults. *Developmental
Psychology*, **27**, 975-986.
- Price, H.L., Roberts, K.P., & Collins, A. (2013). The quality of children's
allegations of abuse in investigative interviews containing practice
narratives. *Journal of Applied Research in Memory and Cognition*, **2**,
1-6.
- Quas, J.A., Malloy, L.C., Melinder, A., Goodman, G.S., D'Mello, M., &
Schaaf, J. (2007). Developmental Differences in the effects of
repeated interviews and interviewer bias on young children's event

- memory and false reports. *Developmental Psychology*, **43**, 823-837.
- Roediger, H.L., Jacoby, D., & McDermott, K.B. (1996). Misinformation effects in recall: Creating false memories through repeated retrieval. *Journal of Memory and Language*, **35**, 300-318.
- Slamecka, N. J., & Graf, P. (1978). Generation effect: Delineation of a phenomenon. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, **4**, 592-604.
- Snee, T. J., & Lush, D. E. (1941). Interaction of the narrative and interrogatory methods of obtaining testimony. *Journal of Psychology*, **11**, 229-236.
- Sternberg, K.J., Lamb, M.E., Orbach, Y., Esplin, P.W., & Mitchell, S. (2001). Use of a Structured Investigate Protocol Enhances Young Children's Responses to Free-Recall Prompts in the Course of Forensic Interviews. *Journal of Applied Psychology*, **86**, 997-1005.
- 立川奈津子 (2009). 事後情報における誤誘導語句の位置が記憶の変容に及ぼす影響. 北海道大学文学部卒業論文(未公刊).
- Zaragoza, M.S., Payment, K.E., Ackil, J.K., Drivdahl, S.B., & Beck, M. (2001). Interviewing witness: Forced confabulation and confirmatory feedback increase false memories. *Psychological Science*, **12**, 473-477.

付録

付録 1. 実験 1 から 3 で使用した DVD キャプチャー



付録 2. 面接者に対する教示文（FI 条件）

以下の手順に従って、面接を行ってください。

* 面接は、あとで書き起こしをするために全てビデオ録画と音声録音します。

* 面接時間は、長くても 10～15分程度で終わるようにしてください。

① 面接の始め方

「今日は○月△日、時刻は×時□分です。」

「今から【面接される人の名前】さんに、北海道大学内の面接室で面接を行います。」

「私の名前は、【自分の名前】です。宜しくお願いします。」

② 約束事の確認

「ここでは、あなたがわかっている事実だけを話してください。」

「私の質問や答えがわからないときには、わからないと言ってください。」

「私が間違ったことを言ったら、間違っていると言ってください。」

③ ラポール（*まずは、話すことに慣れてもらうためにする）

今日ここに来るまでどんなことがあったかを尋ねる。

④ 事実の聴き取り

まず最初に、

「先程見た映像について、全て、どんなことでもいいので話してください。」から始める。

1つ質問したあとには、「それから？」「あとは？」と相手に多く話してもらうように促す。

使って良い質問

「なんでもいいので話してください」

「〇〇が起ってから××が起こるまでの間について詳しく話してください」

「先程言っていた、△△について詳しく話してください」

「いつ」「どこ」「だれ」「なに」

使ってはいけない質問

「それは〇〇ですか？（ですよね？）」

「Aですか？Bですか？」

④ 面接の終わり方

「他に話しておきたいことはありますか？」

「今は、×時□分です。」

「これで面接を終わります。」

付録 3. 面接者に対する教示文（統制条件）

以下の手順に従って，面接を行ってください。

* 面接は，あとで書き起こしをするために全てビデオ録画と音声録音します。

* 面接時間は，長くても 10～15分程度で終わるようにしてください。

① 面接の始め方

「今日は○月△日，時刻は×時□分です。」

「今から【面接される人の名前】さんに，北海道大学内の面接室で面接を行います。」

「私の名前は，【自分の名前】です。宜しくお願いします。」

② ラポール（*まずは，話すことに慣れてもらうためにする）

今日ここに来るまでどんなことがあったかを尋ねる。

③ 事実の聴き取り

できるだけ詳しく，たくさんの情報を聴き取る。

④ 面接の終わり方

「今は，×時□分です。」

「これで面接を終わります。」

付録 4. 実験参加承諾書

参加依頼および承諾書

この書類は調査の概要を確認いただき、参加の意志をお尋ねするためのものです。

研究題目:面接場面の諸問題に関する基本的調査

研究目的:司法面接法は、司法手続き上で正確な供述を得るために開発されている面接の技法です。本研究は、司法面接場面に関するさまざまな影響について調査することを目的としています。そのため、面接とは関係がないように思われる課題も、面接法研究の1つとして行うことがあります。本で行う実験は、具体的には、参加者の皆さんにいくつかの課題に参加していただきます。調査には事前にご説明できない内容がございますが、先にそれを説明してしまうと、誰もが気づくということになり、調査の目的を果たせません。そのため、説明は調査後になってしまふことをお許しください。

調査終了後、調査者は、調査に関するいかなる疑問や質問にもお答えします。なお、本調査は条件による違いを測定するためのものであり、個人の能力を測定するものではありません。

研究日時: 2013年 月 日～ 月 日

参加時間:およそ30分

謝礼:参加時間に応じて、現金でお支払いします。

研究手続きおよび測定項目:課題の遂行及び司法面接に関する調査に参加して頂きます。

研究に参加していただく場合のリスク及び補償:本研究の面接に参加することによって、疲労感が生じる可能性もあります。どのような場合も、休憩をとったり、調査を取りやめることができます。

個人データの管理およびプライバシーの保護:データは氏名と切り離し、統計的に処理を行うため、プライバシーは確実に保護されます。個人にご迷惑がかかることは全くありません。

北海道大学大学院文学研究科 人間システム科学専攻 心理システム科学講座

井上愛弓

仲真紀子

連絡先; 011-706-3039 (井上)

本実験への参加の選択

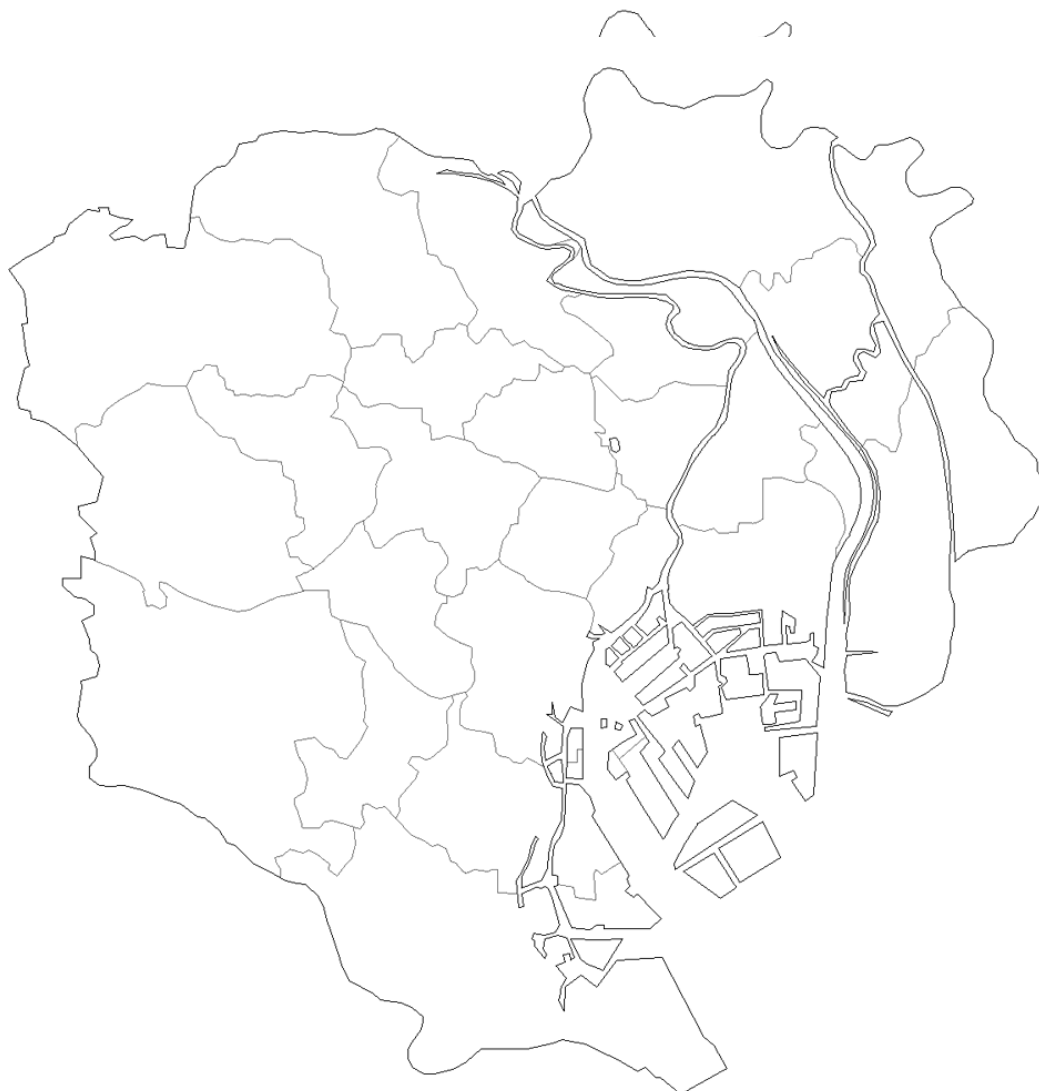
本実験への参加は自由です。参加を希望される場合は、承諾書の記載内容を確認の上、所定の欄にサインして下さい。また、何らかの理由で実験を継続できなくなった場合や、実験中に体調が悪くなった場合など、いつでも参加を離脱・辞退することが出来ます。

承諾書

本実験に関する上記の内容を十分に確認いたしました。その上で、本実験の意義を認め、自主的に参加することを承諾いたします。

今日の日付: 年 月 日
署 名: _____

付録 5. 色塗り課題（練習）



付録 6. 色塗り課題（本番）



付録 7. 面接参加承諾書

ビデオ録画及び音声録音についての承諾書

司法面接では、ビデオ録画及び音声録音を行います。これは、英国を中心として推奨されている司法面接の手法で、実施されているものです。これらの媒体による面接内容の記録により、面接内容全てが証拠として残り、取調べの可視化にもつながる可能性があります。

本実験において、これらの資料は、主に面接内容の書き起こしや確認のために使用致します。研究目的以外での使用や、無断転用など、実験参加者の皆様に迷惑がかかることはありません。

北海道大学大学院文学研究科 人間システム科学専攻 心理システム科学講座

井上愛弓
仲真紀子

連絡先； 011-706-3039（井上）

承諾書

本実験に関する上記の内容を十分に確認いたしました。その上で、本実験の意義を認め、自主的に参加することを承諾いたします。

今日の日付： 年 月 日
署 名（ご氏名）：_____

付録 8. 正答項目リスト

1回目					2回目						
	種類	調書		録音			種類	調書		録音	
		正	誤	正	誤			正	誤	正	誤
▼場面						▼場面					
雑貨屋(花屋)	場所状況					雑貨屋(花屋)	場所状況				
晴れ	場所状況					晴れ	場所状況				
夏	場所状況					夏	場所状況				
屋間	場所状況					屋間	場所状況				
駐車場	場所状況					駐車場	場所状況				
コンクリート	場所状況					コンクリート	場所状況				
車	場所状況					車	場所状況				
車通り多い	場所状況					車通り多い	場所状況				
▼登場人物						▼登場人物					
店員	人物					店員	人物				
女	人物					女	人物				
中年(40代ー50代)	人物					中年(40代ー50代)	人物				
小太り	人物					小太り	人物				
茶髪(黒髪)	人物					茶髪(黒髪)	人物				
髪を束ねる	人物					髪を束ねる	人物				
茶色(黒)の	人物					茶色(黒)の	人物				
半袖	人物					半袖	人物				
ネックレス	人物					ネックレス	人物				
男	人物					男	人物				
若い(20代前半)	人物					若い(20代前半)	人物				
170センチ前後	人物					170センチ前後	人物				
黒髪	人物					黒髪	人物				
ワックスでセット	人物					ワックスでセット	人物				
赤い	人物					赤い	人物				
Tシャツ	人物					Tシャツ	人物				
ロゴ	人物					ロゴ	人物				
前面に	人物					前面に	人物				
黒字で	人物					黒字で	人物				
アーチ状の	人物					アーチ状の	人物				
英字(BOSTON)	人物					英字(BOSTON)	人物				
背面に	人物					背面に	人物				
黒字で	人物					黒字で	人物				
数字(50)	人物					数字(50)	人物				
薄い水色の	人物					薄い水色の	人物				
ジーンズ	人物					ジーンズ	人物				
ハーフパンツ	人物					ハーフパンツ	人物				
ステッチ付	人物					ステッチ付	人物				
赤い	人物					赤い	人物				
スニーカー	人物					スニーカー	人物				
右手に	人物					右手に	人物				
時計	人物					時計	人物				
左手に	人物					左手に	人物				
プレスレット	人物					プレスレット	人物				
ネックレス	人物					ネックレス	人物				
女	人物					女	人物				
若い(20代前半)	人物					若い(20代前半)	人物				
155センチ前後	人物					155センチ前後	人物				
茶髪(金髪)	人物					茶髪(金髪)	人物				
ロングヘア	人物					ロングヘア	人物				
センター分け	人物					センター分け	人物				
白い	人物					白い	人物				
レース素材	人物					レース素材	人物				
半袖	人物					半袖	人物				
ジーンズ	人物					ジーンズ	人物				
ハーフパンツ	人物					ハーフパンツ	人物				

付録 8 (続き)

客(店員2でも可)	人物				客(店員2でも可)	人物				
女性	人物				女性	人物				
中年(40代-50代)	人物				中年(40代-50代)	人物				
小太り	人物				小太り	人物				
黒髪	人物				黒髪	人物				
パーマ	人物				パーマ	人物				
ショートヘア	人物				ショートヘア	人物				
ボーダー	人物				ボーダー	人物				
白と青	人物				白と青	人物				
ワンピース	人物				ワンピース	人物				
ネックレス	人物				ネックレス	人物				
▼場面1					▼場面1					
店員が	人物				店員が	人物				
レジで	場所状況				レジで	場所状況				
水色の花	事物				水色の花	事物				
鉢植えを	事物				鉢植えを	事物				
いじっている(作業している)	活動				いじっている(作業している)	活動				
ベルの音	場所状況				ベルの音	場所状況				
店員が	人物				店員が	人物				
「いらっしゃいませ」	活動				「いらっしゃいませ」	活動				
挨拶する	活動				挨拶する	活動				
男	人物				男	人物				
左側(先)	場所状況				左側(先)	場所状況				
女	人物				女	人物				
右側(後から)	場所状況				右側(後から)	場所状況				
店に入る	活動				店に入る	活動				
男	人物				男	人物				
女	人物				女	人物				
場所を変わる	活動				場所を変わる	活動				
こそこそ話す	活動				こそこそ話す	活動				
男が	人物				男が	人物				
女から	人物				女から	人物				
カバン	事物				カバン	事物				
茶色	事物				茶色	事物				
皮素材					皮素材					
ショルダー-ort-ト(肩かけ)	事物				ショルダー-ort-ト(肩かけ)	事物				
A3サイズ(大きめ)	事物				A3サイズ(大きめ)	事物				
受取る	活動				受取る	活動				
右肩に	活動				右肩に	活動				
かける	活動				かける	活動				
▼場面2					▼場面2					
男	人物				男	人物				
店の奥へ	場所状況				店の奥へ	場所状況				
移動する	活動				移動する	活動				
男	人物				男	人物				
客と	人物				客と	人物				
思いきり	活動				思いきり	活動				
ぶつかる	活動				ぶつかる	活動				
男	人物				男	人物				
無言	活動				無言	活動				
客	人物				客	人物				
無言	活動				無言	活動				
客	人物				客	人物				
黄色い	事物				黄色い	事物				
花	事物				花	事物				
持って	活動				持って	活動				
移動する	活動				移動する	活動				
男	人物				男	人物				
棚まで	場所状況				棚まで	場所状況				
セール品コーナー	場所状況				セール品コーナー	場所状況				
移動する	活動				移動する	活動				

付録 8 (続き)

▼場面3					▼場面3					
男	人物				男	人物				
ギョロギョロ(挙動不審)	活動				ギョロギョロ(挙動不審)	活動				
右手で	活動				右手で	活動				
ピンクの	事物				ピンクの	事物				
マニキュアを	事物				マニキュアを	事物				
黒いキャップ	事物				黒いキャップ	事物				
3本	事物				3本	事物				
棚から	場所状況				棚から	場所状況				
右側	場所状況				右側	場所状況				
4段	事物				4段	事物				
木造	事物				木造	事物				
白	事物				白	事物				
一番上	場所状況				一番上	場所状況				
取る	活動				取る	活動				
左手で	活動				左手で	活動				
持つ	活動				持つ	活動				
眺める	活動				眺める	活動				
ポケット	事物				ポケット	事物				
うしろ	事物				うしろ	事物				
左	事物				左	事物				
入れる	活動				入れる	活動				
雑貨	事物				雑貨	事物				
缶(アルミor銀色のもの)	事物				缶(アルミor銀色のもの)	事物				
楕円形	事物				楕円形	事物				
黄色い	事物				黄色い	事物				
車	事物				車	事物				
棚から	場所状況				棚から	場所状況				
左側	場所状況				左側	場所状況				
3段	事物				3段	事物				
木造	事物				木造	事物				
茶色	事物				茶色	事物				
中段	場所状況				中段	場所状況				
手に取る	活動				手に取る	活動				
眺める	活動				眺める	活動				
カバンに	事物				カバンに	事物				
右肩にかける	事物				右肩にかける	事物				
入れる	活動				入れる	活動				
▼場面4					▼場面4					
男	人物				男	人物				
入り口に	場所状況				入り口に	場所状況				
移動する	活動				移動する	活動				
女を	人物				女を	人物				
右手で	活動				右手で	活動				
呼ぶ(合図する)	活動				呼ぶ(合図する)	活動				
ドアを	事物				ドアを	事物				
ガラス張り	事物				ガラス張り	事物				
手動	事物				手動	事物				
開ける	活動				開ける	活動				
男	人物				男	人物				
先に	場所状況				先に	場所状況				
出る	活動				出る	活動				
女	人物				女	人物				
後に	場所状況				後に	場所状況				
出る	活動				出る	活動				
ベルの音	場所状況				ベルの音	場所状況				
男	人物				男	人物				
ドアを閉める	活動				ドアを閉める	活動				

付録 9. 実験 4 で使用した DVD キャプチャー



付録 10. 実験参加承諾書

参加依頼および承諾書

研究題目：お話を聞く方法についての調査

研究目的：この調査は、みなさんからお話を聞くときに気をつけなければならないことを調べるために行うものです。関係ないと思うような作業をしてもらうこともあります。みなさんに負担がかかることはありません。調査の間、体調が悪くなったり、続けられない事情があったときには、いつでも途中でやめることができます。調査が終わったあと、調査についての質問があれば、どんなことでもお答えします。最後に、この調査は、みなさんの能力をはかるためのものではありません。みなさんに作業してもらったものは、調査者以外の人が見ることはありません。プライバシーはしっかりと守られます。

研究日時： 月 日～ 月 日

参加時間：20 分×2 回

謝 礼：最後に、図書カード 500 円分をお渡しします。

北海道大学大学院文学研究科 人間システム科学専攻 心理システム科学講座

井上愛弓
澤田尚宏
仲真紀子

連絡先：011-706-2306（司法面接プロジェクト）

承諾書

- 調査についての注意事項について説明を受けました。
- この調査に自主的に参加します。

今日の日付： 年 月 日

お子さまのお名前： _____
生年月日： _____ 年 _____ 月 _____ 日生（ _____ 才）

保護者さまのお名前： _____

付録 11. 正答項目リスト

1回目					2回目						
		調書		録音			種類	調書		録音	
		正	誤	正	誤			正	誤	正	誤
女性(A)への言及						女性(A)への言及					
女性	人物					女性	人物				
大学生	人物					大学生	人物				
スレンダー	人物					スレンダー	人物				
155センチ	人物					155センチ	人物				
セミロングヘア	人物					セミロングヘア	人物				
パーマ	人物					パーマ	人物				
前髪センター分け	人物					前髪センター分け	人物				
黒髪	人物					黒髪	人物				
白い	人物					白い	人物				
Tシャツ	人物					Tシャツ	人物				
黒い	人物					黒い	人物				
ハーフパンツ	人物					ハーフパンツ	人物				
サンダル	人物					サンダル	人物				
レギンス	人物					レギンス	人物				
カバン	事物					カバン	事物				
肩掛けカバン	事物					肩掛けカバン	事物				
茶色	事物					茶色	事物				
左手に	人物					左手に	人物				
ページの	人物					ページの	人物				
シュシュ	人物					シュシュ	人物				
場面1						場面1					
Aが	人物					Aが	人物				
黒い	事物					黒い	事物				
ミニベロ型の	事物					ミニベロ型の	事物				
カゴなしの	事物					カゴなしの	事物				
自転車を	事物					自転車を	事物				
こいでいる	活動					こいでいる	活動				
カバンをハンドルにかける	事物					カバンをハンドルにかける	事物				
道路	場所					道路	場所				
片側1車線	場所					片側1車線	場所				
赤信号	場所					赤信号	場所				
白い車	場所					白い車	場所				
停車している	場所					停車している	場所				
青信号(進行方向と交差)	場所					青信号(進行方向と交差)	場所				
自転車1台通過	場所					自転車1台通過	場所				
住宅街	場所					住宅街	場所				
茶色い	事物					茶色い	事物				
マンション	事物					マンション	事物				
場面2						場面2					
Aが	人物					Aが	人物				
停車する	活動					停車する	活動				
公園のわき	場所					公園のわき	場所				
ワンスাইドのスタンド	事物					ワンスাইドのスタンド	事物				
鍵をかけない	活動					鍵をかけない	活動				
A'が	人物					A'が	人物				
女性	人物					女性	人物				
20代	人物					20代	人物				
黒い	人物					黒い	人物				
Tシャツ	人物					Tシャツ	人物				
白い	人物					白い	人物				
ハーフパンツ	人物					ハーフパンツ	人物				
セミショート	人物					セミショート	人物				
自転車で	活動					自転車で	活動				
ママチャリ	事物					ママチャリ	事物				
すれ違う	活動					すれ違う	活動				
目を合わせず	活動					目を合わせず	活動				
携帯電話	事物					携帯電話	事物				
持っている(メールしている)	活動					持っている(メールしている)	活動				

付録 11（続き）

場面3					場面3				
Aが	人物				Aが	人物			
公園に入る	活動				公園に入る	活動			
公園の門ではないところから	場所				公園の門ではないところから	場所			
カバンを右肩にかける	人物				カバンを右肩にかける	人物			
髪をかける	活動				髪をかける	活動			
右耳に	活動				右耳に	活動			
通行人	人物				通行人	人物			
公園の外	場所				公園の外	場所			
自転車	事物				自転車	事物			
白い	事物				白い	事物			
乗用車	事物				乗用車	事物			
白い	事物				白い	事物			
ワゴン車	事物				ワゴン車	事物			
公園への言及					公園への言及				
石製の	事物				石製の	事物			
外堀	事物				外堀	事物			
複数の	事物				複数の	事物			
遊具	事物				遊具	事物			
入り口付近に	事物				入り口付近に	事物			
鉄製の	事物				鉄製の	事物			
球体の遊具	事物				球体の遊具	事物			
入り口付近に	事物				入り口付近に	事物			
カラフルな	事物				カラフルな	事物			
鉄棒	事物				鉄棒	事物			
奥に	事物				奥に	事物			
水色の	事物				水色の	事物			
シーソー	事物				シーソー	事物			
奥に	事物				奥に	事物			
トイレ	事物				トイレ	事物			
真ん中に	事物				真ん中に	事物			
水色の	事物				水色の	事物			
うんてい	事物				うんてい	事物			
真ん中に	事物				真ん中に	事物			
すべりだい	事物				すべりだい	事物			
水色	事物				水色	事物			
2レーン	事物				2レーン	事物			
子ども	人物				子ども	人物			
女の子	人物				女の子	人物			
3人	人物				3人	人物			
遊んでいる	活動				遊んでいる	活動			
ベンチの後ろに	事物				ベンチの後ろに	事物			
ブランコ	事物				ブランコ	事物			
2レーン	事物				2レーン	事物			
ベンチの前に	事物				ベンチの前に	事物			
砂場	事物				砂場	事物			
ベンチの後ろに	事物				ベンチの後ろに	事物			
石製の	事物				石製の	事物			
オブジェ	事物				オブジェ	事物			
芝生	場所				芝生	場所			
砂グラウンド	場所				砂グラウンド	場所			
多くの	場所				多くの	場所			
木々	場所				木々	場所			
場面4					場面4				
Aが	人物				Aが	人物			
ベンチまで	場所				ベンチまで	場所			
歩く	活動				歩く	活動			
15秒くらい	場所				15秒くらい	場所			

付録 11（続き）

場面5					場面5				
Aが	人物				Aが	人物			
ベンチに	場所				ベンチに	場所			
複数	事物				複数	事物			
木製	事物				木製	事物			
背もたれなし	事物				背もたれなし	事物			
座る	活動				座る	活動			
カバンを置く	活動				カバンを置く	活動			
ひざの上	場所				ひざの上	場所			
カバンを置く	活動				カバンを置く	活動			
Aの右側	場所				Aの右側	場所			
ベンチの上	場所				ベンチの上	場所			
カバンから取り出す	活動				カバンから取り出す	活動			
本	事物				本	事物			
黄色	事物				黄色	事物			
分厚い	事物				分厚い	事物			
B5サイズ	事物				B5サイズ	事物			
木	事物				木	事物			
ベンチの後ろ	事物				ベンチの後ろ	事物			
石製の	事物				石製の	事物			
オブジェ	事物				オブジェ	事物			
場面6					場面6				
Aが	人物				Aが	人物			
本を読む	活動				本を読む	活動			
膝の上に本を置く	活動				膝の上に本を置く	活動			
本の途中から	活動				本の途中から	活動			
1ページめくる	活動				1ページめくる	活動			
子ども	人物				子ども	人物			
3人	人物				3人	人物			
5-12歳くらい	人物				5-12歳くらい	人物			
はしゃぐ	人物				はしゃぐ	人物			
背の高さばらばら	人物				背の高さばらばら	人物			
Bが	人物				Bが	人物			
ブランコに乗る	活動				ブランコに乗る	活動			
座ってこぐ	活動				座ってこぐ	活動			
高くこぐ	活動				高くこぐ	活動			
2人が	人物				2人が	人物			
見ている	活動				見ている	活動			
へりに座る	活動				へりに座る	活動			
Cが	人物				Cが	人物			
しゃがむ	活動				しゃがむ	活動			
Dが	人物				Dが	人物			
Aの方に	場所				Aの方に	場所			
走って来る	活動				走って来る	活動			
白い	事物				白い	事物			
ワゴン車	事物				ワゴン車	事物			
公園外で発車する	活動				公園外で発車する	活動			
白い	事物				白い	事物			
建物	事物				建物	事物			
Bへの言及					Bへの言及				
女の子	人物				女の子	人物			
ピンクの	人物				ピンクの	人物			
Tシャツ	人物				Tシャツ	人物			
ジーパン	人物				ジーパン	人物			
ピンクの	人物				ピンクの	人物			
帽子	人物				帽子	人物			

付録 11（続き）

Cへの言及					Cへの言及					
女の子	人物				女の子	人物				
ロングヘア	人物				ロングヘア	人物				
白い	人物				白い	人物				
トップス	人物				トップス	人物				
ハーフパンツ	人物				ハーフパンツ	人物				
Dへの言及	人物				Dへの言及	人物				
女の子	人物				女の子	人物				
白い	人物				白い	人物				
帽子	人物				帽子	人物				
白い	人物				白い	人物				
Tシャツ	人物				Tシャツ	人物				
ハーフパンツ	人物				ハーフパンツ	人物				
全体を通しての言及					全体を通しての言及					
晴れ	場所				晴れ	場所				
日中	場所				日中	場所				
夏	場所				夏	場所				